流山市上新宿貝塚発掘調査報告書

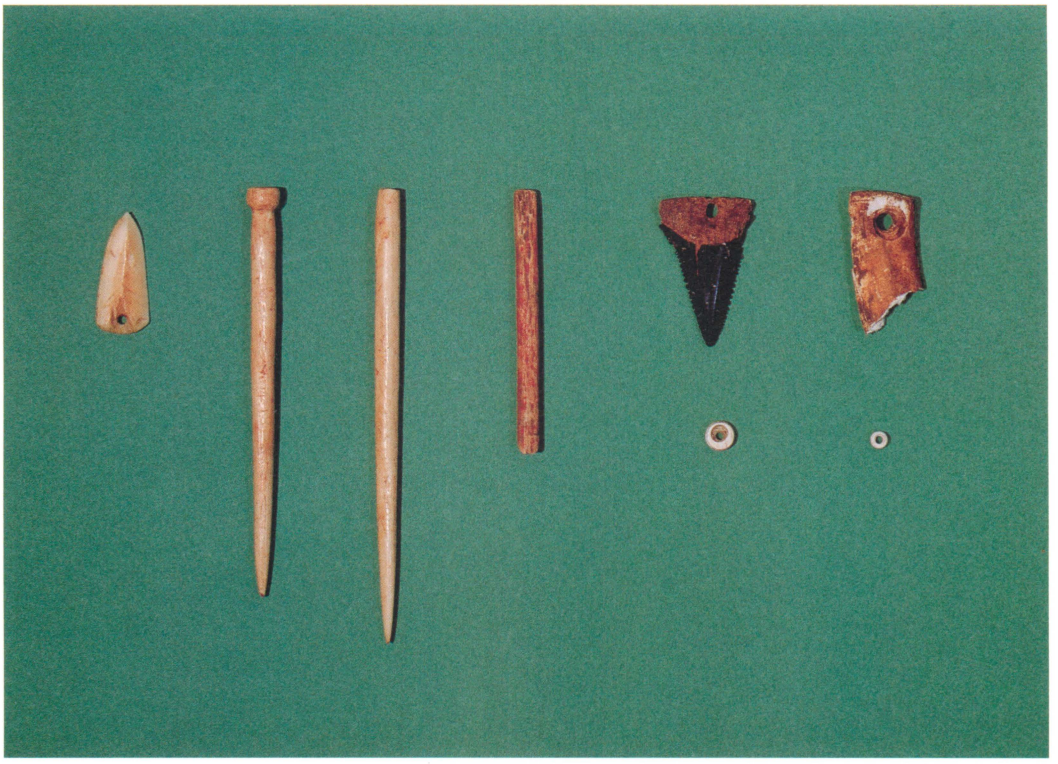
平成６年度

財団法人　千葉県文化財センター

流山市上新宿貝塚発掘調査報告書

平成 6 年度

財団法人　千葉県文化財センター



上新宿貝塚出土の骨角牙製装身具

9 T貝層の検出状況

序

縄文時代の千葉県は浅い入江が複雑に入り組んで，当時の人々が生活するのに格好の場所でした。とくに食料の蛋白源となる豊富な魚・貝類が豊富で，集落で消化されるだけではなく，物々交換などの交易の対象ともなったと考えられています。貝塚はそうした魚・貝類を加工した残滓が堆積してできたもので，通常は腐朽してしまう魚骨などの遺物も，大量のカルシウムによって，あたかも「タイムカプセル」のなかに納められたように保存されてきたので，貝塚は様々な情報を提供をしてくれる宝庫となっております。

ところで，近年の開発の波は首都圏に位置する本県も例外ではなく，景観の変化も著しいものがあるのも事実で，埋蔵文化財にも少なからず影響を及ぼしつつあります。

このため千葉県教育委員会では，昭和63年度から国の補助金を得て，県内に所在する貝塚の測量及び確認調査を実施し，その成果をもとに，貝塚を保護し，活用するための基礎資料としてきました。今年度は東葛地区の貝塚のなかでも有数の規模をもち，明治時代から学会にも知られていた流山市上新宿貝塚を財団法人千葉県文化財センターに委託して調査を実施しました。

調査の結果，北側と南側に展開する弧状の貝層については，縄文時代後期から晩期にかけて形成された貝塚であることが分かりました。集落を構成していた竪穴住居も確認され，集落の営まれた範囲を限定することが可能となりました。また，出土遺物にも，土偶や土版などの特殊な遺物や動物の牙・角を利用した装飾品・道具類があり，当時の生活を知る上で貴重な調査資料を得ることができました。

このたび，これらの調査成果を報告書として刊行するにあたって，本書が学術資料だけではなく文化財保護のために，広く一般県民の方々にも活用されることを願って止みません。

最後に，文化庁をはじめ，地元の流山市教育委員会，土地所有者をはじめとする地元関係者，そして調査を担当された財団法人千葉県文化財センターの皆様に心からお礼申し上げます。

平成７年３月

千葉県教育庁生涯学習部
文化課長　森　　成　吉

凡　　例

1．本書は，流山市上新宿字向宿237他に所在する上新宿貝塚（遺跡コード220－017）の発掘調査報告書である。

2．本事業は，千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている県内主要貝塚発掘調査の第７年次にあたるもので，調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。

3．発掘調査は，平成６年10月３日から同年10月31日までであり，調査面積は200㎡である。整理作業及び報告書作成は，平成６年11月１日から同年12月28日までである。

4．調査・整理及び報告書作成は，調査研究部長　西山太郎，印西調査事務所長　谷　旬の指導のもとに，主任技師　岡田光広が担当した。

5．調査の実施に当たっては，流山市教育委員会，土地所有者　伊藤直彦，青木ふく子，岩佐豊吉，伊藤光男，志賀文雄，伊藤三郎，豊島啓行，渋谷義博，渋谷正次の各氏を初めとする地元の皆様から多大の御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第です。

6．現地調査から報告書の作成に至るまで，下記の諸氏から多くの御協力，御指導をいただいた。特に脊椎動物の鑑定には，千葉県立中央博物館　小宮　孟氏の協力を得た。（敬称略）

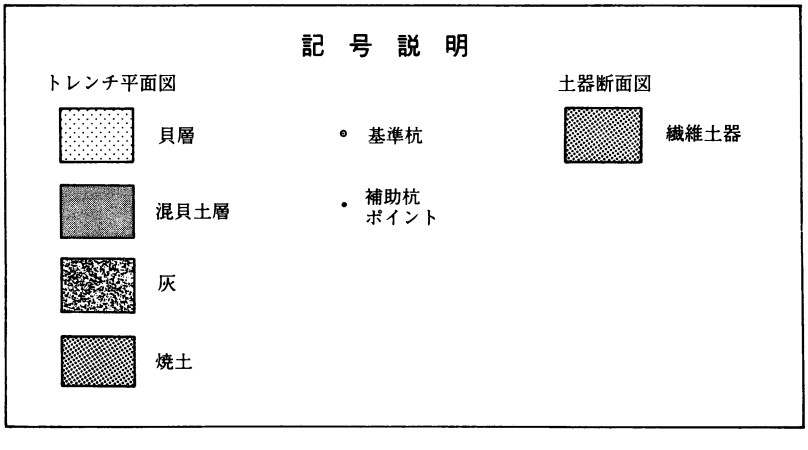
川根正教，増崎勝仁，阿部明義，岩城克洋，小栗信一郎，小宮　孟，高山　優，辺見秀子，牟田行秀

7．本書に使用した地形図及び空中写真は，以下のとおりである。

第１図　国土地理院発行の1:50,000地形図（野田）

第36図　流山市発行の1:2,500地形図　流山市地形図ＮＯ.20，ＮＯ.21，ＮＯ.25，ＮＯ.26を合成し，1:5,000に縮尺使用。

図版１　京葉測量株式会社による平成６年撮影の空中写真を使用。



本　文　目　次

序文
凡例
Ⅰ．はじめに …… 1
　1．上新宿貝塚の位置と環境 …… 1
　2．周辺の遺跡 …… 1
　3．研究略史 …… 3
Ⅱ．調査の概要 …… 5
　1．調査の経過 …… 5
　2．調査方法 …… 5
　3．各トレンチの状況 …… 6
Ⅲ．出土遺物の概要 …… 15
　1．土器 …… 15
　2．土製品 …… 34
　3．石器 …… 36
　4．骨角牙製品 …… 39
　5．動物遺体 …… 41
　6．貝サンプル …… 42
Ⅳ．まとめ …… 48
　1．貝層の分布とその形成時期について …… 48
　2．遺構の分布と集落の範囲 …… 49
　3．おわりに …… 51

図　版　目　次

巻頭図版　上新宿貝塚出土の骨角牙製装身具
　　９Ｔ貝層の検出状況
図版１　上新宿貝塚周辺の航空写真
図版２　１．遺跡遠景
　　２．遺跡近景
　　３．遺跡近景
図版３　各トレンチの状況(1)
図版４　各トレンチの状況(2)
図版５　各トレンチの状況(3)
図版６　１．１Ｔ出土土器
　　２．１Ｔ－００１出土土器
図版７　１．３Ｔ出土土器
　　２．４Ｔ出土土器(1)
図版８　４Ｔ出土土器(2)

図版９　５Ｔ出土土器
図版10　５Ｔ－００１出土土器
図版11　１．６Ｔ出土土器
　　２．７Ｔ出土土器
　　３．８Ｔ出土土器
図版12　９Ｔ出土土器
図版13　１．10Ｔ－００１出土土器
　　２．10Ｔ－００２出土土器
　　３．11Ｔ－００１出土土器
図版14　１．11Ｔ出土土器
　　２．石器
図版15　１．土製品
　　２．骨角牙製品

表　目　次

表１　トレンチ杭座標値一覧 …… 6
表２　土製品属性表 …… 35
表３　石器組成表(1) …… 36
表４　石器属性表 …… 38
表５　石器組成表(2) …… 39
表６　骨角牙製品属性表 …… 40
表７　動物遺存体種名一覧 …… 41
表８　貝類同定結果・計測分布(1) …… 44
表９　貝類同定結果(2) …… 45
表10　貝類同定結果(3) …… 46
表11　計測分布(2) …… 47

挿　図　目　次

第１図　上新宿貝塚と周辺の遺跡 …… 2
第２図　1964・1965・1966年の調査 …… 4
第３図　１Ｔ …… 7
第４図　２Ｔ・３Ｔ・４Ｔ …… 8
第５図　５Ｔ・５Ｔ－００１ …… 10
第６図　６Ｔ・７Ｔ・８Ｔ・９Ｔ …… 12
第７図　10Ｔ …… 13
第８図　11Ｔ …… 14
第９図　出土土器組成 …… 15
第10図　出土土器数量比 …… 15
第11図　１Ｔ出土土器 …… 16
第12図　１Ｔ－００１出土土器 …… 17
第13図　１Ｔ－００３出土土器 …… 18
第14図　３Ｔ出土土器 …… 18

第15図　４Ｔ出土土器(1) …… 19
第16図　４Ｔ出土土器(2) …… 20
第17図　４Ｔ出土土器(3) …… 21
第18図　５Ｔ出土土器(1) …… 23
第19図　５Ｔ出土土器(2) …… 24
第20図　５Ｔ－００１出土土器 …… 26
第21図　６Ｔ出土土器 …… 27
第22図　７Ｔ出土土器 …… 28
第23図　８Ｔ出土土器 …… 29
第24図　９Ｔ出土土器(1) …… 30
第25図　９Ｔ出土土器(2) …… 31
第26図　10Ｔ－００１出土土器 …… 32
第27図　10Ｔ－００２出土土器 …… 33
第28図　11Ｔ出土土器 …… 33
第29図　11Ｔ－００１出土土器 …… 34
第30図　土製品(1) …… 35
第31図　土製品(2) …… 36
第32図　石器(1) …… 37
第33図　石器(2) …… 38
第34図　骨角牙製品 …… 40
第35図　遺構配置模式図 …… 49
第36図　上新宿貝塚周辺の地形 ……図版扉裏
付図１　上新宿貝塚地形測量図 …… 巻末

Ⅰ．はじめに

1．上新宿貝塚の位置と環境（第１図，第36図，図版１）

上新宿貝塚は流山市上新宿字向宿237ほかに所在する。東武鉄道野田線の初石駅から，西に約１㎞の距離にある。流山市は，江戸川に面して南北に長い市域を有しているが，遺跡はそのほぼ中央に位置する。付近は標高14ｍから19ｍを測る台地上及び斜面であるが，旧地形は現状での観察よりも複雑で，これらは発掘したトレンチにも現れている。

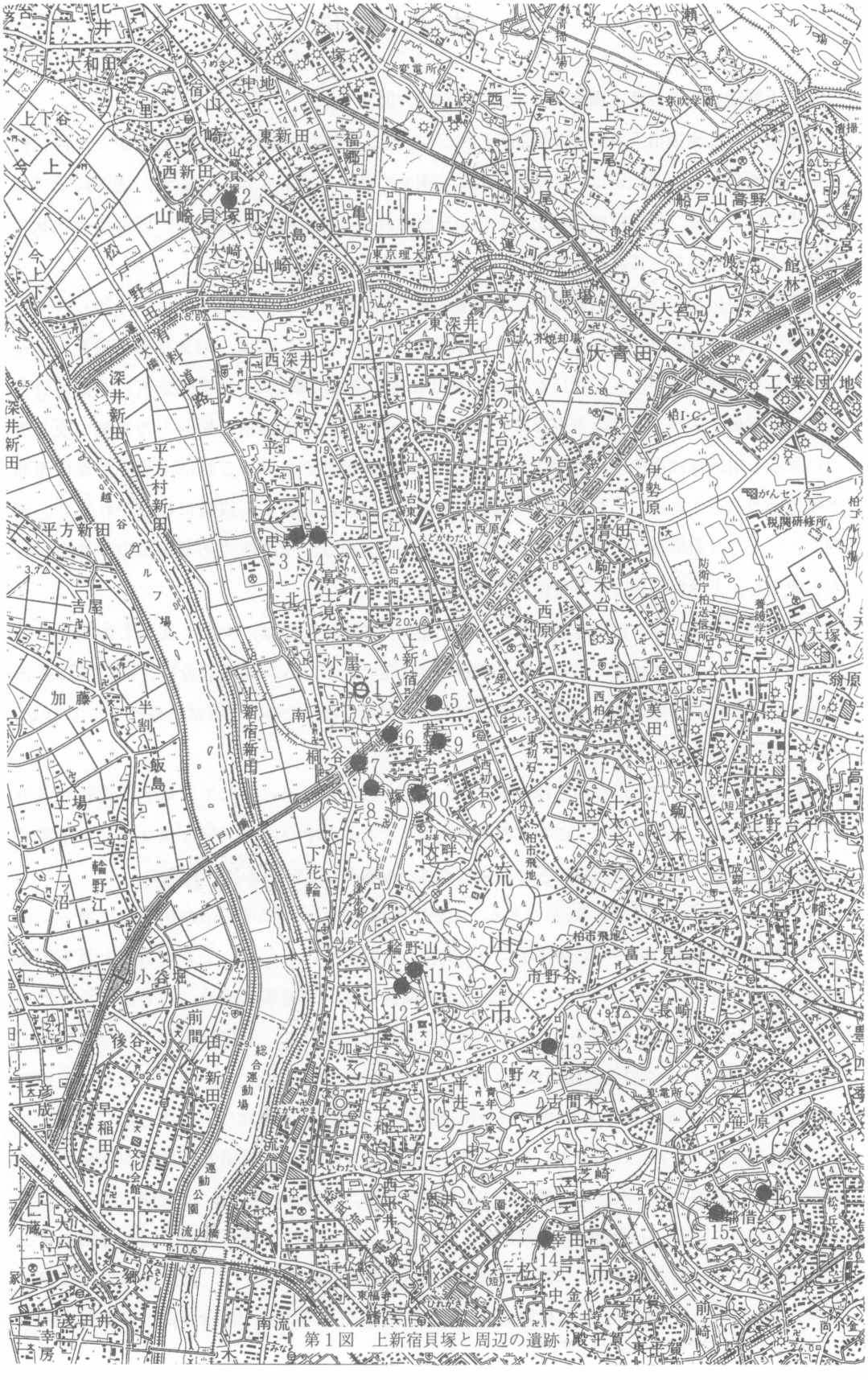
現在の江戸川が流れる中川低地が，縄文海進時に古奥東京湾であったことはよく知られている。そして，そこから開析された小支谷にも海水が及んでいたことは，地質学的な調査によっても明らかにされている（遠藤ほか1989)。流山市内の遺跡の多くは，古奥東京湾による開析谷に面して立地するが，開析は市南部ほど発達する。そのうち，流山市と松戸市の市境となる坂川のある坂川低地は古流山湾と呼ばれ，最も大規模な開析谷である。これは，現在の流山市鰭ヶ崎付近から東へ進入し，対岸に松戸市幸田を望む芝崎付近でさらに複雑に枝分かれする。市内で次に大きな開析谷は，下花輪支谷と呼ばれるものである。市役所のある流山市平和台付近から北上し，上貝塚を経て上新宿付近で谷頭となる。

上新宿貝塚の現況は，台地上が畑地，宅地，篠林である。貝層は，大きく北側と南側に分かれるが，いずれも遺存状況の良好な部分ほど篠林に覆われている。低地部分は，かつては水田であったが常磐自動車道路の開通により，水田用水が断たれたため，現在は荒地となっている。

2．周辺の遺跡（第１図）

上新宿貝塚周辺には，現在の江戸川本流や，そこからの開析谷に面して立地する遺跡が各時代を通して数多く存在する。ここでは既に調査された遺跡を中心に，貝塚と縄文時代の遺跡について概観する。まず，下花輪支谷に面する遺跡から紹介していくことにする。

右岸に面しては，上貝塚貝塚(8)がある。上新宿貝塚の南にわずか800ｍの距離に位置し，縄文時代後期の称名寺式期から晩期後半に至る共通した時代性とともに，上新宿貝塚と最も関係の深い遺跡であろう。平成元年度に行われた発掘調査では，貝層本体部分に調査区は及んでいないが，堀之内式期，後期安行式期の住居跡等が検出されている。上貝塚貝塚の北に隣接する上貝塚遺跡(7)は，前期黒浜式期の集落を中心とする遺跡である。次に左岸では，北から西初石２丁目遺跡(5)，若葉台遺跡(6)，桐ヶ谷新田遺跡(9)，西初石桜窪遺跡(10)等がある。西初石２丁目遺跡からは，称名寺式期を中心とする良好な遺物包含層と，当該期の土坑群が検出されている。若葉台遺跡では，黒浜式に属する住居跡等の遺構，遺物をはじめ，後晩期の遺物も少なからず出土している。下花輪支谷の南には，後晩期を主体とする馬蹄形貝塚の三輪野山貝塚(11)がある。土地区画整理事業に伴う三輪野山地区一帯の確認調査では，道路を挟んだ東側の位置で，小規模な貝の堆積とともに堀之内式から後期安行式の土器が多量に出土したと報告さ


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
上新宿
流山市
柏市
松戸市
東京理大
流山橋
総合運動場
運動公園
文化会館
東福寺
南流山
流山
東深井
西深井
深井新田
平方村新田
平方新田
江戸川台
江戸川台東
江戸川台西
富士見台
小屋台
若葉台
輪野山
市野谷
富士見台
長崎
小金原
幸田
中金杉
平賀
前崎
南小金
東平賀
東庄賀
青田
駒木台
西原
伊勢原
柏I.C
工業団地
税関研修所
がんセンター
防衛庁柏送信所
東洋短大
柏市飛地
東初石
西初石
八幡
成増
野々
古間木
平井
平賀
青年の家
宮園
芝崎
東井
西井
早稲田
前田
田中新田
後谷
小谷堀
飯島
半割
加藤
吉屋
輪野江
下花輪
南桐
上新宿新田
江戸川
東京理大
馬場
大宮
高野
船戸山
小熊
館林
東新田
西新田
山崎貝塚町
大崎
山崎
亀山
福郷
中地
宿
上谷
今上
大和田
井
瀬戸
清掃工場
変電所
排水処理場
西三ケ尾
上三ケ尾
下三ケ尾
馬場
東深井
西深井
深井新田
平方
平方村新田
平方新田
吉屋
加藤
半割
飯島
輪野江
小谷堀
後谷
前田
田中新田
早稲田
文化会館
運動公園
流山橋
総合運動場
南流山
流山
東福寺
南桐
下花輪

れている（小栗　1989)。この貝塚の西側低地部分は，現在流山市が三輪野山八重塚低地遺跡(12)として調査中であり，堀之内式～安行３ｄ式に至る遺物が多く出土している。

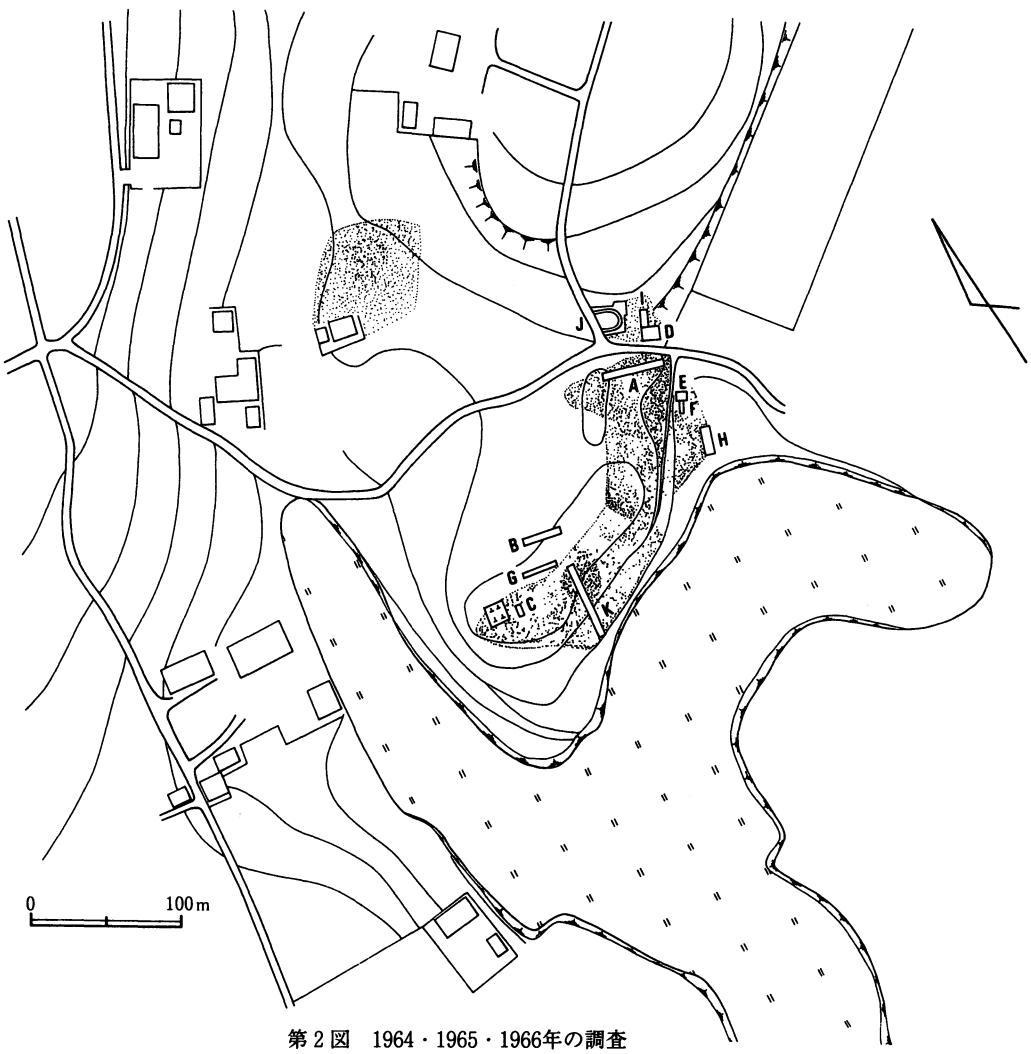
古流山湾（坂川低地）に面しては，縄文時代前期関山式を主体時期とする大集落である幸田貝塚(14)がある。小支谷を挟んだ東には，名都借第Ⅱ遺跡(16)，清滝院前遺跡(15)がある。いずれも地点貝塚を伴い，前者からは阿玉台式の住居跡等が検出されている。野々下貝塚(13)も地点貝塚を伴う。堀之内式を中心に，加曽利Ｅ式から晩期前半までの遺物が出土している。

江戸川本流に面する小さな支谷沿いにも，著名な遺跡が分布する。野田市の山崎貝塚(2)は，国指定の史跡で，後晩期の馬蹄形貝塚である。江戸川台駅の西側には中野久木遺跡(4)，中野久木日暮第Ⅰ遺跡(3)が所在する。前者は中期，後者は後期前半を主体時期とする地点貝塚で，それぞれ当該期の住居跡等が検出されている。

３．研究略史

上新宿貝塚は古くから知られており，学会の注目を集めていた貝塚である。東京からの地理にも恵まれ，踏査や発掘調査がたびたび行われている。上新宿貝塚を周知させた最も古い文献は，明治26年発行の東京人類学雑誌である。阿部正功氏が実践，又は発見したとされる貝塚等の所在地名表の中に「下総国東葛飾郡上新宿村字向宿」と記載されている（阿部 1893)。初めての発掘調査は，昭和３年10月に東京人類学会により行われている。その内容は，宮内悦蔵・赤堀英三の両氏によって報告された。報文は全体に調査日誌的な内容ではあるが，出土する土器とともに貝層にも注意し，セタシジミ，ハマグリ，マガキ等の出土状態が，貝塚の中の層位毎に観察されている（宮内・赤堀 1928)。また同誌上で，中谷治宇二郎氏が，出土した双口土器を図版とともに紹介している（中谷 1928)。翌昭和４年には，このとき採集された貝の観察結果が報告され（赤堀 1929)，昭和７年には，紡錘車状土製品の紹介がある（中根 1932)。昭和15年11月，再び東京人類学会により上新宿貝塚の遠足会が実施された。発掘調査は，「前回の場所の南方約百米，台地縁に近い部分」が選ばれた。出土する土器は，地表又は表土から貝層上部には安行式が，貝層中には加曽利Ｂ式が，土層中には堀之内式が，それぞれ多く見られたとの記述がなされている。また，貝層は概ね鹹水産の貝によって構成されることや，骨角器や，シカ，イノシシを中心とする獣骨，人骨等が検出されたことが報告されている（無名姓1940)。これらの自然遺物は，翌昭和16年に直良信夫氏により分析結果が報告され，検出された植物・動物の遺存体から当時の自然環境を想察している（直良 1941)。この後しばらく，上新宿貝塚が踏査又は調査された様子はない。再度，上新宿貝塚に調査の目が向けられるようになるのは，昭和39年のことである。この年から３年次にわたり，上川名昭氏を中心とする日本大学第三高等学校考古学会が発掘調査を行っている。調査期間は，各年度とも７月下旬の約１週間が充てられた。調査は，最終的にＡからＪまでの10地点が発掘された。これまでの調査の中では最も規模が大きく，出土遺物はりんご箱に換算して約60箱を数えるという。初めて貝層のボーリン

グ調査が実施され，南側に弧状貝層，北側に面状貝層の存在が明らかになった（上川名 1993，第2図)。発掘調査からは，縄文時代晩期の安行3ａ式をはじめ，後期の堀之内式，安行2式の竪穴住居跡が検出され，各トレンチ及び住居内からは台付土器や浅鉢形土器，ミニチュア土器の，いわゆる異形土器と呼べるようなものが多く出土している。さらに，透かしの施された耳飾，耳栓，土偶や土版等の土製品に加え，彫刻や線刻の施された骨角歯牙製の各種装飾品は，当貝塚の性格を考える上で極めて重要である。しかし，報文では遺構に関する情報に乏しいなど，調査成果を十分に整理しきれていないようである。その後に行われた発掘調査はないが，当貝塚採集のオオツタノハ製貝輪についての紹介がなされる（小栗　1985）など，当貝塚から出土する遺物の特殊性がクローズアップされている。



第2図　1964・1965・1966年の調査

Ⅱ．調 査 の 概 要

1．調査の経過（付図１）

調査は10月３日から開始され，１週間ほどはボーリング調査とトレンチ調査を併行して実施した。ボーリング調査により，次第に貝層の分布範囲が明らかにされたころ，トレンチ調査と併行して業者委託による地形測量を実施した。各トレンチの設定目的については，それぞれの項で述べるが，基本的には遺跡及び集落の範囲と，貝層の状況を把握することに主眼を置いた。５月に行った現地踏査では，これらの条件を満たし，調査期間中に農作業の影響が少なそうな場所を選択した。しかし，南側に突出する台地部分に繁茂していた篠林は，ボーリング調査にさえも支障を及ぼし，草刈りを余儀なくされた。

トレンチは過去の調査との重複をできるだけ避け，最終的には11か所に設定した。このうち，４Ｔ，７Ｔ，８Ｔ，９Ｔでは，貝層外縁の状況を把握することができたが，遺構の検出を目的に設定した２Ｔでは，全く遺構は検出されなかった。同じ目的で調査した１Ｔでは，堀之内式期の竪穴住居跡２軒と，堀之内式から加曽利Ｂ式期と思われる竪穴住居跡１軒等が検出された。また，南側弧状貝層の外縁にあたる５Ｔからも堀之内式期の竪穴住居跡１軒が検出されたが，晩期における居住域を明らかにするという点では不十分であった。このため，北側貝層の東に11Ｔを追加設定し調査を行った。晩期前半の土坑が検出されたのみであったが，これにより晩期の居住域の限定性が推測可能となった。

調査期間中を通じて曇天の日が多かったものの，雨にたたられた日はほとんどなかった。作業は比較的順調に進行し，すべての作業は10月31日に無事終了することができた。

2．調査の方法

調査は，貝層分布の把握を目的とするボーリング調査と，貝層や遺構の状況を把握するためのトレンチ調査とに分けられる。

ボーリング調査は，長さ１ｍのボーリングステッキを用い，地中で明らかな貝層の感触が得られるものについてのみ「貝層あり」の判断を下している。トレンチ調査によって露出した貝層と照らし合わせると，多くの場合この判断はいわゆる混土貝層までを掌握していることがわかる。ただし，５Ｔの斜面で「貝層あり」とした長さ約22m，幅３ｍ～５ｍの範囲は，トレンチ調査により地山斜面崩落に伴う二次的な堆積と推定できたが，その規模が大きく，トレンチ調査だけで全体の判断を下すことは危険なので，地形図にはそのまま掲載した。

トレンチの設定はすべて任意である。地形測量の際に，各トレンチそれぞれ２点のトレンチ杭から公共座標値を測定している。トレンチの名称は，遺跡北東部の第１トレンチを起点とし，時計回りに順に第10トレンチまで付したが，追加設定となった第11トレンチについては例外と

なった。なお，文中での呼称は，第1トレンチは「1T」というように略称を用いている。トレンチの調査面積は，11トレンチ合計で200㎡である。

杭番号	X座標	Y座標	杭番号	X座標	Y座標
1T—19	−12912.496	6872.022	6T—10	—12990.999	6813.991
1T—20	−12919.869	6866.883	7T—11	—12936.380	6785.641
2T— 1	−12921.865	6906.215	7T—12	—12937.568	6791.523
2T— 2	−12928.785	6913.419	8T—13	—12886.253	6801.044
3T— 3	—12948.994	6939.938	8T—14	−12890.107	6806.876
3T— 4	—12955.352	6947.631	9T—15	—12883.771	6819.693
4T— 5	−13017.202	6865.358	9T—16	−12876.722	6823.442
4T— 6	−13020.860	6872.464	10T—17	—12883.076	6864.140
5T— 7	−13019.273	6791.266	10T—18	−12891.967	6859.584
5T— 8	−13028.631	6775.922	11T—21	−12899.527	6841.846
6T— 9	−12990.328	6806.022	11T—22	−12903.346	6840.665

表1　トレンチ杭座標値一覧

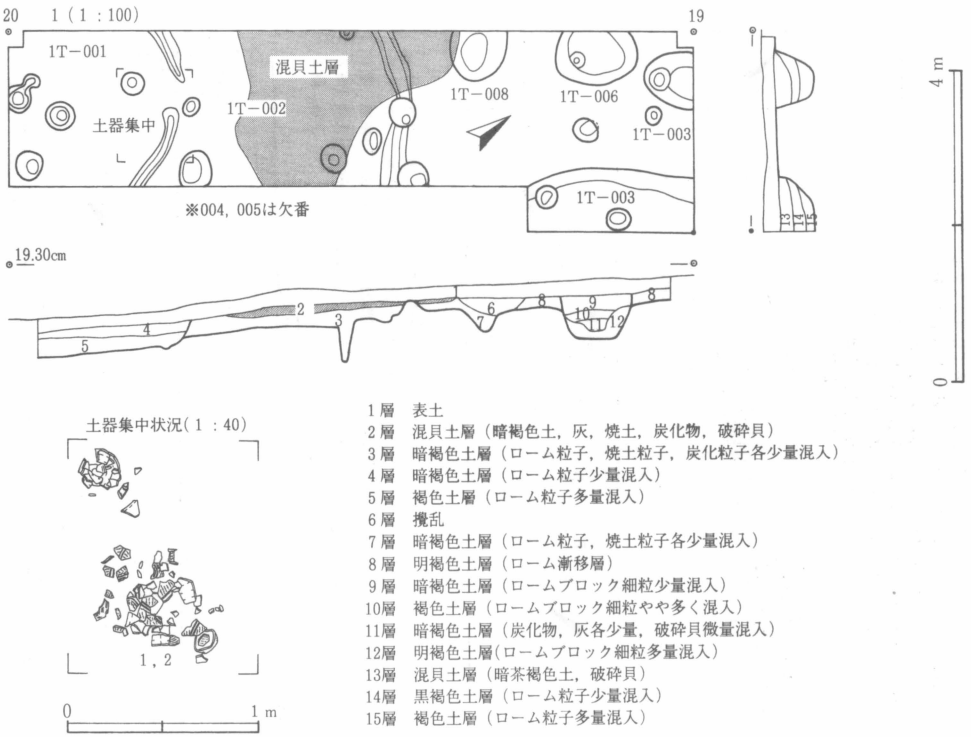
3．各トレンチの状況

1T（第3図，図版3）

貝塚の北東側の遺構の分布状況を確認するために設定したトレンチである。付近は南側から上ってくる斜面がようやく平坦化する位置で，標高は19mに近い。1Tの西側でボーリング調査により貝層を確認していたが，トレンチは遺構確認を主目的としたため，貝層からは外れた位置に設定している。トレンチ中央付近からは，表土下で薄い灰混じりの破砕貝混貝土層を認めた。上端は耕作の影響を受けて，撹乱層的であったため，当初はプライマリーなものか否かの判断を下せなかったが，トレンチの土層断面から住居跡の覆土上層に堆積していたものであることが判明した。001号及び002号住居跡は，土器の集中箇所を精査することで，床面・周溝等を検出し，住居跡であると判断したものである。

1T—001・002号住居跡（第3図，図版3）

両跡ともに確認面と覆土の色調に区別がつかなかったため，床面に到達したところで住居と判断できたものである。床面はいずれも凹凸が激しく，深さ10cm程の周溝を有している。002号住居跡には確実に伴うと思われる遺物の出土がないため，明確な時期判断はできない。001号住居上に貼床が認められないことと，覆土に大差がないことから，おそらく001号より若干古い後期前半に属するものと考えられる。001号住居跡は，002号住居の床面をわずかに掘り込んでい



第3図　1T

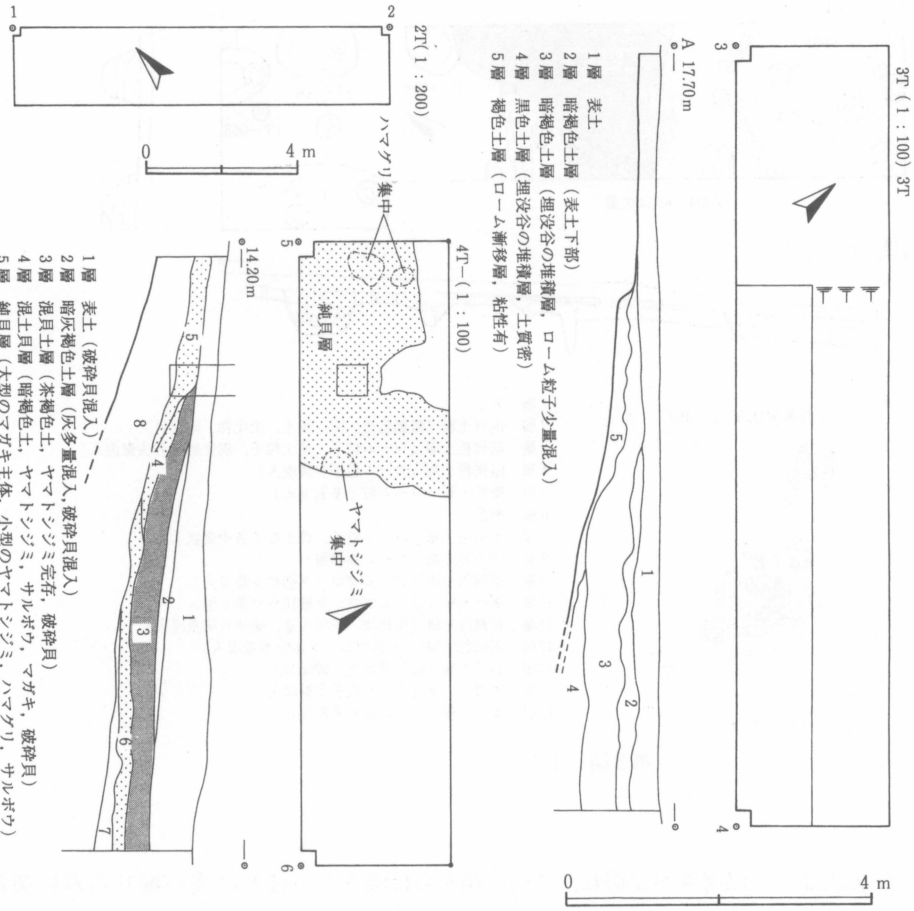
る。住居北部で一部周溝が途切れ，この内側からは深さ5cmほどの浅い掘り込みに深鉢形土器底部が埋め込まれていた。いわゆる埋甕である。この付近からは，堀之内1式土器3個体分が集中して検出されている。

1T−003号住居跡（第3図，図版3）

トレンチの北東隅に暗褐色土を主体とし，わずかな破砕貝を含む落ち込みが認められていた。当初は002号住居上に見られた灰混じりの混貝土と同じように，後世の攪乱的なものであろうと思われたが，念のため部分的に試掘を行ったところ，床面，ピット及び，骨角器を検出し，住居跡であるとの見解を得た。部分的な所見ではあるが，ロームへの掘り込みの深さは約50cmで，床面は凹凸があり，壁は傾斜して立ち上がる。覆土の色調からも，001号，002号の両跡よりは若干新しい時期に属するものと思われる。

2T（第4図，図版3）

やはり貝塚北東部で，台地上に展開すると思われた集落の範囲と状況を確認するために設定したトレンチである。付近は標高19mの平坦な台地上である。表土は耕作土の単一層で，厚さは全体に30cmである。わずかな土器片が出土しただけで，遺構等は全く検出されなかった。また，出土した土器片は全体に磨耗したものが多く見られた。いずれも僅少であるが，識別できたものとして，後期の称名寺式，加曽利B式土器がある。



第4図　2T・3T・4T

3T（第4図，図版3）

貝塚本体からはかなり離れた位置であるが，遺跡の範囲と旧地形の状況を確認するために設定した。付近は標高17.5mの南側に下る緩斜面である。表土は耕作土の単一層で，厚さは全体に約30cmを測る。トレンチ西側で上端がやや削平されたローム面を検出したが，東側は暗褐色土層に覆われていた。このため，幅1mのサブトレンチにより調査を続けた。暗褐色土層は埋没谷の堆積層で，土器等の遺物は認められない。谷部に向かう斜面を検出し，調査を終了した。

4T（第4図，図版3，4）

台地部からは一段下がった，いわゆる段丘状の地形に位置する貝層の状況把握を目的に設定した。トレンチの標高は，13.5m～14.0mで，旧水田面との比高は1.3m～1.8mである。現状では段丘状を呈するが，当時の地形としては斜面部である。トレンチ西側の斜面上部では，地山の上に堆積した，この部分での厚さ約70cmを測る褐色土層の上にマガキを主体とする純貝層が認められた。純貝層は加曽利B式期から後期安行式期の中のいずれかの時期に堆積しているが，

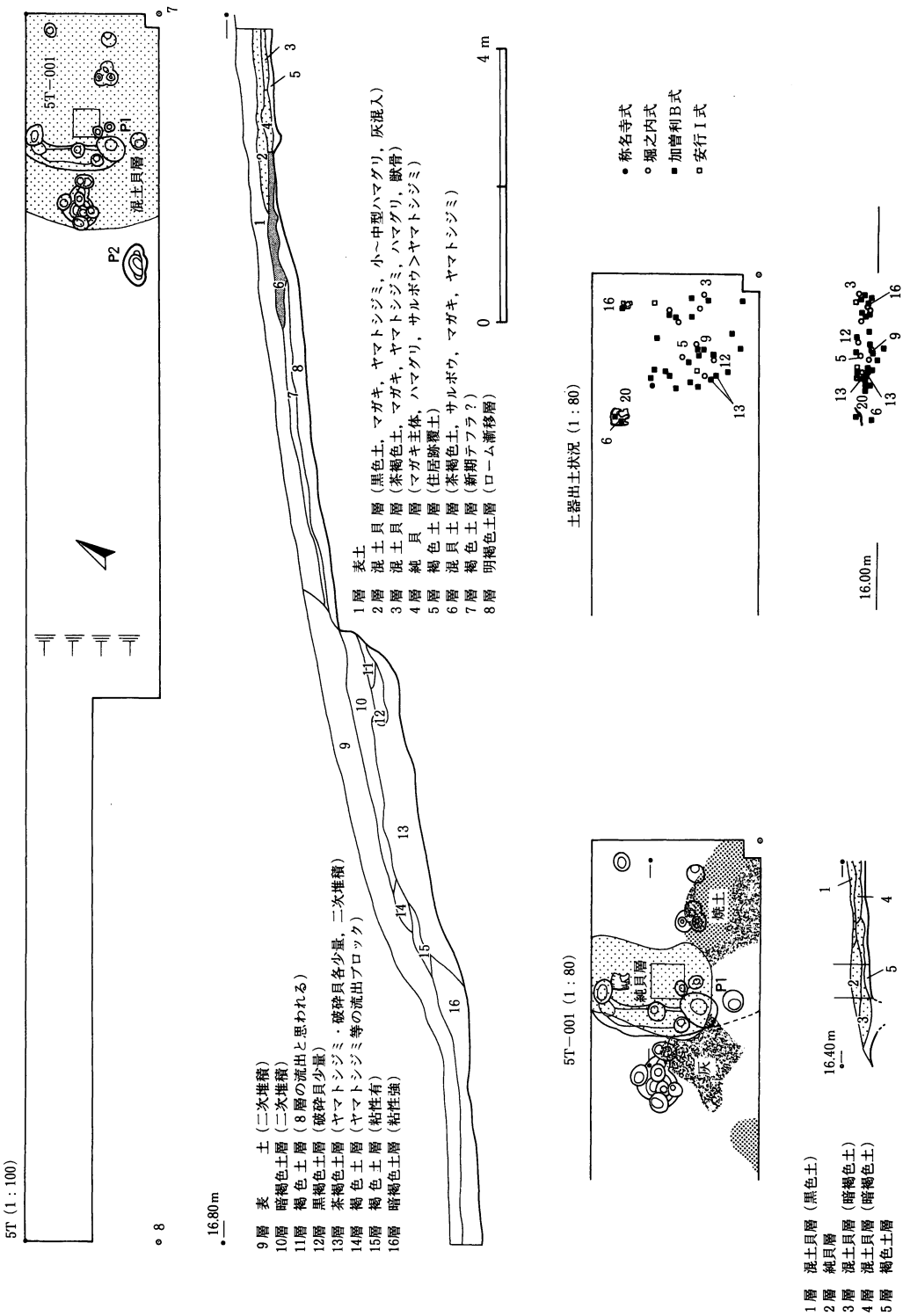
長期にわたって堆積したものとは考え難い。褐色土層中からの出土土器は，加曽利Ｂ式を主体に，少量の称名寺式，堀之内式，後期安行式が見られる。純貝層の上部には，ヤマトシジミを主体とする茶褐色土混土貝層が堆積しているが，斜面下部に向かっての流出が著しく，晩期遺物包含層である黒色土の上に堆積する結果を招いている。黒色土中には，安行３ａ～安行３ｃ式を主体に，やはり後晩期の遺物が混ざり合うが，褐色土中からは晩期土器の出土はなく，黒色土は晩期の遺物包含層として捉えることができる。これらを整理すると，まず地山の上に加曽利Ｂ式期を主体時期とする褐色土層があり，その上にマガキ主体純貝層が堆積する。次に純貝層の上に暗褐色混土貝層が堆積する。当層の端部は，漸移的に破砕貝主体となり土層化する。なお，純貝層はマガキを主体としたが，平面的な観察からはハマグリの集中ブロック等が認められている。純貝層からはコラムサンプルを採取した。コラムサンプルを採取した地点のすぐ北側は，貝層が不自然に途切れており，過去の調査の痕跡であると思われる。

５Ｔ（第５図，図版４）

表面観察とボーリング調査により，最も良好な状況を呈すると予測された貝層の状況と台地縁辺部における遺構の確認を目的に設定した。ボーリング調査により斜面部で確認された貝層の状況を把握することも兼ねるため，幅１ｍの部分を含め，トレンチの長さは18ｍである。トレンチ上部とトレンチ下部との比高は約3.5ｍを測る。現況はトレンチ上部が台地上で，篠林，トレンチ下部は段丘状の平坦面で，旧水田面との比高は約１ｍを測る。この部分での地山はローム層ではなく，地表下40㎝で粘土面を検出している。台地上の貝層は，厚さ20㎝の比較的薄いものだが，混入する土色の違いから２層に分層できる。上層は黒色土が混入する混土貝層で，マガキ，ハマグリ，ヤマトシジミが多く観察できた。下層の西側は，マガキを主体とする純貝層に近い混土貝層であり，東側はマガキ，サルボウ，ヤマトシジミを含み，茶褐色土が混入する混土貝層である。当層からは獣骨，魚骨が肉眼でも多く観察され，骨角器も出土している。下層の貝層は，分布範囲が001号住居跡と重なることから，住居跡内に堆積した遺構内貝層である。上下，いずれの貝層からも加曽利Ｂ式土器が主体的に出土している。001号住居跡内に堆積した貝層からは，コラムサンプルの採取を行った。なお，斜面部の貝層は崩落した地山の上に二次的に堆積したものである。

５Ｔ－００１号住居跡（第５図，図版４）

トレンチの東端で，台地縁辺に近い位置に所在する。南側弧状貝層西端部の状況を知るために，幅50㎝のサブトレンチを入れたところ，床面と思われる硬質面を検出した。しかし，掘り込みがほとんどなかったことや，同時に見られた焼土，灰の性格について不明であったため，トレンチ内に限りその硬質面を追うことにした。まもなく，貝層の下部から柱穴，周溝等が現れ，住居跡であることが確実となった。住居跡の掘り込みはひじょうに浅く，わずかな褐色土の覆土上に貝層の堆積が見られることから，住居廃絶後短期間のうちに貝の堆積が始まってい


5T (1:100)
5T−001
P1
P2
混土貝層
16.80m
1層 表土
2層 混土貝層（黒色土，マガキ，ヤマトシジミ，小〜中型ハマグリ，灰混入）
3層 混土貝層（茶褐色土，マガキ，ヤマトシジミ，ハマグリ，獣骨）
4層 純貝層（マガキ主体，ハマグリ，サルボウ>ヤマトシジミ）
5層 褐色土層（住居跡覆土）
6層 混貝土層（茶褐色土，サルボウ，マガキ，ヤマトシジミ）
7層 褐色土層（新期テフラ？）
8層 明褐色土層（ローム漸移層）
9層 表土（二次堆積）
10層 暗褐色土層（二次堆積）
11層 褐色土層（8層の流出と思われる）
12層 黒褐色土層（破砕貝少量）
13層 茶褐色土層（ヤマトシジミ・破砕貝各少量，二次堆積）
14層 褐色土層（ヤマトシジミ等の流出ブロック）
15層 褐色土層（粘性有）
16層 暗褐色土層（粘性強）
0
4m
土器出土状況 (1:80)
称名寺式
堀之内式
加曽利B式
安行I式
16.00m
5T−001 (1:80)
焼土
純貝層
16.40m
1層 混土貝層（黒色土）
2層 純貝層
3層 混土貝層（暗褐色土）
4層 混土貝層（暗褐色土）
5層 褐色土層

第5図　5T・5T−001

るものと判断できる。遺物は，住居内に堆積した貝層中から加曽利Ｂ２～Ｂ３式土器が主体となって出土しており，本遺構の帰属時期もほぼそれに準じるものと思われる。また，同じく貝層中からは，ヘアピン等の骨角器と，それらの製作に用いられたと思われる加工痕を有する獣骨，鹿角，牙等の素材が多く出土しており，骨角器製作跡としての性格が窺える。

６Ｔ（第６図，図版４）

南側弧状貝層の内側における遺構の確認を目的に設定した。付近は標高15.5mの平坦面である。地山は台地上で見られるローム層とは異なり，粘性が強く水の影響を受けたものと考えられる。遺構の検出はなかったが，表土下40cm付近から縄文時代後晩期の遺物包含層が認められた。遺物包含層は黒色土の単一層で，やはり粘性を有している。このような水の影響がいつ頃から及ぼされたのかは不明であるが，６Ｔ付近が雨水を集めて留めやすい地形であることに起因すると思われる。６Ｔからのみ，土偶，土版等の特殊な遺物と，晩期後半の千網式及び，その併行期とされる大洞Ａ式土器の出土が認められている。

７Ｔ（第６図，図版４）

北側貝層の南端部の状況を把握するために設定した。トレンチの西側には，南から進入する谷が埋没している。地山は６Ｔよりもさらに粘性を強く帯び，部分的な試掘により，地表下約50cmで粘土層が露出した。確認された遺構は柱穴状のピット１基である。底面には粘土が貼られており，後世の建物跡の一部であると思われる。埋没谷に向かう斜面で混土貝層が検出されたが，北側弧状貝層全体に見られる汽水産のヤマトシジミは主体とはならず，むしろ鹹水産のマガキ，サルボウ等が多く認められた。

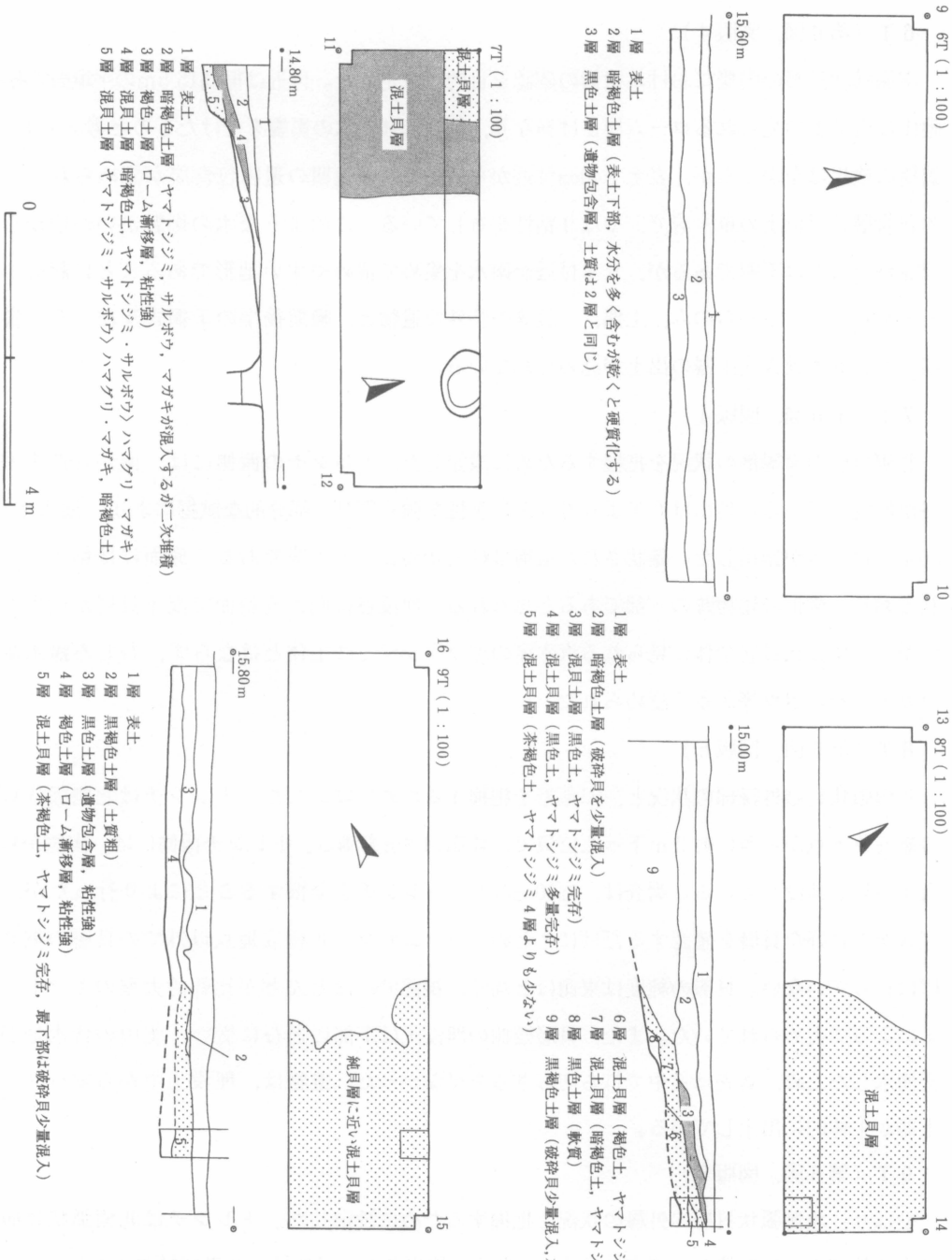
８Ｔ（第６図，図版５）

北側弧状貝層外縁部の状況と，旧地形を把握するために設定した。トレンチは北側弧状貝層の最高位地点から西に約２m下った位置で，標高14.8mを測る。トレンチ西側には，南側から進入する谷が埋没している。調査は，幅50cmのサブトレンチを発掘することにより行ったが，遺存状況の良好な貝層を確認するだけにとどめ，コラムサンプル採取地点以外での貝層の掘り下げは行っていない。貝層の純度は東側ほど高く，視認ではほとんどが比較的大型のヤマトシジミによって占められていた。また，貝層西側の埋没土は下部に進むに従い，土中の含水量が増え湧水したため，調査は途中で打ち切らざるを得なかった。遺物は，埋没土中から安行３ｃ式土器が主体的に出土している。

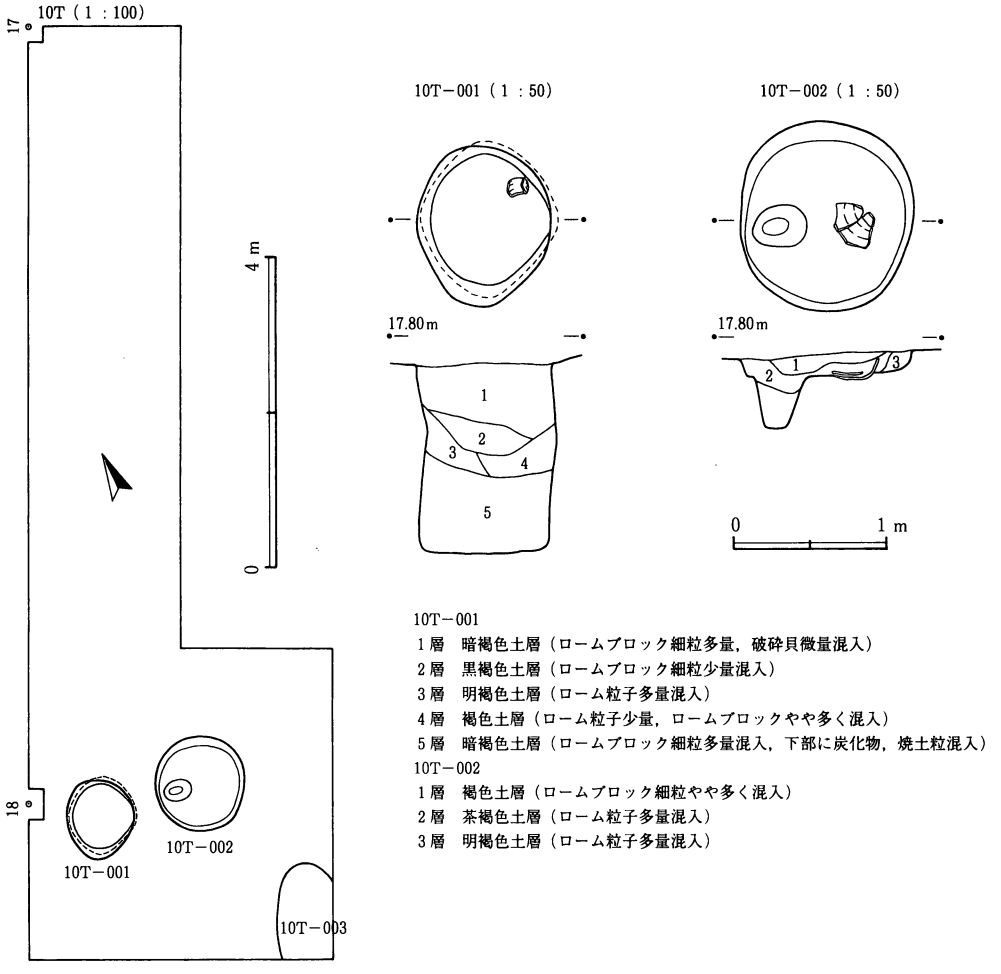
９Ｔ（第６図，図版５）

やはり，北側弧状貝層の外縁の状況を把握するために設定した。トレンチは北側弧状貝層の最高位地点の北に位置し，標高は15.5mである。検出された貝層は，８Ｔ同様ヤマトシジミを主体とする純度の高いものである。貝層の厚さは約20cmで，ほぼ単一の層から形成されているため，短期間のうちに堆積が行われたものと考えられる。貝層は検出面の観察にとどめ，コラム

サンプルを採取した以外に掘り下げは行っていない。貝層の外側には，黒色土の遺物包含層が認められた。遺物包含層は貝層と同一のレベルで検出されており，加曽利Ｂ式から，安行３ｃ式までの土器を認めたが，晩期安行式の良好な資料が多い。



第６図　６Ｔ・７Ｔ・８Ｔ・９Ｔ



第7図　10T

10T（第7図，図版5）

集落の範囲を確認するために設定したトレンチである。1Tの西には地形的な段差があり，人為的な削平が行われていることが予想できたが，貝層そのものに削平が及んでいるか否かは不明であったため，その状況を把握することも兼ねている。付近の標高は18m前後で，南西に向かって緩く下る斜面である。表土は全体に20cm程度と薄く，トレンチの北側では確認面に一部ハードローム面が露出するが，これは耕作によるものであろう。トレンチの南端では土坑3基が検出されており，このことからも貝層が寸断されるような削平があったとは考えられず，地形の段差は旧状での斜面部を整形しただけのものと思われる。土坑の検出によりトレンチを拡張し，プランの判明した2基については，その帰属時期を知るために完掘調査を行った。

10T−001号土坑（第7図，図版5）

平面形は，径1.0mを測る円形を呈する。ロームへの掘り込みは1.2mと深く，ほぼ円柱状に掘り込まれる。覆土中には，全体にロームブロック等を多く含んでおり，埋め戻されたものと判

断できる。遺物は，覆土の５層上面付近から安行３ａ式大型土器片が出土したほか，晩期前半のものが主体である。また，覆土中からはイノシシ牙製の垂飾品が出土している。

10Ｔ－００２号土坑（第７図，図版５）

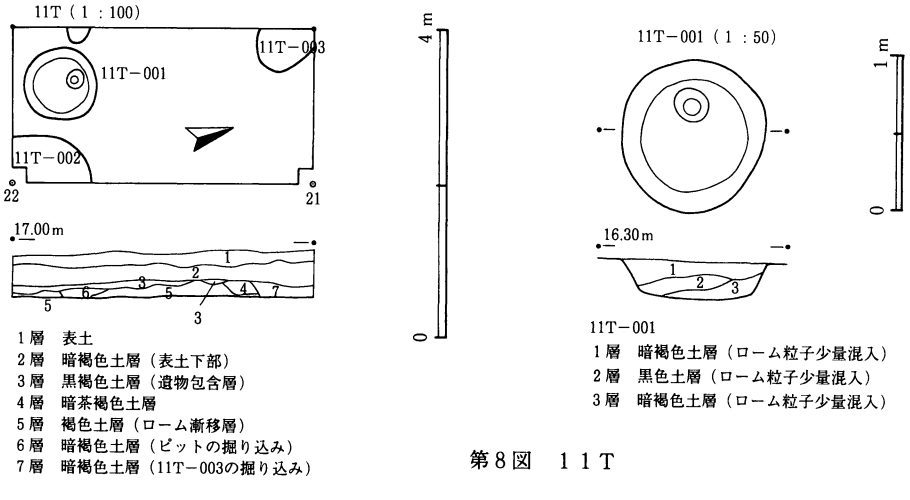
平面形は円形を呈し，径1.2mの規模を有する。ロームへの掘り込みは，15cmと浅い。坑底は平坦だが，やや軟質である。１か所に，坑底からの深さ35cmのピットが掘られている。遺物は坑底に接して，安行式の粗製深鉢下半部が出土している。

11Ｔ（第８図，図版５）

縄文時代晩期の居住域を確認するために設定した。ボーリング調査により確認された北側弧状貝層の東端部に近い位置である。付近の標高は17mを測る。表土は新旧の耕作土２層からなり，厚さ40cm前後を測る。表土下には，黒褐色土の遺物包含層が堆積する。９Ｔで見られた黒色包含層ほど色調的に濃くはないが，出土遺物の内容から９Ｔと同様の性格を有するものと考えられる。確認できた遺構は，土坑３基とピット１基である。トレンチ内にプランの収まった１基のみ完掘調査を行い，縄文時代晩期の所産であることが判明した。

11Ｔ－００１号土坑（第８図，図版５）

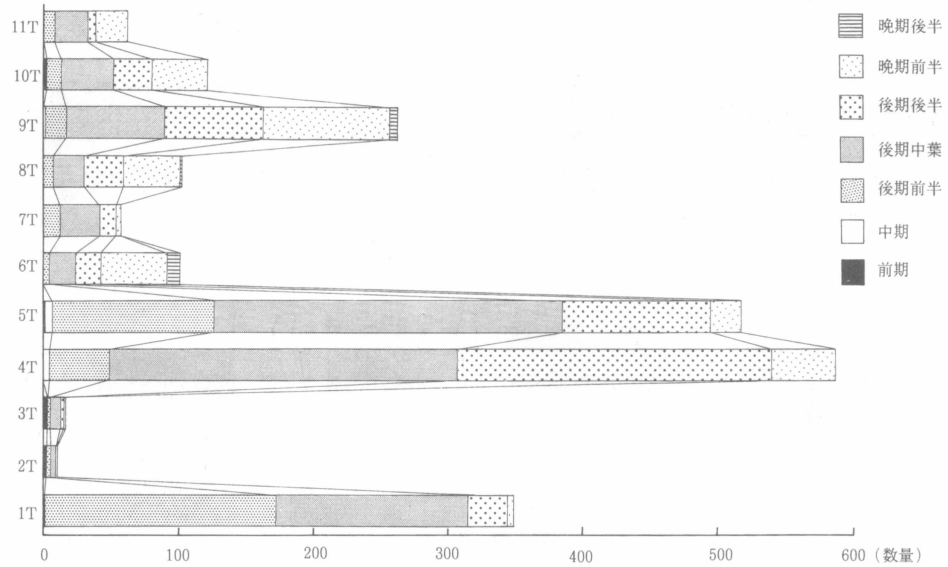
平面形は円形を呈し，径1.0mの規模を有する。ロームへの掘り込みは25cmであるが，トレンチ断面にかかった他の土坑等がローム面よりも約10cm上位から掘り込まれているため，本遺構も実際は35cmほどの深さを有していると考えられる。覆土中に混入物は少なく，自然な堆積状況である。坑底は軟質で，中央部がやや低い。１か所に深さ10cmのピットが掘られている。出土遺物は少量であったが，晩期前半の土器片が出土している。



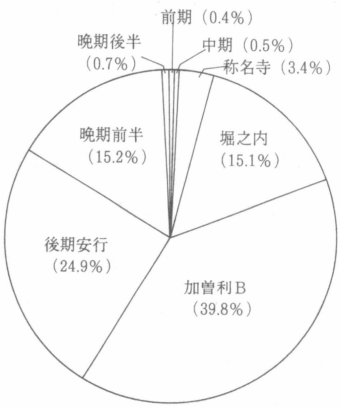
第８図　１１Ｔ

Ⅲ．出土遺物の概要

今回の調査では，縄文時代後晩期の土器を中心に，土製品，石器，骨角器等の遺物が出土している。まず，縄文土器についてトレンチ毎に掲載して説明し，その他はそれぞれの項目の中で一括して説明していくことにする。なお，各トレンチから出土した縄文土器の数量及び組成比は，設定したトレンチの面積が一定でないことや，識別不可能な小片や無文のものはカウントしていないため，あくまで参考資料であることをお断りしておく。



第９図　出土土器組成

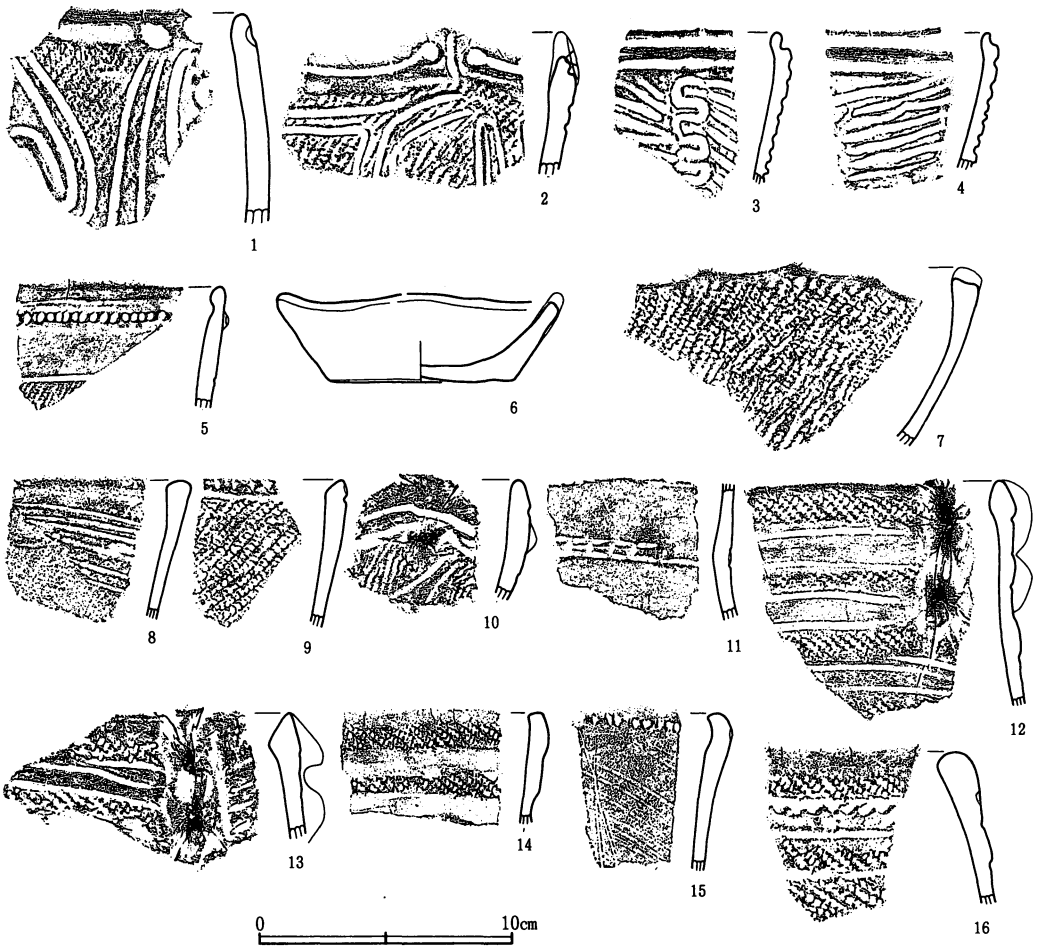


第10図　出土土器数量比

１．土器

１Ｔ（第11図，図版６－１）

堀之内式，加曽利Ｂ式が主体を占める。１～４は，堀之内１式である。いずれも地文に縄文を有し，蛇行懸垂文を軸に複数単位の沈線文が施されている。５は口唇下に，刻み目を有する貼り付け文を巡らせる堀之内２式である。６は，無文の浅鉢形土器である。口縁部は波状を呈し，推定口径11.3cmを測る。器面に施される調整と器厚から，堀之内式と思われる。７～11は，加曽利Ｂ式である。７は縄文のみ，８は条線のみが施される口縁部片だが，口唇部内側に稜を有することからＢ２式以降のもの



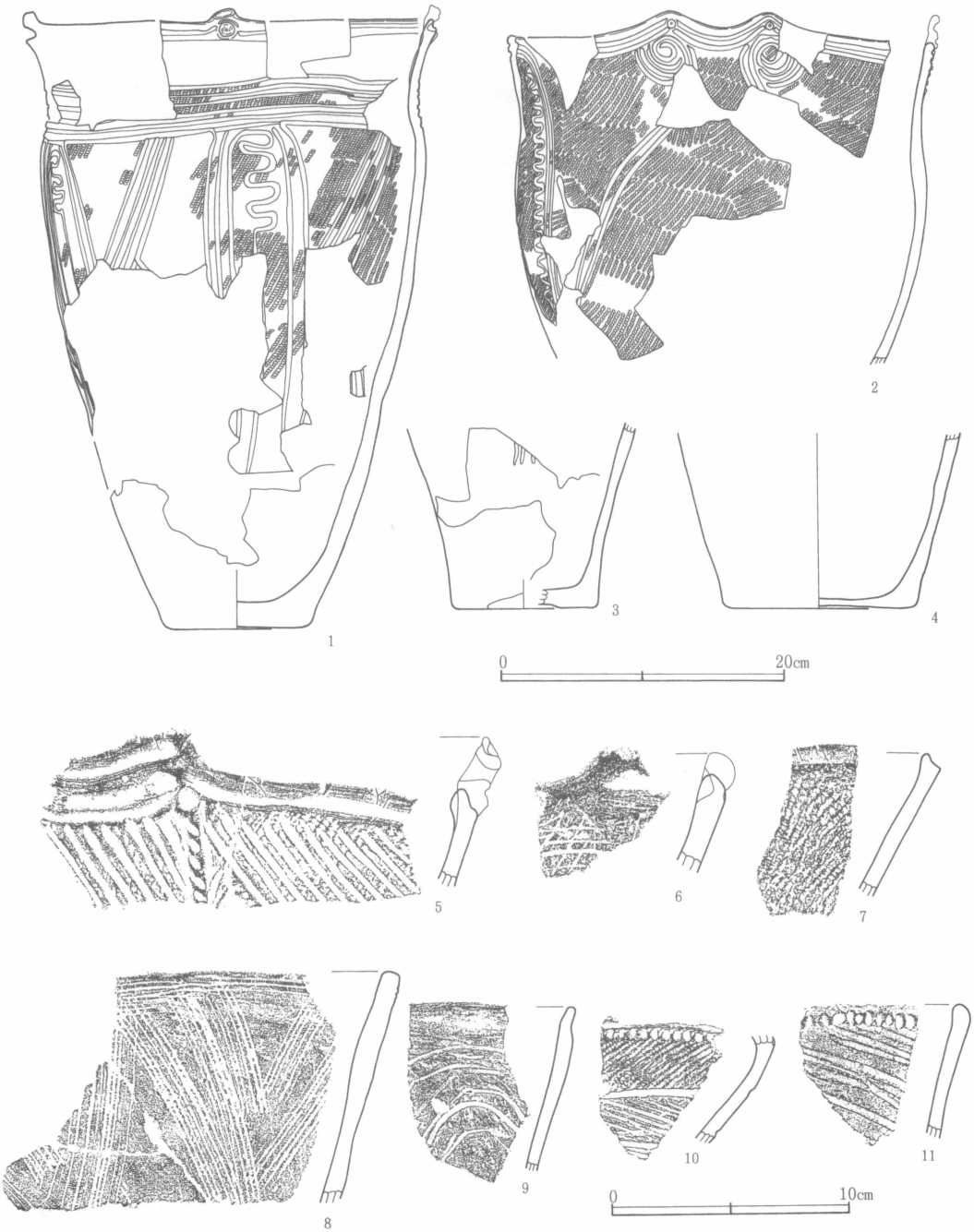
第11図　１Ｔ出土土器

であろう。９～11は，刻み目状の連続刺突文や磨消縄文を文様の主要素とするＢ３式である。12～15は，安行１式である。15を除き，帯縄文が施される精製土器である。16は，やはり帯縄文がベースとなるが，刻み目状文も見られ安行２式である。

１Ｔ－００１号住居跡（第12図，図版６－２）

堀之内１式を主体としている。１は，推定口径29.5cmを測る深鉢形土器である。小突起状の波状口縁は４単位で，波頂部下には単位文様として蛇行沈線等が垂下する。２は推定口径30.4cmを測る。２連の波状口縁を有し，全体にはそれが３単位で口縁部を形成するものであろう。波頂部下に渦巻き状の沈線が施され，波頂部間には蛇行する沈線等が垂下する。地文には単節ＬＲ縄文が施される。３は，底径10.0cmを測る。胴下半部には，垂下する３条の沈線が認められる他，縦位にヘラ状工具による細かな調整が施されている。４は，底径13.8cmを測る。やはり縦位にヘラ状工具調整が施されるが，３よりも幅広である。５は，波頂部が橋状となる装飾的な口縁部である。波頂部下に刻み目を有する隆帯を垂下させ，単位文様とする。地文は縄文を施した後，

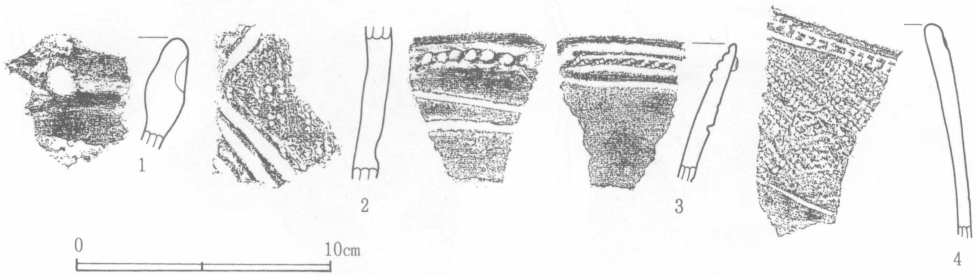
斜位の多条沈線が加えられる。6は小突起状の波状口縁を呈するものである。波頂部の内側には円形の孔が施される。7は地文の縄文のみを認める口縁部片で，口唇部は内側に折れ，尖り気味となる。8は，櫛歯状工具による条線のみ施されるものである。9は，やや粗い沈線により円形状の文様が描出されるものであろう。9のみ2式と思われる。10は，浅鉢形土器である。沈線により縄文帯と条線帯が区画される。加曽利B2式である。11は安行1式粗製土器である。



第12図　1T－001出土土器

１Ｔ－００３号住居跡（第13図）

１は口唇下に１条の沈線を巡らせる。波状口縁の波頂部下には円形の窪みを配し，単位的な文様とする堀之内１式である。２は単位文様部を欠くが，単位文様の垂帯を挟んで沈線文が菱形に配されるものであろう。やはり１式である。３は，口縁内側にも沈線と縄文帯が施される堀之内２式である。４は，口唇下に刻み目による梯子状文が施されるものである。波状口縁を呈し，加曽利Ｂ３式である。



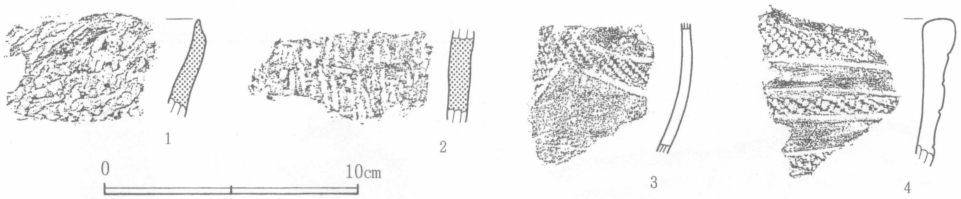
第13図　１Ｔ－００３出土土器

２Ｔ

縄文土器のほとんどは小片で，磨耗したものが多かったため，図示できるものはない。

３Ｔ（第14図，図版７－１）

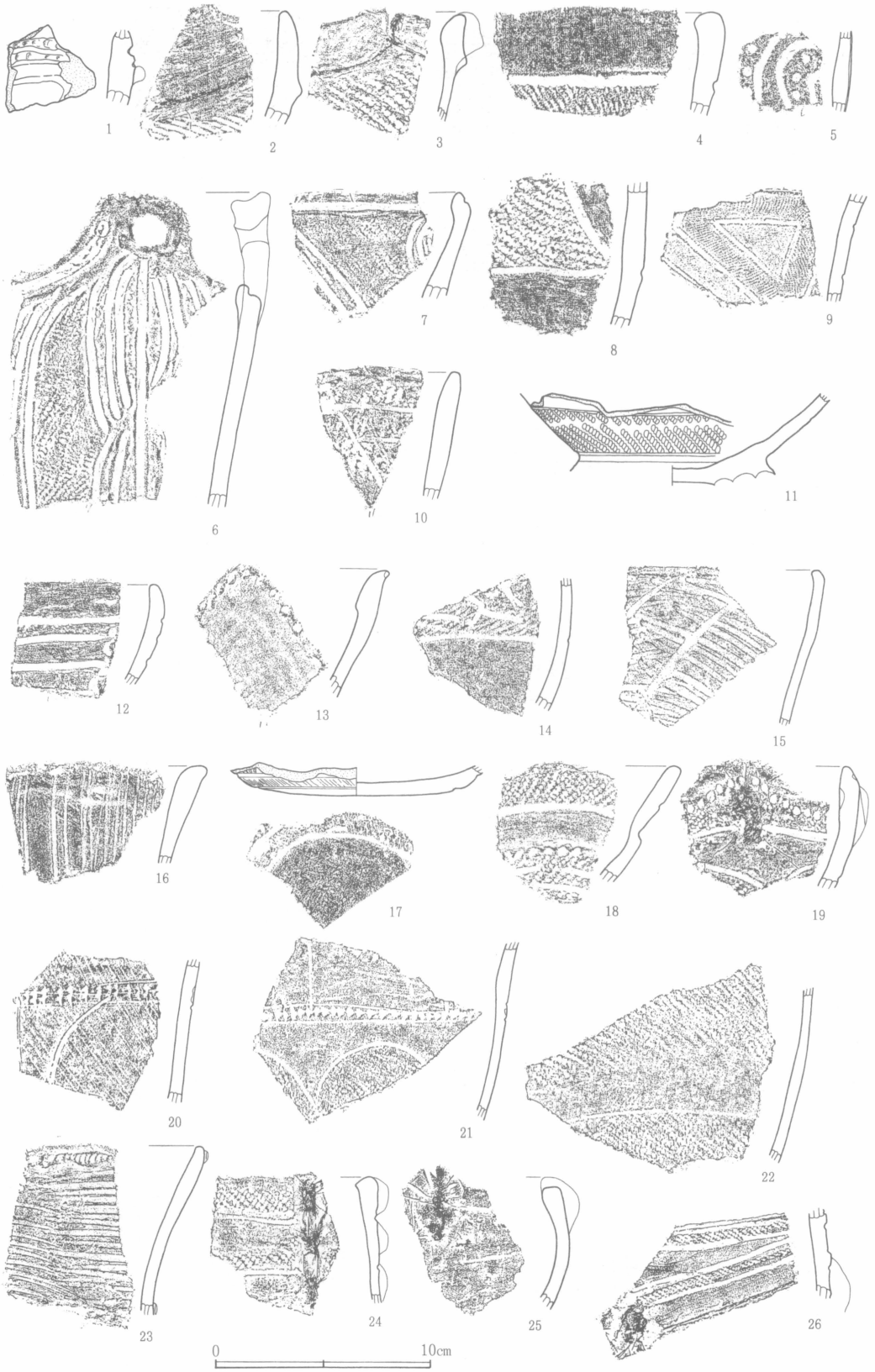
やはり出土数は，少量である。１，２は胎土中に繊維を含む黒浜式で，いずれも内面はよく磨かれる。３は縄文帯を弧状の沈線により区画するもので，曽谷式の可能性がある。４は安行１式精製土器である。



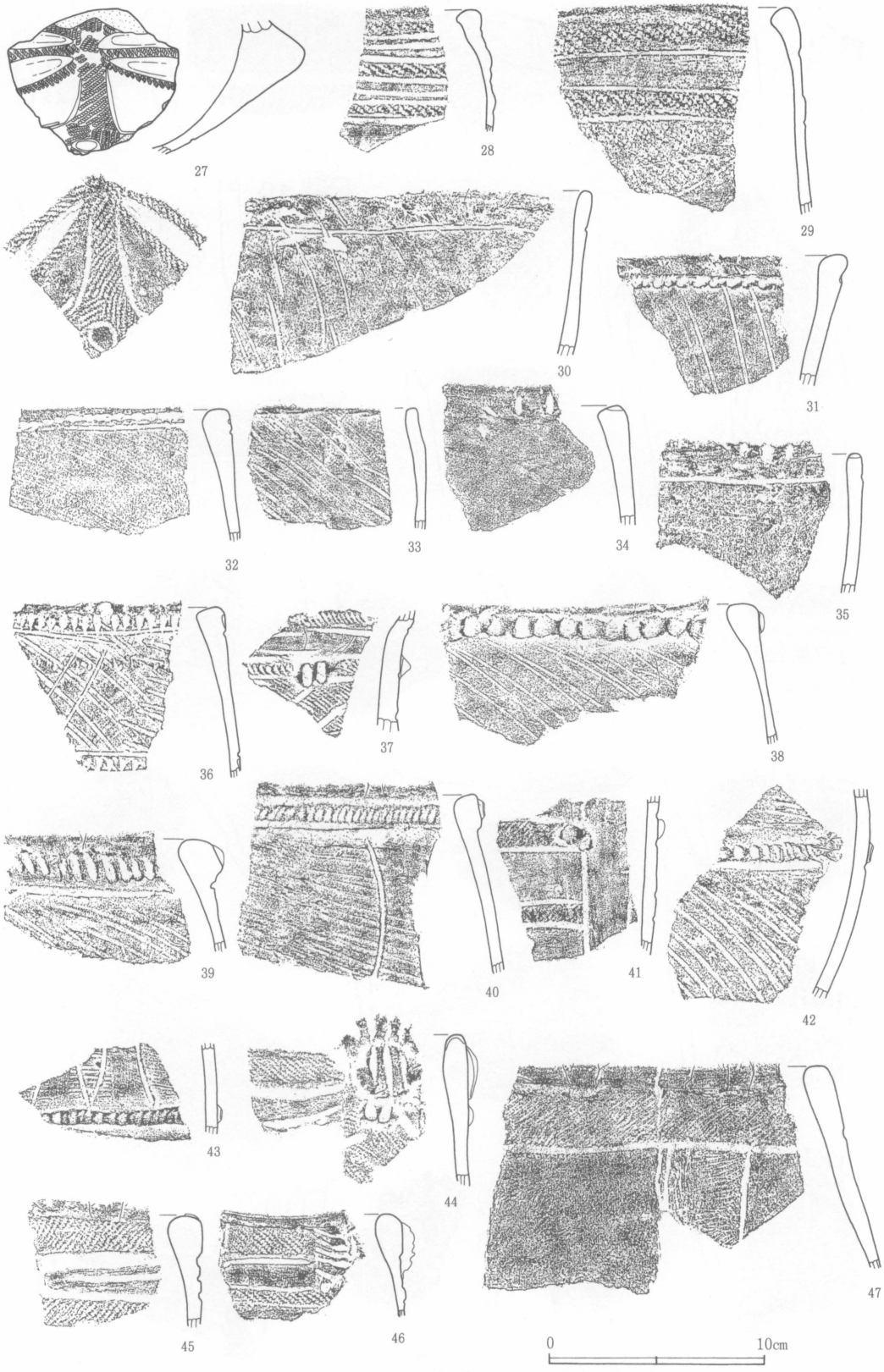
第14図　３Ｔ出土土器

４Ｔ（第15図～第17図，図版７－２，８）

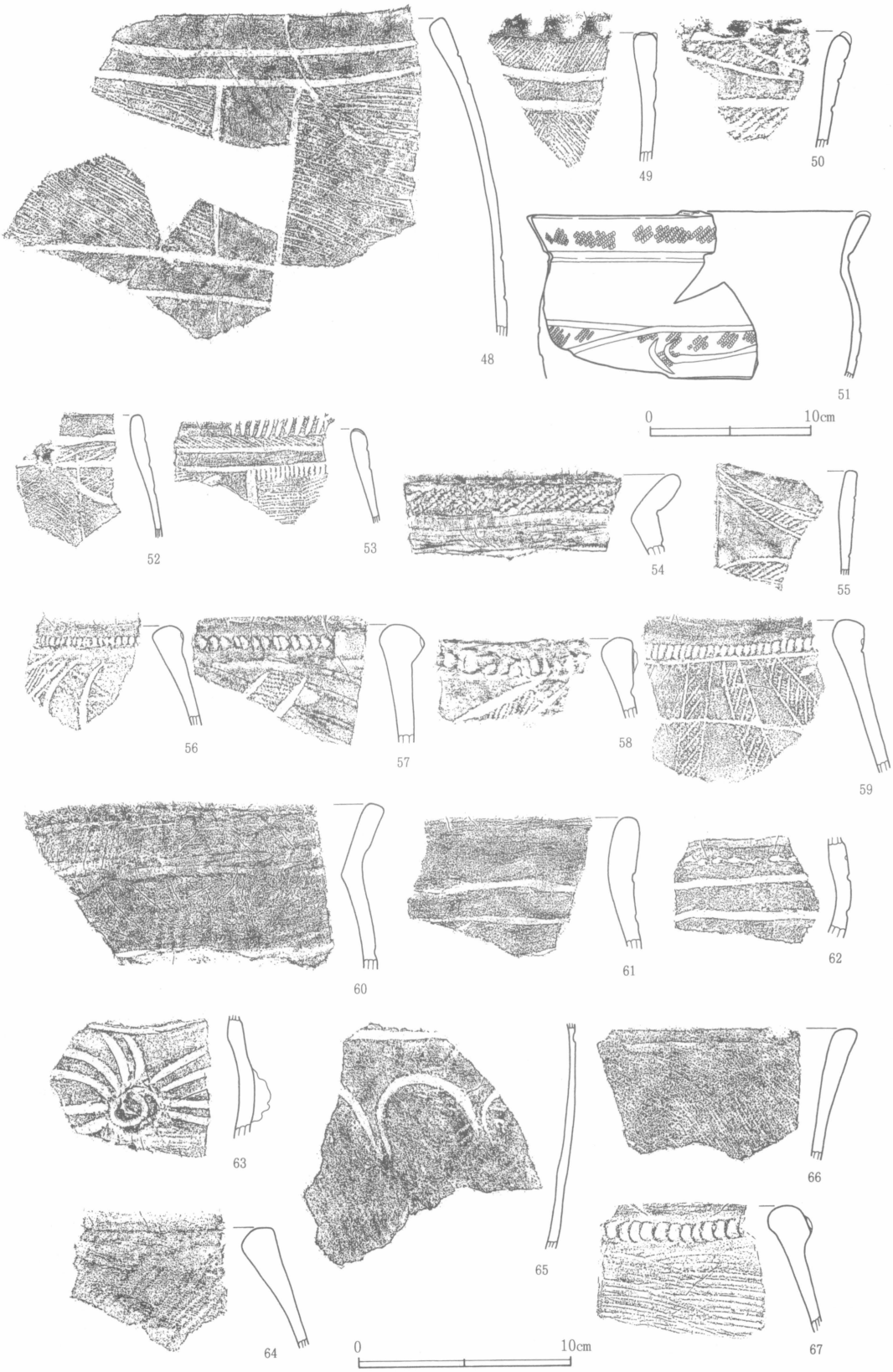
加曽利Ｂ式，後期安行式が４Ｔ出土土器の70％近くを占める。１は，隆帯に沿って２列の結節沈線文が施される阿玉台式である。２，３は微隆起線により，口縁部無文帯と胴部縄文部が区画される加曽利ＥⅣ式である。４は称名寺１式で，口唇部は内屈ぎみとなる。５は，沈線文と列点文を有する称名寺２式である。６～８は堀之内１式である。９は，幾何学的な沈線区画の施された堀之内２式である。10も堀之内２式で，地文の縄文上に幾何学的な沈線のみが施される。11～23は，加曽利Ｂ式である。11は台付の鉢形土器である。12は，横位磨消縄文を縦位の鎖状沈線により区画するＢ１式である。17は，浅鉢又は皿状を呈する器形のものである。充



第15図　４Ｔ出土土器（1）



第16図　４Ｔ出土土器（2）

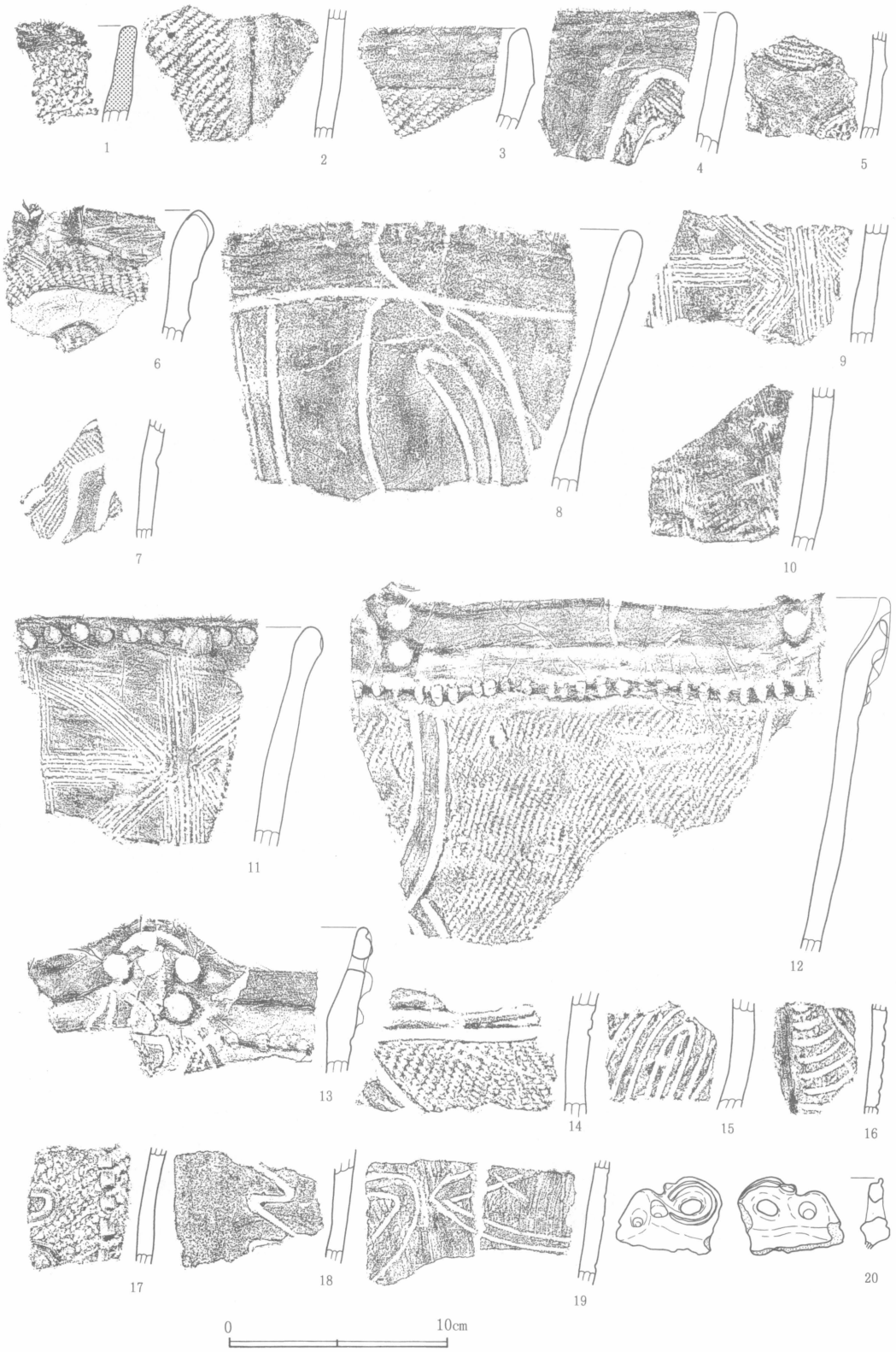


第17図　4Ｔ出土土器（3）

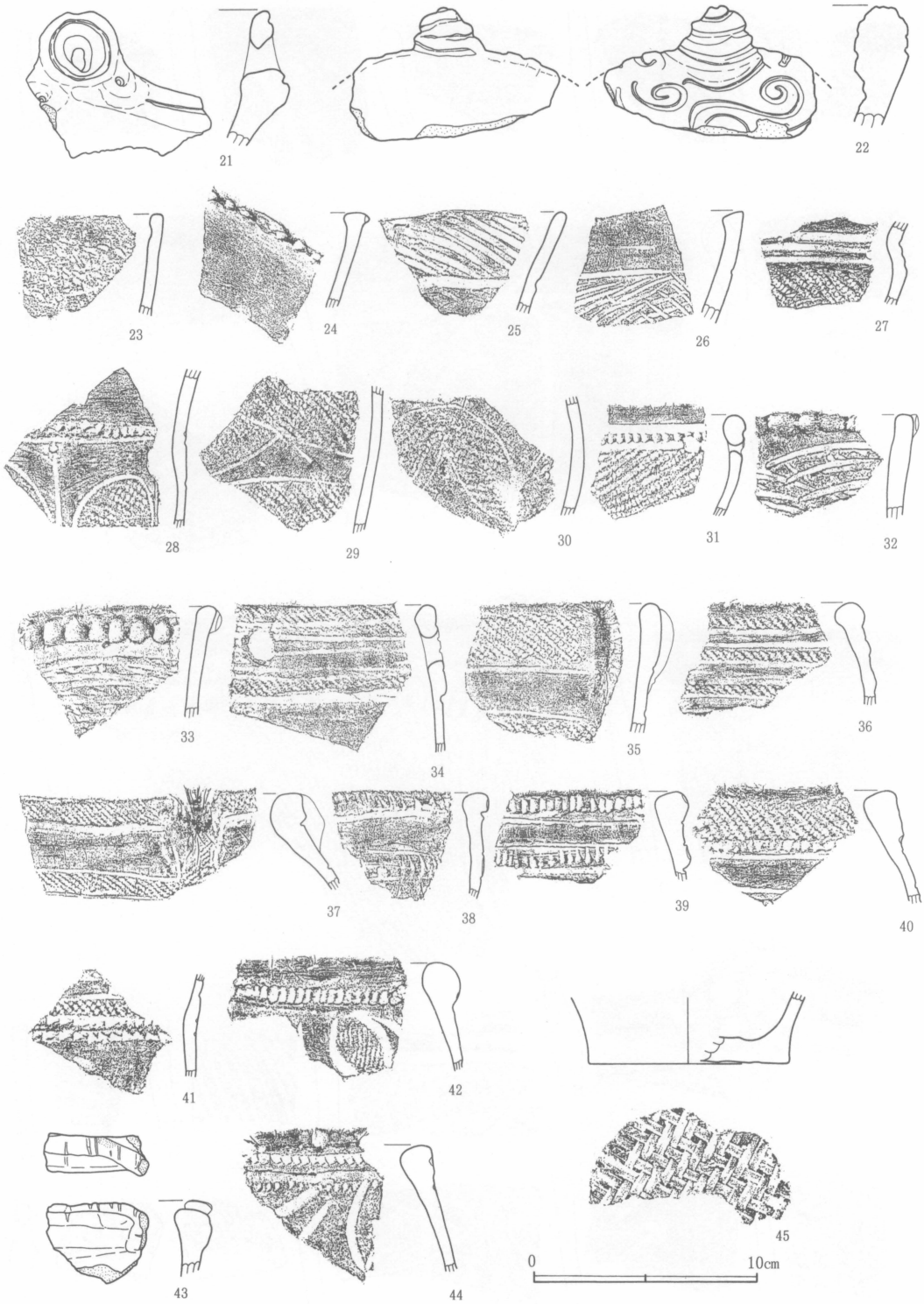
填される縄文は，ひじょうに細い原体のものが使用され，縄文帯の上位にわずかに残る刻み目からＢ３式と思われる。13～16，22は，Ｂ２式である。13は波状口縁を呈し，口端部外側に刻み目を有する。16は肥厚する口縁部で，縦位の条線が施される。22は，磨消縄文帯の区画沈線が一方しか用いられない。18～21は，Ｂ３式である。いずれも連続刺突文や刻み目が特徴的に施されている。19は瘤状貼付文が付されることから，曽谷式の可能性がある。23はＢ２式以降の粗製土器である。24～29は，安行１式精製土器である。25を除き，帯縄文や瘤状貼付文が主文様となる。25は内湾する器形を呈し，少なくとも口縁部は無文であるので，あるいは曽谷式の可能性がある。27は浅鉢形土器であろう。おそらく四隅が角張り，上から見ると四角形に近い形状になるものと思われる。30～36は，安行１式粗製土器である。口縁部の器形は内傾し，口唇下に刻み目状の連続刺突を施すものが多い。37は安行２式精製土器である。38～43は，安行２式粗製土器である。口唇部が肥厚し，口唇下には刻み目や紐線文が巡らされる。また，40，41，43には縦位の沈線区画文が施される。44～46は，安行３ａ式である。44，46には，こぶし状貼付文が付される。47～55は，安行３ｂ式である。磨消縄文の手法を用いたものが多く見られるが，充填文は縄文とは限らず，細密沈線となるものも多い。47～49は，その典型であろう。51は推定口径21.4cmを測る深鉢形土器である。口縁部の縄文帯部分は肥厚し，口唇部には小突起状の貼り付け文が施される。52，53も細密沈線が特徴的に施されており，53ではシャープな刻み目が加わる。鉢形土器であろう。54は，くの字状に外屈する口縁部で，広口壷と思われる。56～59は，後期安行式の粗製土器の特徴を引き継ぐものである。56～58は，安行３ａ式，59は３ｂ式であろうか。60～65は，安行３ｃ式である。施文される沈線は，比較的太いものが多い。65では連弧状のモチーフとなる。64は無文であるが，他の口縁部に見られるようなヘラ状工具による調整（ヘラケズリ）が施されている。67は，３ａ式以前の粗製土器である。

５Ｔ（第18図，第19図，図版９）

全体には加曽利Ｂ式を主体とするが，台地縁辺の褐色土上面からは称名寺式，堀之内式の大型破片が出土している。１は胎土中に繊維を含み，ループ縄文が施される黒浜式である。２，３，５は，微隆起線文が施される加曽利ＥⅣ式である。６もＥⅣ式であるが，明瞭な微隆起線による区画文は有さず，無文帯は凹み状となる。４，７～11は，称名寺式である。４は，曲線的な沈線により縄文帯を区画する。７は，いわゆるＪ字状文等が描出されるものであろう。８は，横位１条の沈線が口縁部と胴部の区画をなし，沈線のみにより文様が表出されるものである。９，11は，櫛歯状工具を縦横斜位に施し，文様が構成されている。11の口唇下には，指頭状工具による連続圧痕文が加えられる。12～22は，堀之内式である。12，13は同一個体である。口縁部に，いわゆる８字状付文を単位文様として施し，やはり単位文様としての磨消縄文帯が垂下するもののようである。15は，地文の縄文上に多条の沈線が施されるものである。16は，単位文様として隆帯が垂下する。17，18はいずれも，蛇行する沈線が垂下するものであるが，18



第18図　５Ｔ出土土器（1）

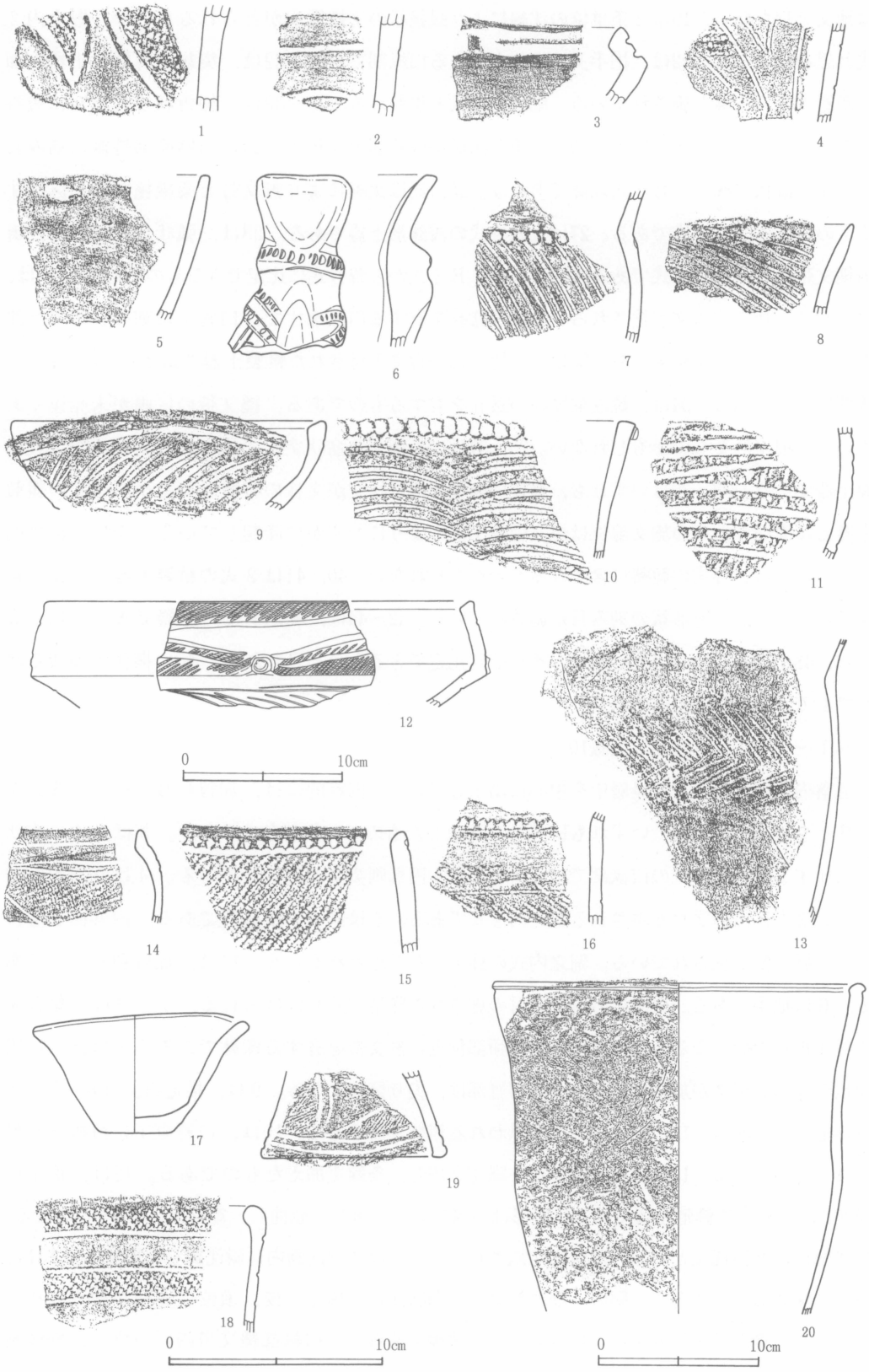


第19図　５Ｔ出土土器（2）

は地文を持たない。19は２条単位の沈線により眼鏡状の文様構成がとられるもので，堀之内２式と思われる。20～22は，把手又は突起を有する口縁部である。22は，突起の外周と土器内面に渦巻き状の沈線が施されている。堀之内２式と思われる。23～33は，加曽利Ｂ式または曽谷式である。23は，内面口唇下に横位１条の沈線が巡る加曽利Ｂ式。24は口唇端部外側に刻み目を有する波状口縁で，Ｂ２式以降であろう。25，26は沈線により無文帯と条線施文部を区画するものである。Ｂ２式である。27は，曽谷式の浅鉢形土器である。28は，弧状に区画された磨消縄文帯を有するＢ３式である。29～31は，Ｂ３式から曽谷式に比定できるものである。30は，コンパス文状の沈線文が施される。31は補修孔を有する口縁部片で，口唇下に刻み目と平行沈線により梯子状文を施す。32，33は，口唇下に紐線文の付された粗製土器である。34～41は，後期安行式である。34は，焼成前穿孔の透孔を有するものである。縄文帯の区画が未発達であるので，前出的なものかもしれない。35，37は，帯縄文と瘤状突起の施される典型的な１式精製土器である。38，39はいずれも，横位の連続刻み目状文が文様の特徴となるが，１式の粗製土器とは異なり，その施文部位は縄文帯施文部のようにわずかに隆起している。やはり前出的で，あるいは曽谷式の範疇に含まれるものかもしれない。40，41は２式の精製土器である。縄文帯に沿って，三角形状の刻み目が施されている。42～44は，晩期前半の土器である。42が３ａ式，43が３ｂ式，44が３ｃ式に，それぞれ比定できるものと思われる。45は網代痕の残る底部である。堀之内式土器である。

５Ｔ－００１（第20図，図版10）

遺構内堆積と思われる貝層中を中心に出土している。内容的には，加曽利Ｂ２式～Ｂ３式が主体となる。１，２は，いずれもP1内から出土したもので，称名寺式である。３は，くの字状に内屈する堀之内１式の口縁部で，２条の沈線と円形刺突文が施されている。４は直線的な沈線区画文内に，縄文が充填される堀之内２式である。５は無文の口縁部である。内外面ともによく研磨調整が施されている。堀之内式の鉢形土器と思われる。６～14は，加曽利Ｂ２式である。６は把手である。表面にのみ刻み目の施された隆帯が貼り付けられる。７～９は，集合する斜沈線が特徴となるものである。７は頸部付近に無文帯を有する深鉢であろう。肩部には円形状の連続刺突文が加えられる。８の口唇部は，尖り気味となる。９は，推定口径14.6cmを測る浅鉢形土器である。10，11はＢ２式と思われる粗製土器である。10は，口唇直下に紐線文が付されるものである。11は地文に節の粗い縄文を施し，条線を加えたものである。12は，推定口径26.7cmを測る浅鉢形土器である。器形は口縁部直下で著しく屈曲し，算盤玉をイメージさせる。口縁部には磨消縄文と円形の貼付文が施され，体部には沈線区画内に斜沈線を充填する。13は，薄手の深鉢形土器である。胴のくびれ部は，矢羽状沈線を施した後，横位に調整が加えられ，区画のない無文帯を形成する。14は口唇下に沈線を巡らせ，口縁部縄文帯内に斜位の沈線区画による磨消縄文帯が施される。15は，口唇下に刻み目状の連続刺突を施すＢ３式の口縁部であ

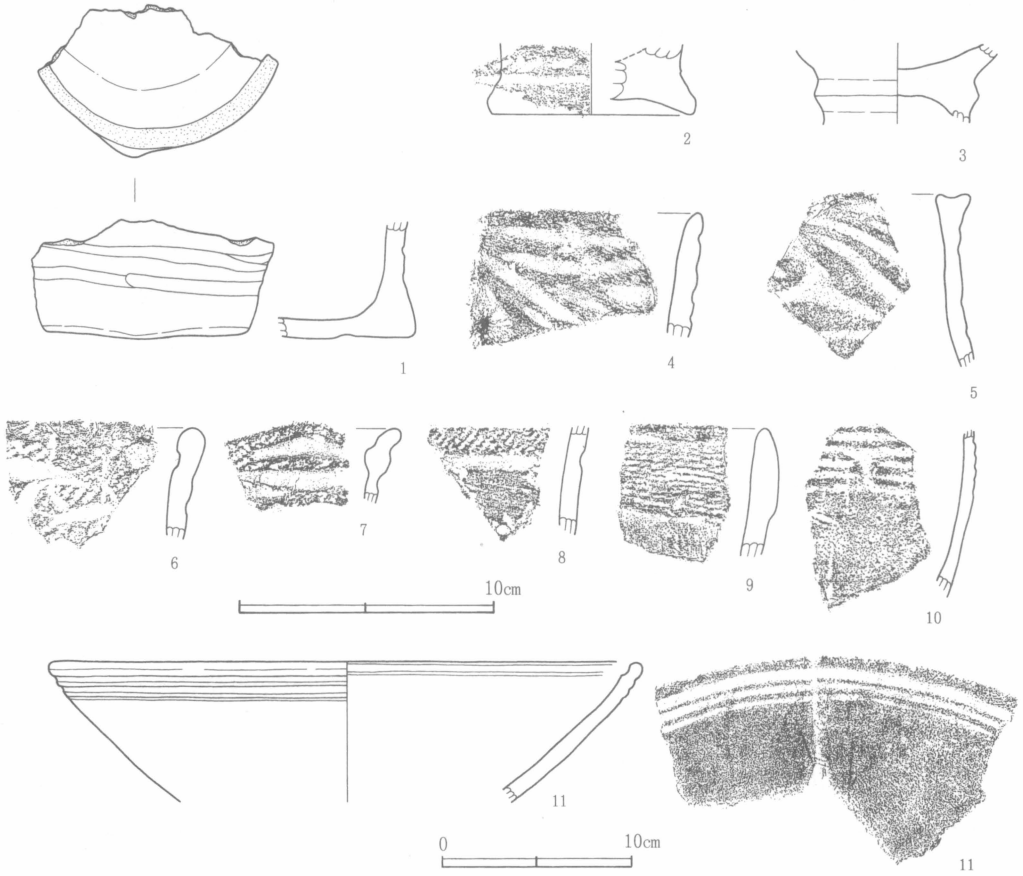


第20図　５Ｔ－００１出土土器

る。16は胴のくびれ部付近の破片で，くびれ部には押し引き状の連続刺突が施されている。やはりＢ３式である。17は口縁部が大きく外反し，口径10.0cmを測る小型の鉢形土器である。文様はなく，外面はヘラ状工具による調整が縦位，斜位に施されている。加曽利Ｂ式と思われる。18は，帯縄文の施された安行１式精製土器である。19は台付鉢の台部で，安行３ａ式と思われる。20は，純貝層上面で出土した無文の深鉢形土器である。推定口径23.0cmを測る。口唇部のみ丁寧な研磨調整が施される。胴部は内外面とも，古墳時代の土師器に見られるような調整で，内面がヘラ状工具によるナデ，外面はやはりヘラ状工具によりケズリ状の調整がなされている。器形から加曽利Ｂ式の粗製土器として捉えられよう。

６Ｔ（第21図，図版11－１）

安行３ｃ式を主体としている。このトレンチからのみ，晩期後半の安行３ｄ（前浦）式，千網式とその併行期の土器が少量ながら出土している。器種的にも，いわゆる異形を呈する土器のほか，別項で述べる土偶，土版等の特殊な遺物が多い。また，土中の水分の影響か，これらの土器，土製品の多くは，まるで表面が溶けだしたかのように荒れており，胎土中の砂粒が浮き出ている。１は，船形状を呈すると思われるものである。施される沈線から３ｃ式と判断する。２～５も３ｃ式であろう。２は，台付鉢の底部と思われる。３も同様のものと思われるが，

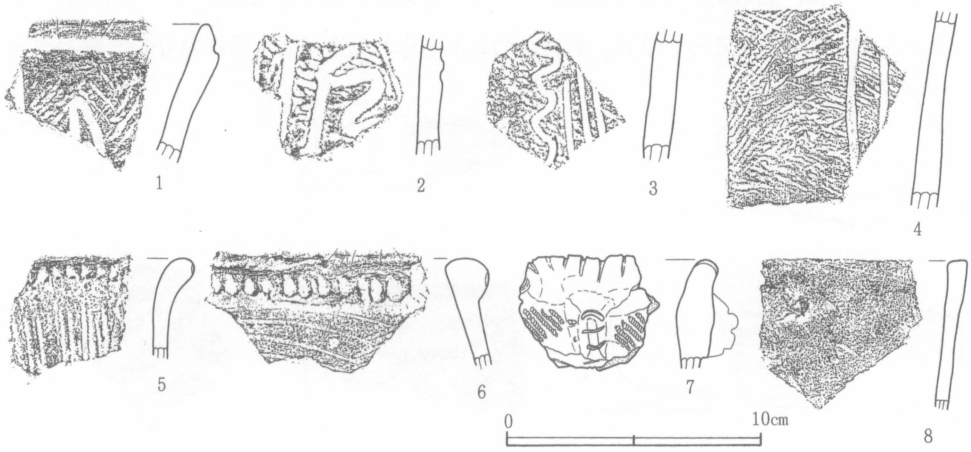


第21図　６Ｔ出土土器

台部外面には貼付による隆帯が巡らされている。5には，玉抱き三叉文が見られる。3ｃ～3ｄ式に比定されよう。6以下は晩期後半の土器である。6～8は，前浦式である。口縁部片である6，7は，内面にも沈線文が施されている。9は千網式である。折り返した口縁部に横位，胴部に縦位の撚糸文が施されている。10も千網式で，いわゆる浮線網状文が施される。11は，推定口径31.2㎝を測る浅鉢形土器である。口縁部の内面に1条，外面に3条の沈線が浮線状文風に巡る。おそらく大洞Ａ式土器の模倣品であろう。

7Ｔ（第22図，図版11－2）

全体としての出土量は多量ではないが，加曽利Ｂ式，堀之内式の順に多く出土している。1～4は，堀之内1式である。図示したすべての地文には，無節縄文が施されている。また，施文される沈線は，多条化しない。5は外反する器形の口縁部で，口唇部外面に刻み目を有する。加曽利Ｂ2式以降のものである。6は，安行2式以降の粗製土器である。7は，こぶし状突起の付される安行3ａ式である。8は無文の口縁部片で，器表面はヘラ状工具により調整される。晩期の粗製土器である。

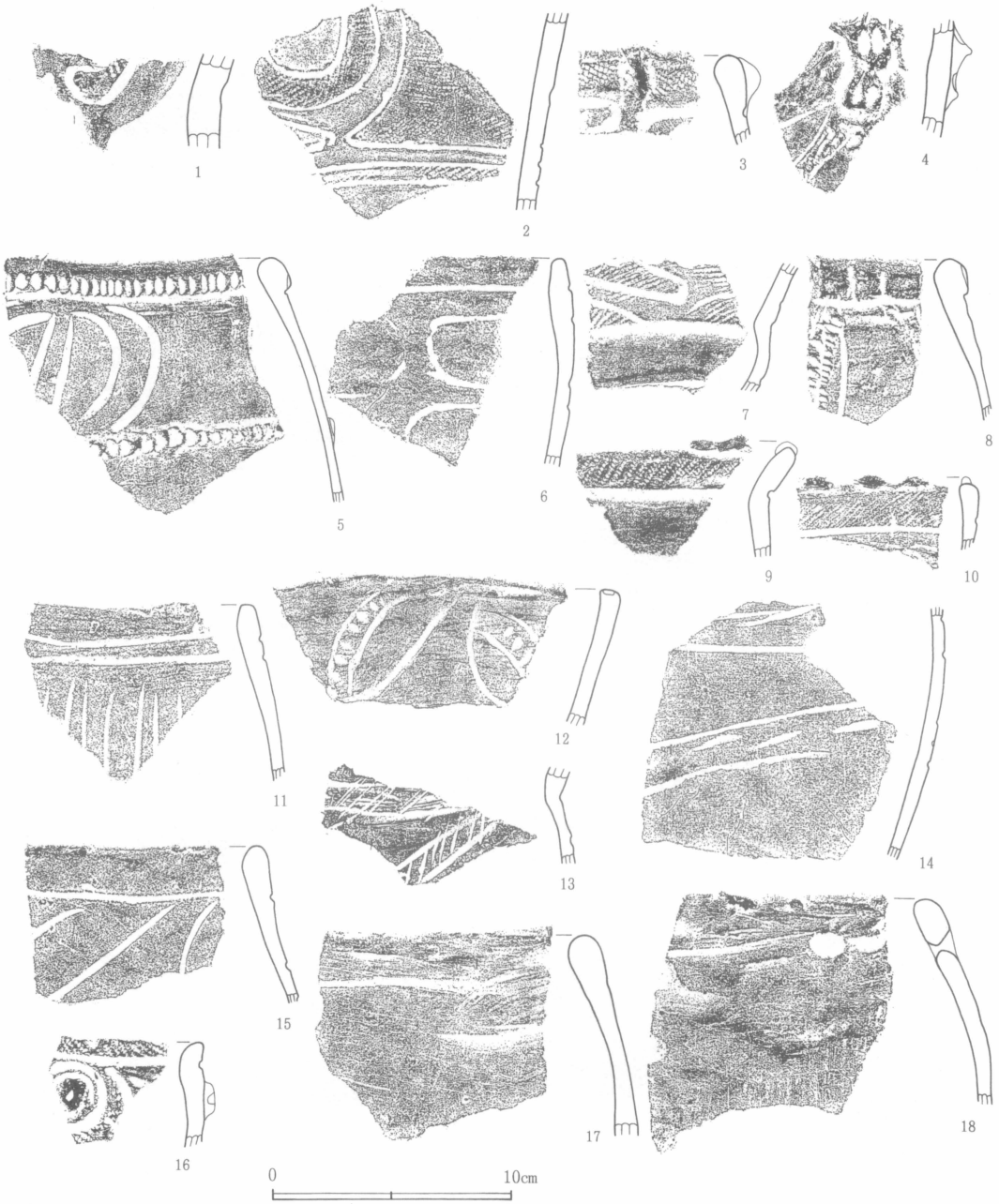


第22図　7Ｔ出土土器

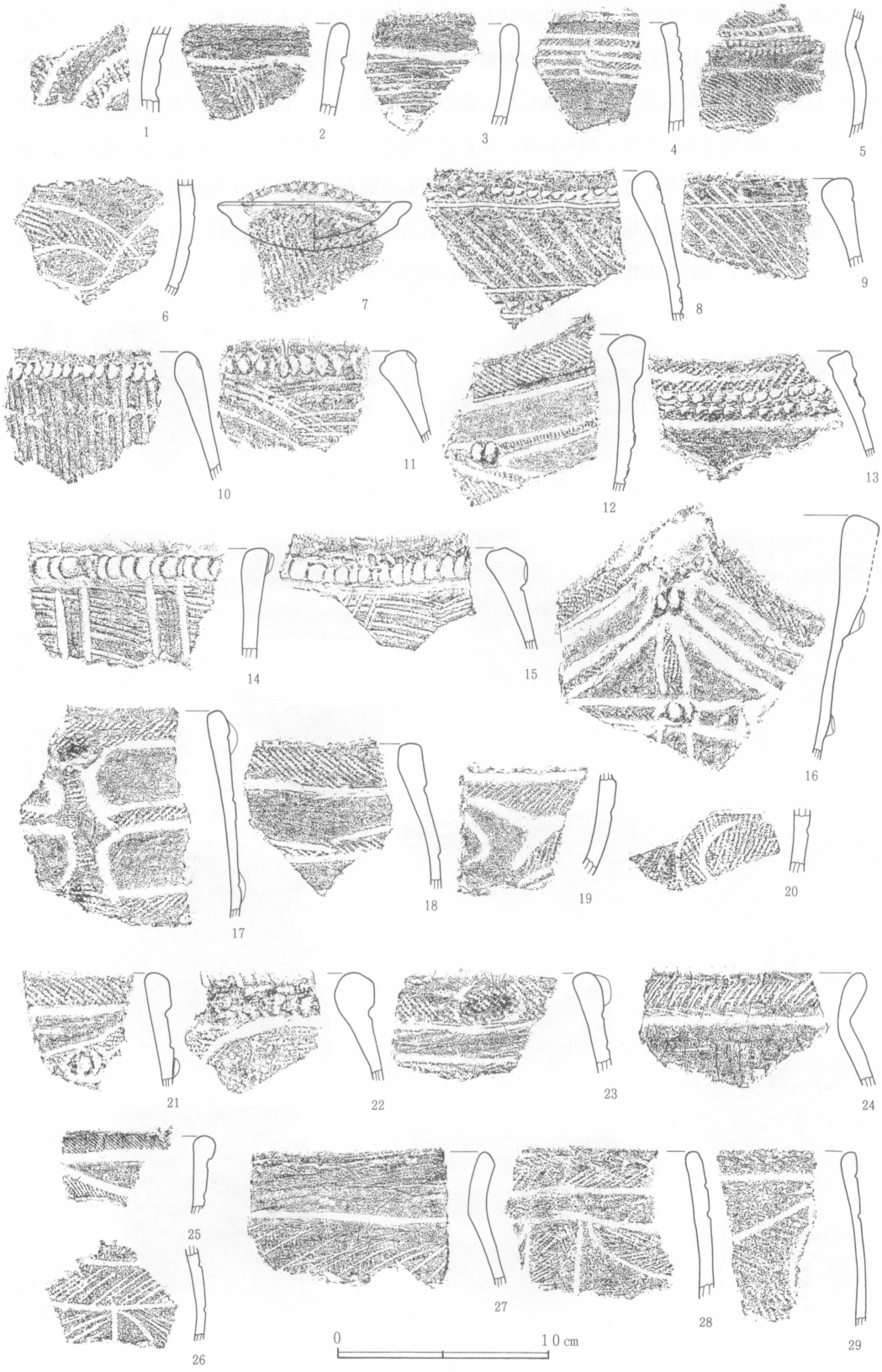
8Ｔ（第23図，図版11－3）

晩期前半の土器を主体とし，次いで後期安行式，加曽利Ｂ式の順に多く出土した。1は，沈線により区画された縄文帯がＪ字状文となる称名寺1式である。2は，円形状の沈線区画を主文様とし，区画帯内に縄文を充填する堀之内2式である。3は，瘤状貼付文の付された安行1式精製土器である。4は波状口縁のもので，波頂部下に豚鼻状貼付文が縦位に連続して付されている。安行2式の系譜を引き継ぐ安行3ａ式である。5は縦位2条の沈線を，やはり2条の弧状沈線が両側から囲む文様が配されている。器面の調整はヘラ状工具による。施される紐線文に後期安行式粗製土器の名残を留める3ａ式である。6は，口唇下に1条の沈線を巡らせ，以下は枠状文が施される。姥山式である。7は，安行3ａ～3ｂ式の浅鉢形土器であろう。8

は，意匠文風の沈線区画内に，細密沈線状の短沈線が充填されるものである。３ｂ～３ｃ式に比定されよう。９，10は口唇上に小突起が貼り付けられる３ｂ式である。９は口縁部の外屈から，広口壷の可能性がある。11は口縁部に２条の沈線を巡らせ，以下に縦位の沈線を集合状に施す。３ｂ式に比定されよう。12～15は，３ｃ式である。12～14は，沈線文間に短沈線や，刻み目状の列点文が加えられるものである。16は，円形の貼付文が付される晩期後半の前浦式である。類例が銚子市余山貝塚出土土器の中に見られる（石橋宏克ほか1991）。17，18は，晩期前半に比定されると思われる粗製土器である。18は補修孔が穿たれている。



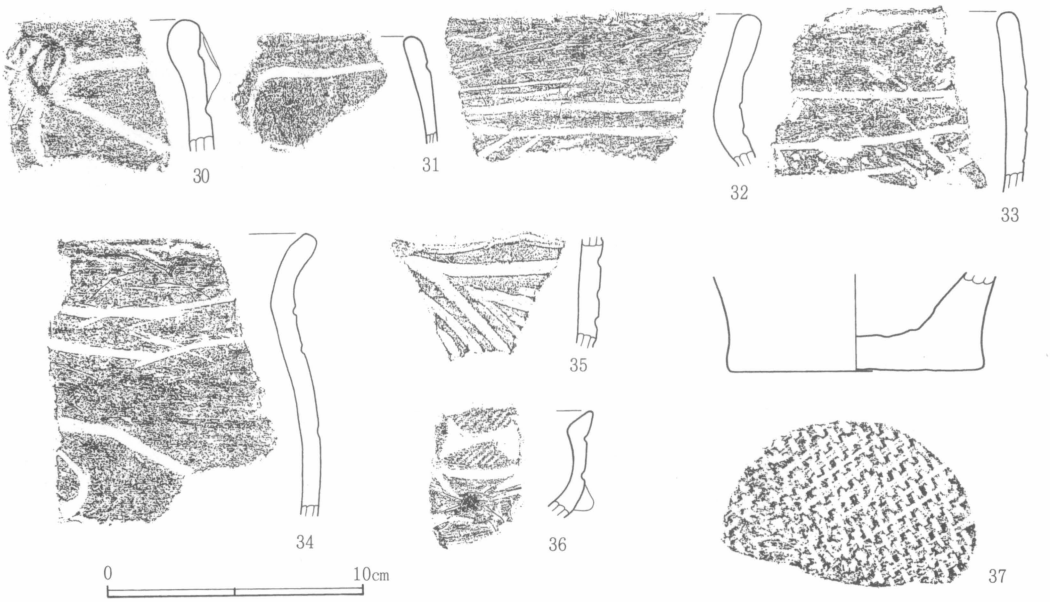
第23図　８Ｔ出土土器



第24図　9Ｔ出土土器（1）

９Ｔ（第24図，第25図，図版12）

設定したトレンチの位置が８Ｔと近接することもあり，出土土器の組成はほぼ同様の比率を示す。１～３は，称名寺式である。１は，磨消縄文により意匠文を作出する１式である。２，３は，口縁部に１条の沈線を巡らせ，以下に細かな集合条線を施している。４～７は，加曽利Ｂ式である。４は，横位の沈線により区画された４条の縄文帯が，さらに縦位の階段状沈線により区切られるＢ１式である。５は弧状の沈線区画文と，頚部付近に刻み目状の連続刺突文が施されるＢ３式である。６は，弧状の沈線区画文が眼鏡状を呈しており，曽谷式と思われる。７は，推定口径9.0cmを測る小皿状の土器である。口唇部外側には刻み目が施されており，加曽利Ｂ２式以降のものと思われる。８～11は，安行１式の粗製土器である。12は，波状口縁に平行して三角形に文様を区画する，いわゆる三角内帯文が施される。内帯文上には刻み目が施され，安行２式の精製土器である。13は口唇下の肥厚部に帯縄文を巡らせ，帯縄文の中位より下に刻み目状の連続刺突文を加えるものである。１式か２式の判断はできなかった。14，15は２式の粗製土器である。14の沈線区画内の条線は，磨消されている。16は波頂部を欠損する。三角内帯文が縄文帯となる安行３ａ式である。17～22は，いずれも安行３ａ～３ｂ式に比定されるものである。17は枠状文により区画された帯縄文を有し，低い瘤状の貼付文が付される。19の縄文原体は細く，３ｂ式の可能性が高い。22は肥厚する口唇部の外側に，多截竹管状工具により押し引き状の連続刺突が加えられている。23～31は，安行３ｂ式である。23の帯縄文上には，瘤状貼付文が付されている。24は外屈する口縁部で，細密沈線状の集合条線が施されている。25は口縁部が折り返されている。施文される縄文原体は，極めて細かい節のＲＬである。26～28は，区画内に細密沈線が充填されるものである。26と28には，この時期に典型的な半円

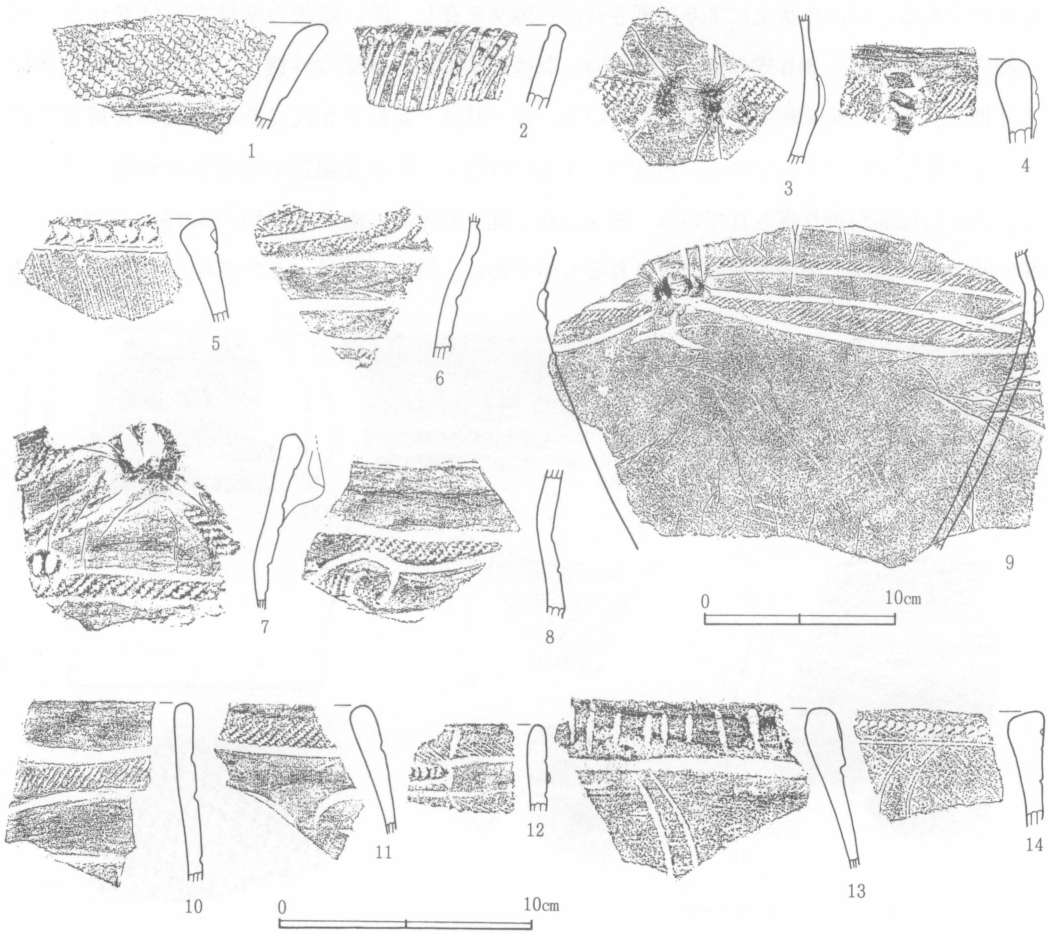


第25図　９Ｔ出土土器（2）

状の区画文が併せて用いられる。29は，平縁ながら菱形状の沈線文を有するものである。姥山式系である。30，31もやはり姥山式系のものである。32～34は，安行３ｃ式である。いずれも沈線は，彫刻的に施されている。33には列点文が伴う。35は，比較的太い沈線を狭い間隔で施す３ｄ式である。36は，胴部に眼鏡状浮文の付される浅鉢形土器である。大洞Ｂ式から大洞Ｂ－Ｃ式に比定できよう。37は，網代痕を有する底部である。堀之内式土器である。推定底径は9.8㎝を測る。

１０Ｔ－００１（第26図，図版13－１）

覆土の中層から出土した安行３ａ式の大型破片をはじめとして，主体は晩期前半である。１は，外反する器形の口縁部である。口縁下部は削られるように調整され，縄文帯部分が肥厚する。加曽利Ｂ２式である。２は斜位の条線文のみ施される口縁部である。やはりＢ２式である。３は縄文帯の端部に，一対の瘤状突起が付されるものである。曽谷式から安行１式に比定されよう。４，５は安行１式で，４が精製，５が粗製土器である。６～11は，安行３ａ式である。７のみ縦長の豚鼻状突起を有するもので，縄文帯となった三角内帯文が施されている。６，８，10は，沈線区画による磨消縄文を主な手法とし，三叉文等が施されている。９は，推定最大径

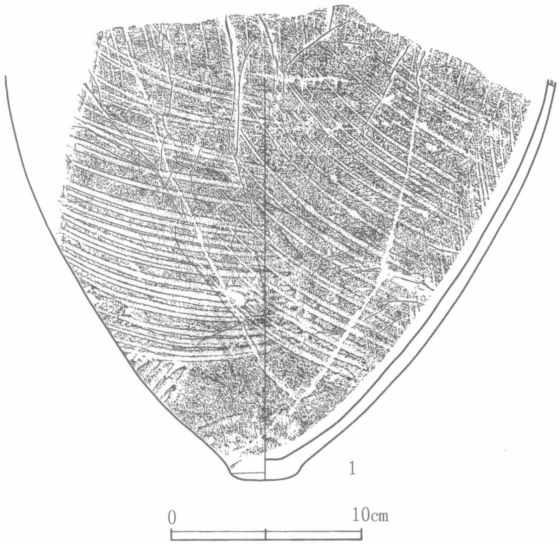


第26図　１０Ｔ－００１出土土器

25.5cmを測り，最大径付近に瘤状貼付文が施される広口壷である。12は，口縁部に細密沈線が充填される３ｂ式である。13，14は口唇下に刻み目状の短沈線又は，連続刺突が施される３ｃ式である。

１０Ｔ－００２（第27図，図版13－２）

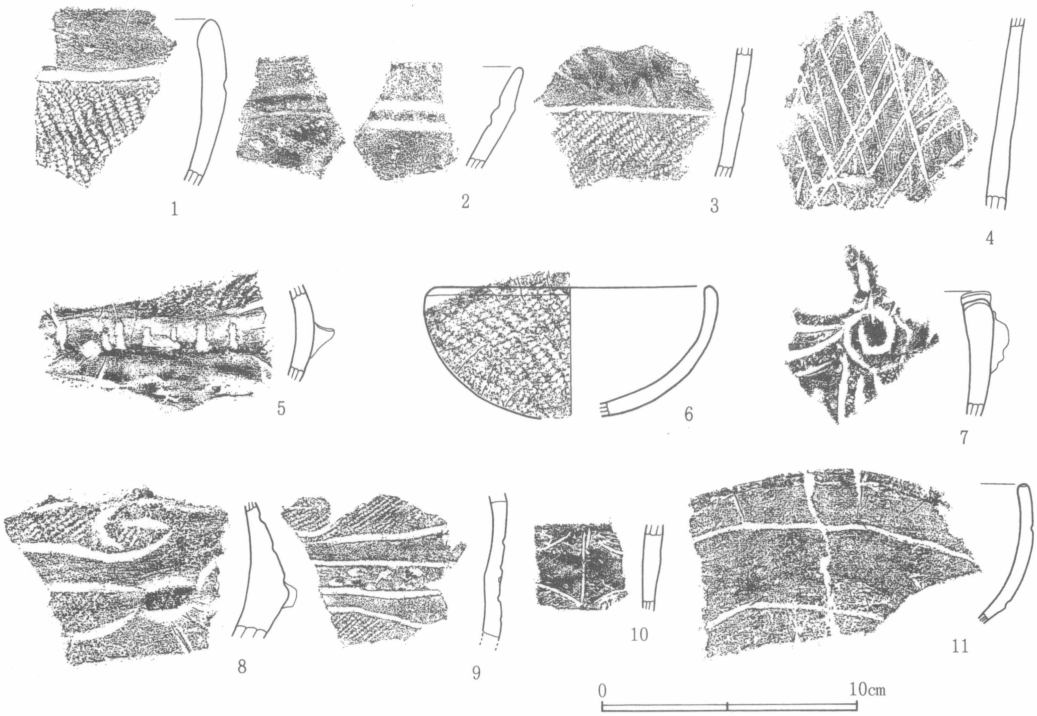
坑底から安行式の粗製土器下半部が出土している。１は底部が尖底状となり，条線のみが弧を描くように整然と施される。上半を欠くため，後晩期のいずれに属するものかは不明である。



第27図　１０Ｔ－００２出土土器

１１Ｔ（第28図，図版14－１）

後期中葉と晩期前半の土器が主体的である。１は内湾する口縁部で，緩い波状口縁のものである。称名寺式と思われる。２～５は，加曽利Ｂ式である。２は，内面に２条の沈線が巡るものである。３は，細い沈線により磨消縄文が区画されるＢ２式である。４は，斜格子状に沈線が施されるＢ２式である。５は，貼り付けられた隆帯の上端に刻み目が施される。Ｂ２式以降のものと思われる。６は，推定口径10.9cmを測る丸底の椀形土器である。器面には単節ＲＬ縄文

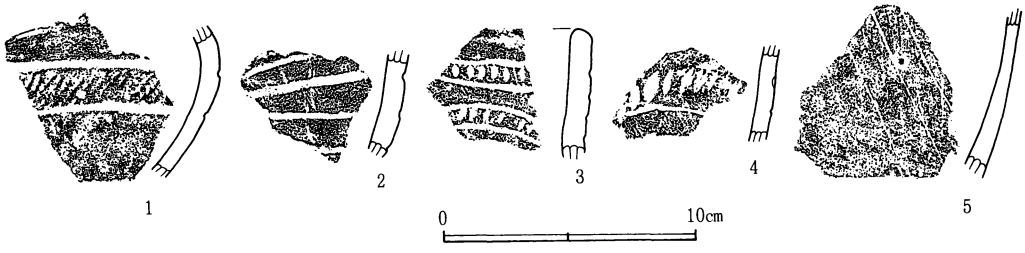


第28図　１１Ｔ出土土器

が横位に回転施文されるが，底面までは及ばない。加曽利B式である。7は，装飾突起の付された口縁部で，安行3a式と思われる。8は，安行3a式の広口壷の肩部であろう。9は三叉文の透かし彫りが施されるもので，台付鉢の台部である。やはり3a式と思われる。10は，菱形状の区画文が施される。3a～3b式に比定できよう。11は，3b～3c式の浅鉢形土器であろう。

11T－001（第29図，図版13－3）

晩期前半の土器を主体的に出土している。1は，安行3b式の浅鉢形土器である。2は，彫刻的な沈線が施されている。3は口縁部片で，梯子状の沈線文が施されている。4は，比較的細い区画沈線を施し，刻み目状の連続刺突を加えるものである。5は，粗製土器の底部付近の破片である。細い斜沈線のみが施されている。

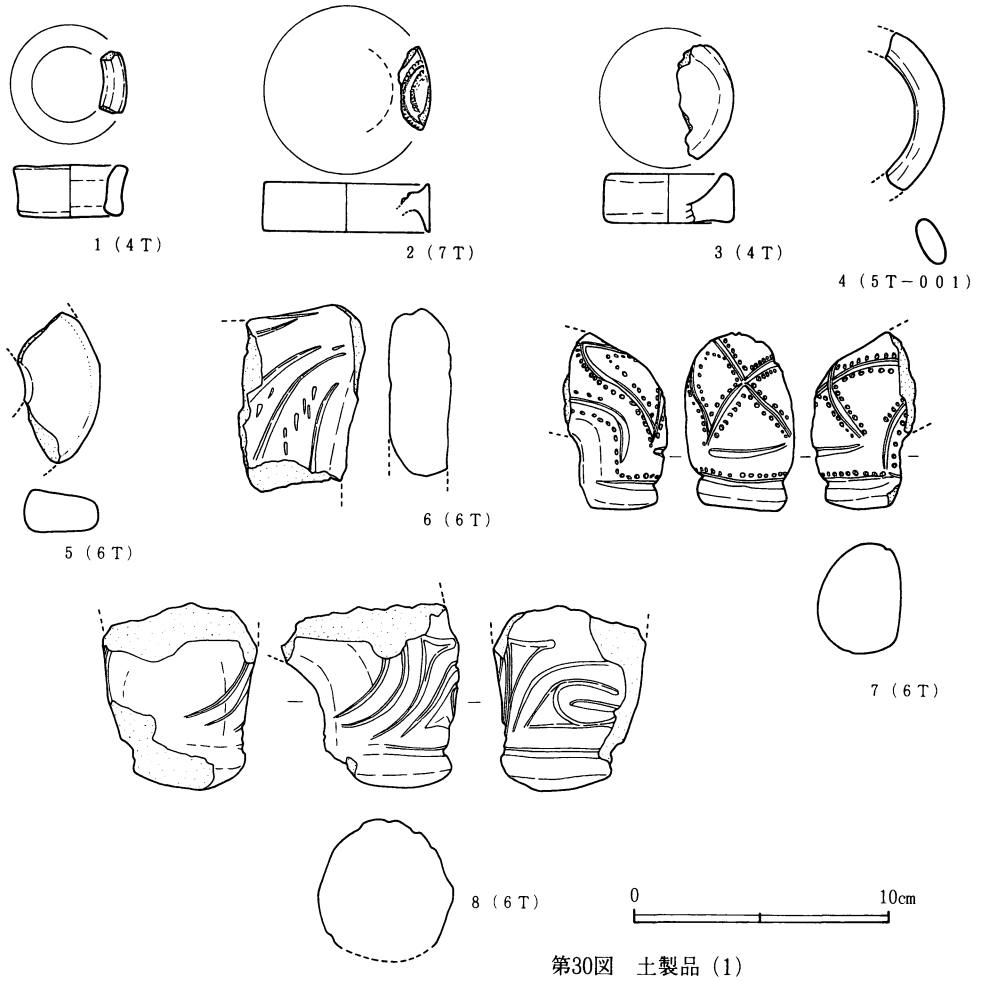


第29図　11T－001出土土器

2．土製品（第30図，第31図，図版15－1）

今回の調査で出土した土製品には，土器片錘，土製円盤，耳飾，土版，土偶等がある。耳飾等の土製装身具は，昭和39年～41年の調査において，透かし彫りが施されるなどの精緻なものが多く見られたが，今回は小さな破片での出土でしかない。また，土偶，土版も前回の調査では，晩期初頭の住居跡内及びその周辺調査区から良好な資料が出土している。

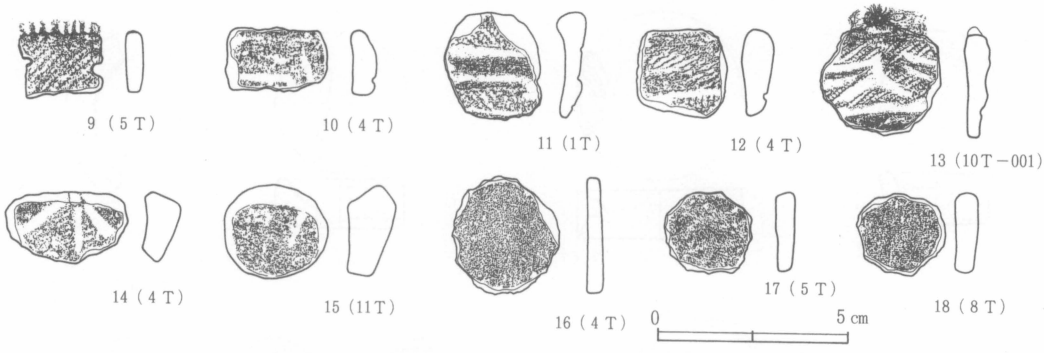
1～3は，滑車形を呈する耳飾である。2の内面には，半円状の刻み目を有する装飾帯が施されている。晩期前半のものであろう。3は，中心部が中空にならないものである。4は環状の土製品であるが，形状的に貝輪と似るため，腕輪の可能性があろう。5は，中心部に孔を有する偏平な土製品である。6は，土版である。おそらく全体の1／4程度の残存であろう。安行3c式に比定できる。7，8は土偶脚部である。7のほうが，足を横に踏ん張る度合いが強い。文様の特徴から，7は安行3c式に，8は安行3d式に比定されよう。9は，焼成前穿孔の孔を両側に有するもので，口唇部以外の外周は欠損面である。形状から土器片錘と判断したが，別の用途に用いられた可能性も考えられよう。10～18は，土製円盤である。9点の出土のうち，後期の土器片を使用したものが2点（10，12），晩期の土器片を使用したものが3点（11，13，14）を数えるほかは，無文のため時期不明である。土器片の周囲は，打欠調整されるものが多く，研磨調整されるものは11，12，14，15である。



第30図　土製品（1）

挿図番号	遺物番号	種　　別	現存長cm	幅 cm	重さ g	時　期	備　　考
1	4T, 6	耳　　飾	－	1.85	5.05	後期以降	幅は，高さ
2	7T, 2	耳　　飾	—	1.80	5.11	晩期前半	〃
3	4T, 23	耳　　飾	－	1.85	16.92	後期以降	〃
4	5T—001,105	環状土製品	－	1.70	10.39	後期以降	〃
5	6T, 5	有孔円盤？	5.80	1.60	26.13	後期以降	〃
6	6T, 5	土　　版	6.70	4.70	102.9	安行 3 c	
7	6T, 2	土　　偶	6.70	4.20	113.6	安行 3 c	
8	6T, 4	土　　偶	7.10	6.90	236.9	安行 3 d	
9	5T, 6	土器片錘	3.25	2.40	7.92	不　　明	焼成前抉り
10	4T, 6	土製円盤	3.90	2.40	12.55	後期前半	
11	1T, 29	土製円盤	4.05	3.30	15.79	加曽利 B	
12	4T, 6	土製円盤	3.50	3.40	18.56	不　　明	
13	10T—001,3	土製円盤	4.60	4.20	24.04	晩期前半	
14	4T, 4	土製円盤	4.70	2.70	18.30	晩期前半	
15	11T, 2	土製円盤	4.00	3.60	26.26	不　　明	
16	4T, 115	土製円盤	4.50	4.25	16.13	不　　明	
17	5T, 7	土製円盤	3.40	3.10	10.73	不　　明	
18	8T, 11	土製円盤	3.40	3.00	11.61	不　　明	

表2　土製品属性表



第31図　土製品（2）

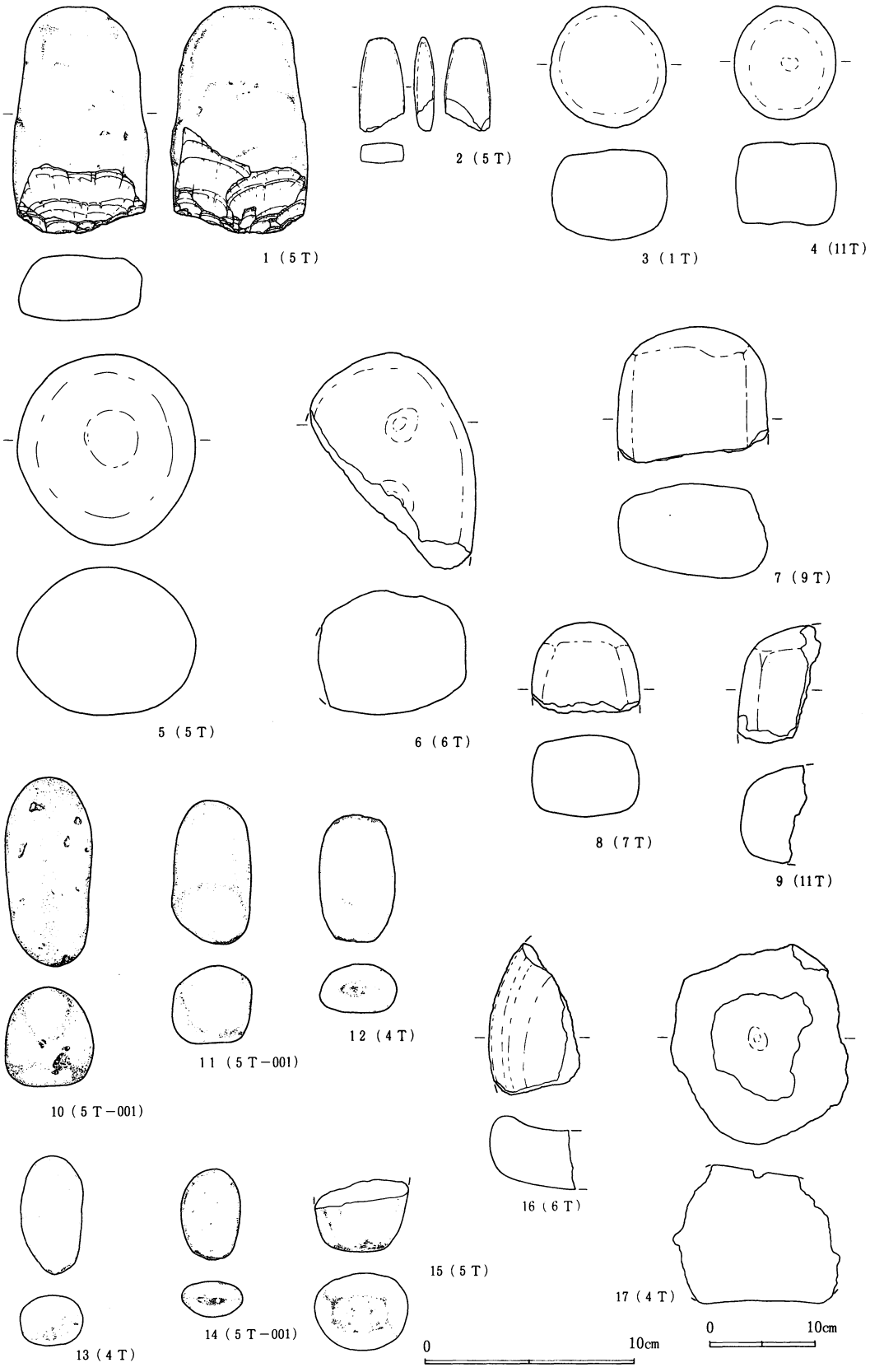
3．石器（第32，33図，図版14－2）

今回の調査では，表3のとおり計102点の石器が出土した。

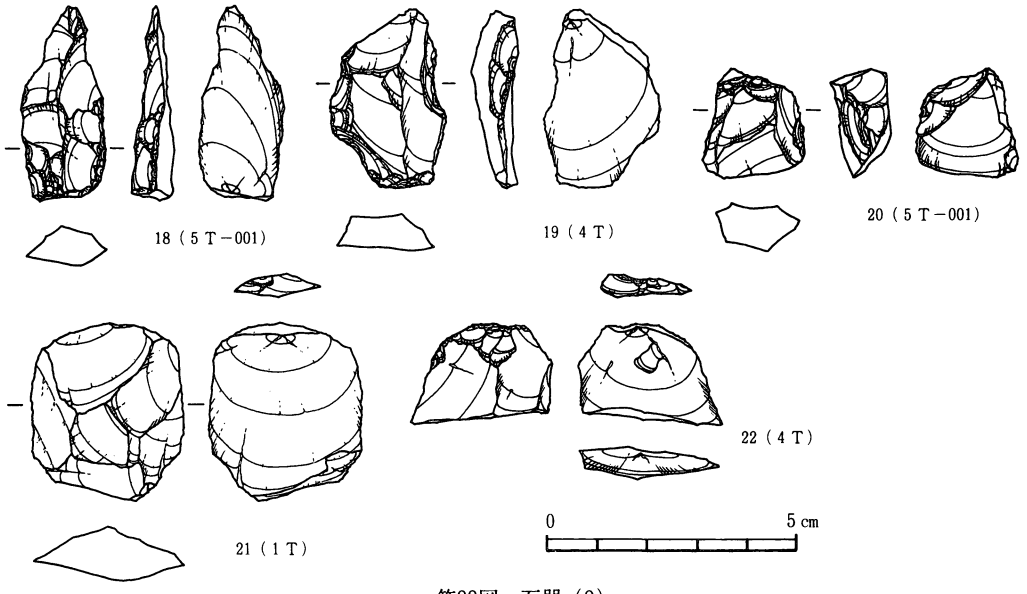
1は打製石斧である。流紋岩の偏平礫を素材とし，礫の一端から表裏面に調整を施し刃部を作出している。2は蛇紋岩製の小型の磨製石斧である。刃部が欠損している。全面に精緻な研磨が施され，あるいは装飾品としての機能をもつものと思われる。3～9は，磨石である。7が花崗岩製である以外はすべて安山岩製である。3，4は平面形状は円形，断面形状が長方形となり，円柱状の磨石である。全面にわたってよく研磨され，4は上下の平坦面にわずかに窪みを持つ。5，6は全面に研磨痕が見られるが，自然礫の形状に近いものである。7～9は平面形状が長方形に近いものである。10～15は敲石である。いずれも棒状礫の上下両端に微細な敲打痕が見られる。16，17は石皿である。16は安山岩製で，縁辺部が急激に立ち上がる断面形状である。17は花崗岩製で，表面には窪みが見られる。18～20は調整痕のみられる剥片である。18はチャート製の縦長剥片の打面側に調整が施され，おそらく石鏃の作出を意図したものと思われる。19はチャート製の剥片の縁辺全周に急角度の調整が施される。形状を整えるための調

	打製石斧	磨製石斧	磨石	敲石	石皿	軽石製品	石鏃	R・F1	U・F1	F1	Ch	Co	計
1T			1							1	1		3
2T													—
3T													—
4T				3	2	1		1		2	6	2	17
5T	1	1	5	3							2	1	13
5T－001				3				1			6		10
6T			1	1	1					7	18	1	29
7T			1										1
8T										1	4		5
9T			2							1	11	1	15
10T											1		1
11T			2							3	2	1	8
計	1	1	12	10	3	1		2		15	51	6	102

表3　石器組成表(1)


1（5T）
2（5T）
3（1T）
4（11T）
5（5T）
6（6T）
7（9T）
8（7T）
9（11T）
10（5T−001）
11（5T−001）
12（4T）
13（4T）
14（5T−001）
15（5T）
16（6T）
17（4T）
0
10cm
0
10cm

第32図　石器（1）



第33図　石器（2）

整ではなく，刃部作出のための調整と思われ，スクレイパー的なものである。20は黒曜石製の剥片の打面を除去するような調整が施されるが，使用目的は不明である。21はチャート製，22は黒曜石製の剥片である。両者とも表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向には規則性がみられず，単に石器の素材となりうる剥片を得るために剥離されたものといえる。

挿図番号	遺物番号	器種	石質	長さcm	幅cm	厚cm	重量g	備考
1	5T,7	打製石斧	流紋岩	10.43	6.51	3.07	315.26	一部被熱。
2	5T,6	磨製石斧	蛇紋岩	4.29	2.15	0.94	16.11	刃部欠損。全面に研磨痕。
3	1T,1	磨石	安山岩	5.56	5.52	4.17	187.54	被熱。
4	11T,2	磨石	安山岩	5.24	4.83	3.81	116.50	被熱。
5	5T,271	磨石	安山岩	8.51	8.83	6.80	738.05	
6	6T,3	磨石	安山岩	10.00	7.89	5.71	544.21	被熱。
7	9T,2	磨石	花崗岩	6.21	7.15	4.41	311.44	被熱。
8	7T,1	磨石	安山岩	4.20	5.18	3.74	122.38	被熱。
9	1T,2	磨石	安山岩	5.47	3.93	4.47	109.87	被熱。
10	5T－001,267	敲石	砂岩	8.63	4.21	4.50	233.57	両端に微細な敲打痕。
11	5T－001,26	敲石	砂岩	6.63	3.79	3.67	143.38	両端に微細な敲打痕。
12	4T－6	敲石	石英斑岩	5.72	3.64	2.31	73.24	両端に敲打痕。被熱。
13	4T－6	敲石	砂岩	5.68	3.05	2.41	61.62	両端に微細な敲打痕。
14	5T－001,1	敲石	安山岩	4.37	2.84	1.69	33.85	両端に微細な敲打痕。被熱。
15	5T－1	敲石	砂岩	3.49	4.44	3.67	60.23	被熱。
16	6T－5	石皿	安山岩	6.93	4.34	3.50	103.91	被熱。
17	4T－2	石皿	花崗岩	18.52	16.78	13.24	5480.00	被熱。
18	5T－001,2	調整痕ある剥片	チャート	3.70	1.70	0.86	4.08	打面付近に調整痕。
19	4T－6	調整痕ある剥片	チャート	3.39	2.34	0.74	6.53	全周に調整痕。
20	5T－001	調整痕ある剥片	黒曜石	2.10	2.03	0.94	4.42	打面除去。
21	1T－24	剥片	チャート	3.41	3.09	1.03	11.92	
22	4T－16	剥片	黒曜石	1.91	2.88	0.62	3.66	末端部折断。

表4　石器属性表

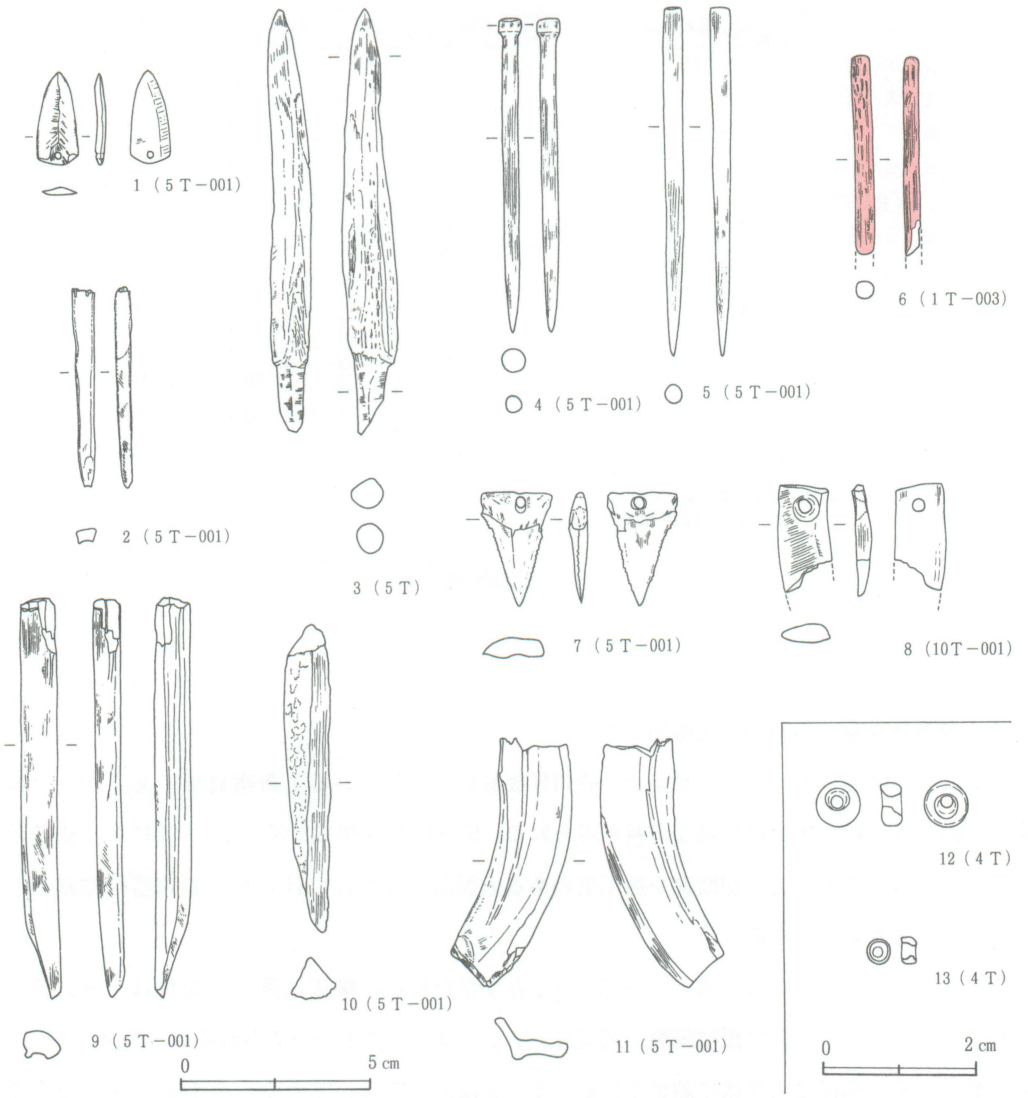
	打製石斧	磨製石斧	磨石	敲石	石皿	軽石製品	石鏃	R・F1	U・F1	F1	Ch	Co	計
安山岩			11	2	1								14
変成岩				1									1
砂岩				6									6
花崗岩			1		1								2
石英斑岩				1									1
絹雲母片岩					1								1
流紋岩	1												1
蛇紋岩		1											1
軽石						1							1
黒曜石										1	20		21
チャート								2		13	30	5	50
メノウ										1		1	2
凝灰岩											1		1
計	1	1	12	10	3	1		2		15	51	6	102

表5　石器組成表(2)

4．骨角牙製品（第34図，図版15－2）

これまでの調査においても，数多くの骨角牙製品が出土している上新宿貝塚であるが，今回も5T-001号住居跡を中心に良好な資料が得られた。5T-001号住居内からは，ヘアピン，垂飾品等の製品をはじめとして，切断痕や加工痕のある未製品状のものも目立ち，骨角器製作跡として捉えることが可能であろう。

1は，イノシシ牙製の鏃である。基部には小孔が穿たれる。縁辺は薄く，全体は丁寧に研磨されている。2は，マグロ類鰭棘製の刺突具である。側面に擦痕が認められる。3も刺突具で，鹿角製である。基部は円柱状に調整される。4，5は，ヘアピンである。きわめて丁寧な調整が施されるため，素材については明確ではない。4は軸頂に単純な加飾部を有する。5は，4と同一の素材から加工されたと思われるが，加飾部は持たない。6は1T-003号住居跡から出土したもので，中程から折れているが，やはり軸頂に加飾部を持たないヘアピンの可能性が高い。骨製と思われるが，明確ではない。全体に赤彩が施されている。7は，サメの歯に穿孔を施した垂飾品である。エナメル質部分は変色し，暗褐色を呈する。8は，イノシシ牙製の垂飾品である。穿孔は片側から行われている。9～11は，未製品または製品の一部と考えられるものである。9はシカの中手骨，または中足骨で，擦り切り切断後，全体を研磨している。10は，鹿角加工品である。自然面は磨耗により，ほとんど失われている。角枝の先端部分を切断したものである。11は，イノシシ牙の加工品である。先端に擦り切り切断痕が認められるほか，側縁部に擦痕が観察できる。12，13は，いずれも貝サンプルの選別作業中に検出された，貝製の小玉垂飾品である。出土地点は4Tで，加曽利B式期のマガキを主体とする純貝層中である。



第34図　骨角牙製品

挿図番号	遺物番号	種　別	材　質	現存長cm	幅 cm	備　考
1	5T—001,1	鏃	イノシシ牙	2.4	1.1	
2	5T−001,176	刺突具	マグロ類鰭棘	5.1	0.6	側面に擦痕（加工痕）
3	5T,20	刺突具	鹿角	10.8	1.4	基部に擦痕（加工痕）
4	5T−001,174	ヘアピン	不明	8.0	0.6	
5	5T−001,175	ヘアピン	不明	8.9	0.5	
6	1T−003,4	ヘアピン	不明	5.1	0.5	赤彩,半欠
7	5T−001,8	垂飾品	サメ歯	2.9	1.9	エナメル質暗褐色
8	10T−001,1	垂飾品	イノシシ牙	2.7	1.4	
9	5T−001,230	器種不明加工品	シカ中手（足）骨	10.2	1.0	加工痕,切断痕
10	5T−001,268	鹿角加工品	鹿角	7.9	1.2	切断痕
11	5T−001,18	イノシシ牙加工品	イノシシ牙	6.4	2.0	加工痕,先端に切断痕
12	4T,10	貝の玉	不明貝	0.6	0.25	幅は高さ
13	4T,9	貝の玉	不明貝	0.3	0.2	〃

表6　骨角牙製品属性表

5．動物遺体（表７）

今回の調査でも，多種にわたる動物遺体が多量に検出されている。本貝塚に包含される動物遺体の多様性を，改めて認識させられることになった。ただし，今回は本格的な分析までには至らなかったため，本格的な分析を今後の課題とし，中間報告のみにとどめる。なお，種同定については，軟体動物を当文化財センター　西野雅人が行い，脊椎動物を千葉県立中央博物館小宮　孟氏にお願いした。

(1) 採取の方法と同定結果

今回同定されたのは，発掘によるものと４Ｔ，5T-001，８Ｔ，９Ｔから採取した貝層のコラムサンプルから得られた資料である。この他にも全体の分析が進めば，小型魚骨，微小巻貝等を中心に，新たな種名が追加されることは確実である。

1．貝　類

腹足綱

ツボミガイ	*Patelloidae pygmaea lampanicola*
イボキサゴ	*Umbonium (Suchium) monilifeum*
スガイ	*Lunella coronata coreensis*
タマキビガイ	*Littorina brevicula*
ウミニナ属	Batillaria spp.
ヘナタリ属	Cerithidea sp.
アカニシ	*Rapana venosa*
イボニシ	*Thais (Reishia) clavigera*
マルテンスマツムシガイ	*Indomitrella martensi*
アラムシロガイ	*Reticunassa festiva*
バイ	*Balylonia japonica*
イモガイ科	Conidae gen. & sp. indet.
腹足綱前鰓亜綱種不明（巻き貝の蓋）	
腹足綱種不明	

掘足綱

ツノガイ	*Antalis weinkauffi*

二枚貝綱

サルボウガイ	*Scapharca subcrenata*
ハイガイ	*Tegillarca granosa*
マガキ	*Crassostrea gigas*
マツカサガイ	*Inversidens japanensis*
イシガイ科種不明	Unionidae gen. & sp. indet.
バカガイ	*Mactra chinensis*
シオフキガイ	*Mactra quadrangularis*
カガミガイ	*Dosinorbis(Phacosoma)japonicum*
ミルクイガイ	*Tresus keenae*
サビシラトリガイ	*Macoma contaburata*
ムラサキガイ	*Soletellina diphos*
シオサザナミガイ科種不明	Psammobiidae gen. & sp. indet.
マテガイ	*Solen strictus*
ウネナシトマヤガイ	*Trapezium liratum*
ナミマガシワガイ	*Anomia chinensis*
ヤマトシジミ	*Cobicura japonica*
アサリ	*Ruditapes philippinarum*
オキアサリ	*Gomphina (Macridiscus) aequilatera*
ハマグリ	*Meretrix lusoria*
オキシジミ	*Cyclina sinensis*
ハナグモリガイ	*Glauconome chinensis*
オオノガイ	*Mya arenaria oonogai*
イシゴロモガイ	*Aspidopholas yoshimurai*
二枚貝綱種不明	Gen. & sp. indet.

2．節足動物

甲殻綱

フジツボ類	Thoracica fam. indet.

3．魚類

軟骨魚綱

サメ類	Lamniformes fam. indet.

硬骨魚綱

ボラ科種不明	Mugilidae sp.
スズキ属	*Lateolabrax sp.*
クロダイ属	*Acanthopagras sp.*

4．鳥類

ガンカモ科種不明	Anatidae gen. & sp. indet.

5．哺乳類

サル	*Macaca fuscata*
タヌキ	*Nyctereutes procyonoides*
キツネ	*Vulpes vulpes*
イヌ	*Canis familiaris*
アナグマ	*Meles meles*
クジラ目種不明	Cetacea fam. indet.
ニホンジカ	*Cervus nippon*
イノシシ	*Sus scrofa*

表７　動物遺存体種名一覧

(2) 動物遺体の概要

今回の同定資料は，全体のうちの一部であり，数的処理についても貝類が行われたのみである。ここでは，前回の報告（直良 1941）を参考に，各類にみられる傾向を簡単に整理しておく。

貝　類

腹足綱12種，掘足綱１種，二枚貝綱21種が同定された。後に述べるが，貝種の組成は各地点ごとに特徴のあるものとなっている。概略的には，４Ｔ，５Ｔの南側弧状貝層にマガキをはじめとする鹹水産貝類が多く，８Ｔ，９Ｔの北側弧状貝層では汽水産であるヤマトシジミが主体を占めている。また，同じ汽水産で今回新たに同定されたマツカサガイを含むイシガイ科貝類は，いずれも微量ではあるが5T-001，８Ｔのサンプル中に見られる。なお，サンプル中には現れなかったが，標本用に採取したものの中にカガミガイ，ナミマガシワが認めらた。

魚　類

４種が同定されている。今回もフナ等の淡水魚は同定されなかったが，今後分析が進めばこれらについても同定される可能性が高い。

鳥類・哺乳類

９種が同定された他に人骨が検出されている。哺乳類ではシカが最も多く，小宮氏によれば，イノシシには幼猪の骨が含まれるという。

６．貝サンプル（表８～表11）

南側弧状貝層に設定した４Ｔ，５Ｔと北側弧状貝層に設定した８Ｔ，９Ｔの４か所から合計27カットの貝サンプルを採取している。このうち５Ｔのみが遺構内貝層のサンプルである。時期的には４Ｔ，５Ｔが後期加曽利Ｂ式，８Ｔ，９Ｔは晩期前半と思われる。分析は1990年度に千葉市誉田高田貝塚で行った方法によった（出口 1991）。

(1) 採取方法

各サンプルの容量は40×40×５㎝（8,000㎤）である。すべて垂直コラムで採取している。基本的には各サンプルの容量は同一であるが，5T-001，８Ｔではそれぞれ１カット目に貝層上面の凹凸部分を含めているため，他よりも採取量がやや多い。また，5T-001では床面まで，その他の地点では，土層に入って破砕貝等の混入しないところまでサンプルの採取を行った。

(2) 貝類の組成比率

発掘調査中の印象とは異なり，全体的にはヤマトシジミが７割を占めている。これは８Ｔ，９Ｔでの個体数によるところが大きく，特に９Ｔでは99％までがヤマトシジミによって占められている。

４Ｔ

マガキが個体数で65％，重量で90％を占める。個体数では，ウネナシトマヤガイが21％の割

合でこれに次ぐ。ウネナシトマヤガイは小型の貝なので，2㎜メッシュ以下の資料中には，まだ多くの個体が含まれていると推察される。汽水産であるヤマトシジミは個体数で11％である。

5T－001

数量的にはマガキが37.5％と最も多いが，数量比20％のハマグリも重量比ではマガキとほぼ同率の28％である。ほかにはウネナシトマヤガイ，サルボウガイ，オオノガイが個体数50以上を数え，数量比では4.9％以上のものとなる。また，アカニシの個体数19は，他地点よりも目立って多い。汽水産ではヤマトシジミとマツカサガイが見られ，8.1％の割合を示す。このように当地点では，多種のものがそれぞれ比較的均等に含まれていることが特徴である。

8T・9T

ともにヤマトシジミが個体数で95％以上を占める。特に9Tでは，重量比でも97.3％を占める。鹹水産の貝では，ハマグリが8Tで数量比2.2％，9Tで同じく0.6％の他は，マガキ，サルボウガイ等がわずかに見られる。

(3) 貝類の計測値

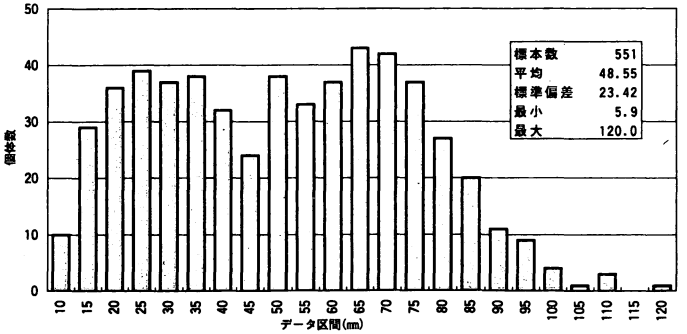
今までに述べたように，各地点ごとでの貝類組成はそれぞれ特徴のあるものとなっており，これらは調査時からも感じていたことである。8T，9Tは比較的近接するトレンチだが，ヤマトシジミの大きさの違い等が観察され，計測による詳細なデータ化が期待された。

計測は，これら主要な貝を対象に行い，グラフ化したものを掲載した。ここでは，全地点でまとまった数量が得られたヤマトシジミを中心に，地点ごとの比較を行い，おおよその傾向を整理しておきたい。8T，9Tのヤマトシジミは，全体には殻長25～32.5㎜のものが両地点ともに多く見られるが，殻長37.5㎜以上の大きなものは8Tに多い。これをカット別に見ると，8Tの上位で採取したサンプルに殻長30～37.5㎜のものが多いのに対し，下位では22.5～30㎜のやや小さいものが多く採られている。9Tでは，上位で22.5～32.5㎜の広い範囲が採られ，中位では22.5～35㎜に広がる。それよりも下位にあたるCut6では，やはり中位と似た傾向であるが，25㎜以下がほとんど採られていないことに注目できる。南側弧状貝層である4T，5Tでは資料数が少ないという制約があるが，いずれも殻長20～30㎜のものが多い傾向を示し，明らかに北側貝層よりも小型が採られている。南側と北側では，貝層の形成時期の違いが，ヤマトシジミ殻長の違いにも反映されたものと思われ，気候などの変化とも関わるものであろう。次にマガキでは，4Tでまとまった資料数を得ている。4Tのグラフは，いわゆる双峰状を呈し，殻長40㎜以下の比較的小型のものと，殻長45～75㎜以上の大きなものの両方が採られている。カット別には，ほとんどのカットが平均的な傾向を示す中で，貝層中位であるCut5だけに殻長60～77.5㎜のものが集中する。4Tの資料となった貝層がブロック的なもので，比較的短期間のうちに堆積したとするならば，これらの違いは採取時期（季節）の違いよりも，むしろ採取場所の違いによるところが大きいように思われる。ハマグリは資料数的に少なく，グラフにまとまり

4Ｔ　貝類同定結果

	Cut01				Cut02				Cut03				Cut04				Cut05				Cut06				Cut07				合計			
	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)
ウミニナ属		0.0		0.0	0	0.0	0.2	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.2	0.0
アカニシ	0	0.0	2.3	0.1	0	0.0	2.8	0.1	0	0.0	29.7	0.7	0	0.0	30.5	0.8		0.0		0.0	1	0.1	15.9	0.5	2	0.3	79.1	2.9	3	0.1	160.3	0.6
イボニシ	1	0.2	4.4	0.1		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.0	4.4	0.0
アラムシロガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	0.4	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.0	0.4	0.0
サルボウガイ	0	0.0	2.3	0.1	0	0.0	3.4	0.1	0	0.0	3.9	0.1		0.0		0.0	0	0.0	0.7	0.0		0.0		0.0	0	0.0	4.9	0.2	0	0.0	15.2	0.1
ハイガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	2.3	0.1		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.0	2.3	0.0
マガキ	246	48.1	2914.5	84.6	361	52.0	3055.9	80.6	517	65.5	3929.4	88.9	424	77.7	3666.4	96.2	700	72.2	5728.8	95.7	515	70.0	3312.0	95.0	395	65.0	2418.7	88.4	3158	65.1	25025.7	90.4
シオフキガイ	1	0.2	0.7	0.0	1	0.1	11.9	0.3	2	0.3	15.3	0.3		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	10.6	0.3	2	0.3	6.3	0.2	7	0.1	44.8	0.2
サビシラトリガイ		0.0		0.0	3	0.4	0.7	0.0	1	0.1	0.3	0.0	2	0.4	5.7	0.1		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.2	7.9	0.3	7	0.1	14.6	0.1
マテガイ	0	0.0	0.1	0.0	0	0.0	0.2	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.3	0.0
ウネナシトマヤガイ	116	22.7	18.9	0.5	139	20.0	22.9	0.6	138	17.5	22.6	0.5	87	15.9	11.9	0.3	207	21.3	25.0	0.4	181	24.6	25.6	0.7	151	24.8	22.1	0.8	1019	21.0	149.0	0.5
ヤマトシジミ	131	25.6	280.7	8.1	168	24.2	470.4	12.4	119	15.1	279.0	6.3	23	4.2	59.0	1.5	33	3.4	62.1	1.0	18	2.4	32.4	0.9	41	6.7	114.2	4.2	533	11.0	1297.8	4.7
ハマグリ	8	1.6	108.0	3.1	14	2.0	148.3	3.9	6	0.8	64.1	1.5	2	0.4	10.4	0.3	6	0.6	149.0	2.5	8	1.1	86.2	2.5	5	0.8	51.6	1.9	49	1.0	617.6	2.2
オキシジミ	0	0.0	1.4	0.0	1	0.1	11.9	0.3	0	0.0	1.6	0.0	2	0.4	24.1	0.6	0	0.0	1.7	0.0		0.0		0.0	2	0.3	15.4	0.6	5	0.1	56.1	0.2
アサリ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	1.3	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	1.3	0.0
ハナグモリガイ	3	0.6	1.7	0.0	2	0.3	0.3	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	5	0.1	2.0	0.0
オオノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	2	0.3	0.6	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	2	0.3	2.1	0.1	4	0.1	2.7	0.0
イシゴロモガイ	5	1.0	0.4	0.0	5	0.7	1.1	0.0	2	0.3	0.1	0.0	6	1.1	1.2	0.0	24	2.5	1.0	0.0	12	1.6	0.5	0.0	7	1.2	0.3	0.0	61	1.3	4.6	0.0
二枚貝綱種不明	0	0.0	110.5	3.2	0	0.0	59.7	1.6	0	0.0	70.1	1.6	0	0.0	0.4	0.0	0	0.0	19.9	0.3	0	0.0	3.5	0.1	0	0.0	12.0	0.4	0	0.0	276.1	1.0
合　計	511	100.0	3445.9	100.0	694	100.0	3789.7	100.0	789	100.0	4419.4	100.0	546	100.0	3810.9	100.0	970	100.0	5988.2	100.0	736	100.0	3486.7	100.0	608	100.0	2734.6	100.0	4854	100.0	27675.4	100.0

4Ｔ　マガキ殻長



5Ｔ－０１　マガキ殻長

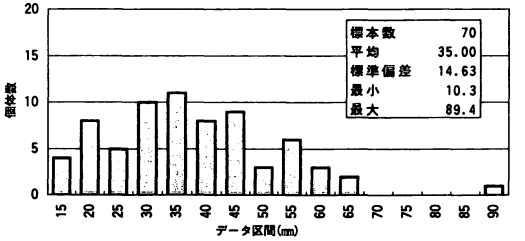


表８　貝類同定結果・計測分布（1）

を見せないが，４Ｔでは35mm以下のものが採られていないこと，５Ｔでは30～35mmと50～55mm付近に頂点があり，小型と中型のものの両方が採られていることがわかる。

５Ｔ－００１　貝類同定結果

	Cut01				Cut02				Cut03				Cut04				Cut05				合計			
	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)	個体数	(%)	重量 g	(%)
ツボミガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.3	0.1	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	0.1	0.0
スガイ	1	0.3	5.2	0.2	1	0.4	1.7	0.1	4	1.2	1.9	0.1	1	0.6	1.1	0.1	1	2.2	0.9	0.4	8	0.7	10.8	0.2
タマキビガイ		0.0		0.0	2	0.8	0.1	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	2	0.2	0.1	0.0
ウミニナ属	5	1.4	2.6	0.1	5	2.1	1.8	0.1	2	0.6	2.7	0.1	3	1.7	0.5	0.1	2	4.4	0.9	0.4	17	1.5	8.5	0.1
アカニシ	5	1.4	76.3	3.3	3	1.3	26.1	2.0	6	1.7	138.6	6.9	5	2.9	52.2	5.7	0	0.0	1.7	0.7	19	1.6	294.9	4.3
イボニシ		0.0		0.0	1	0.4	2.6	0.2	2	0.6	11.5	0.6		0.0		0.0		0.0		0.0	3	0.3	14.1	0.2
マルテンスマツムシガイ	6	1.7	0.6	0.0	2	0.8	0.1	0.0	3	0.9	0.4	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	11	1.0	1.1	0.0
アラムシロガイ	1	0.3	0.1	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.6	0.1	0.0	1	2.2	0.0	0.0	3	0.3	0.2	0.0
イモガイ科		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.3	3.3	0.2		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	3.3	0.0
腹足綱種不明		0.0		0.0	1	0.4	0.1	0.0	0	0.0	0.2	0.0	0	0.0	1.7	0.2		0.0		0.0	1	0.1	2.0	0.0
ヤカドツノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.1	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.1	0.0
サルボウガイ	20	5.6	318.6	13.8	20	8.4	279.0	21.2	23	6.7	298.6	15.0	3	1.7	104.1	11.4	3	6.7	56.6	22.2	69	6.0	1056.9	15.6
ハイガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.3	3.2	0.2	1	0.6	4.4	0.5		0.0		0.0	2	0.2	7.6	0.1
マガキ	161	45.1	871.1	37.6	74	31.1	189.7	14.4	124	36.2	510.6	25.6	63	36.6	251.5	27.6	11	24.4	58.2	22.8	433	37.5	1881.1	27.7
マツカサガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	5	1.5	1.3	0.1		0.0		0.0		0.0		0.0	5	0.4	1.3	0.0
イシガイ科		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.9	0.1	0	0.0	1.9	0.7	0	0.0	2.8	0.0
シオフキガイ	8	2.2	37.7	1.6	9	3.8	35.5	2.7	8	2.3	57.6	2.9	4	2.3	14.9	1.6	5	11.1	2.2	0.9	34	2.9	147.9	2.2
バカガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	2	0.6	1.9	0.1		0.0		0.0		0.0		0.0	2	0.2	1.9	0.0
サビシラトリガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.3	8.1	0.4	2	1.2	10.4	1.1		0.0		0.0	3	0.3	18.5	0.3
ムラサキガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.3	11.0	0.6		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	11.0	0.2
マテガイ	1	0.3	0.8	0.0	0	0.0	0.4	0.0	0	0.0	0.4	0.0	1	0.6	0.0	0.0		0.0		0.0	2	0.2	1.6	0.0
ウネナシトマヤガイ	26	7.3	7.5	0.3	16	6.7	4.1	0.3	16	4.7	4.4	0.2	19	11.0	4.4	0.5	7	15.6	2.2	0.9	84	7.3	22.6	0.3
ヤマトシジミ	30	8.4	92.0	4.0	19	8.0	69.7	5.3	27	7.9	74.2	3.7	11	6.4	25.8	2.8	2	4.4	3.3	1.3	89	7.7	265.0	3.9
ハマグリ	62	17.4	571.4	24.7	59	24.8	470.1	35.8	71	20.7	518.7	26.0	33	19.2	282.9	31.0	8	17.8	60.3	23.6	233	20.2	1903.4	28.0
オキシジミ	8	2.2	52.6	2.3	5	2.1	33.0	2.5	8	2.3	90.7	4.5	6	3.5	33.1	3.6	3	6.7	15.3	6.0	30	2.6	224.7	3.3
アサリ	5	1.4	24.9	1.1	4	1.7	26.7	2.0	6	1.7	19.2	1.0	4	2.3	6.5	0.7	0	0.0	1.4	0.5	19	1.6	78.7	1.2
ハナグモリガイ	1	0.3	1.3	0.1	6	2.5	0.9	0.1	12	3.5	1.3	0.1	5	2.9	0.3	0.0		0.0		0.0	24	2.1	3.8	0.1
オオノガイ	16	4.5	21.3	0.9	10	4.2	79.0	6.0	19	5.5	120.0	6.0	10	5.8	56.6	6.2	2	4.4	1.2	0.5	57	4.9	278.1	4.1
イシゴロモガイ	1	0.3	0.0	0.0	1	0.4	0.0	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	2	0.2	0.0	0.0
二枚貝綱種不明	0	0.0	231.4	10.0	0	0.0	93.4	7.1	0	0.0	117.0	5.9	0	0.0	60.1	6.6	0	0.0	49.4	19.3	0	0.0	551.3	8.1
合　計	357	100.0	2315.4	100.0	238	100.0	1314.0	100.0	343	100.0	1997.0	100.0	172	100.0	911.5	100.0	45	100.0	255.5	100.0	1155	100.0	6793.4	100.0

表９　貝類同定結果（2）

8 T　貝類同定結果

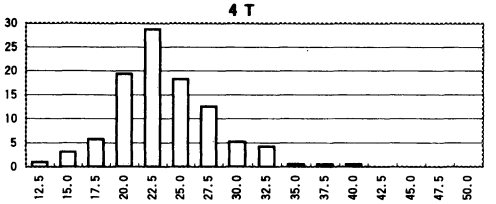
	Cut01			Cut02			Cut03			Cut04			Cut05			Cut06			Cut07			Cut08			合計		
	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)
イボキサゴ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	2 0.2	0.3	0.0	0.0		0.0	1 0.4	1.2	0.2	3 0.1	1.5	0.0
スガイ	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	0.2	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.1	0.5	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.0	0.7	0.0
アカニシ	0 0.0	0.2	0.0	0 0.0	1.8	0.1	0 0.0	2.4	0.1	2 0.4	59.4	2.8	2 0.2	71.6	2.3	5 0.5	98.7	3.2	4 0.6	29.6	1.4	1 0.4	23.6	3.0	14 0.3	287.3	1.3
イボニシ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	2 0.2	3.3	0.1	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	2 0.0	3.3	0.0
アラムシロガイ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	0.2	0.0	0.0		0.0	1 0.4	0.8	0.1	1 0.0	1.0	0.0
バイ	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.2	4.8	0.2	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.0	4.8	0.0
ツノガイ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	0.9	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	0.9	0.0
サルボウガイ	0 0.0	8.0	0.2	1 0.1	19.4	0.6	3 0.5	36.9	1.3	3 0.5	27.1	1.3	3 0.3	66.9	2.2	9 1.0	144.1	4.7	4 0.6	73.7	3.4	2 0.9	54.1	6.9	25 0.5	430.2	2.0
ハイガイ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	2 0.2	5.3	0.2	1 0.1	4.3	0.1	0.0		0.0	0.0		0.0	3 0.1	9.6	0.0
マガキ	2 0.3	6.2	0.2	2 0.3	7.3	0.2	3 0.5	11.1	0.4	3 0.5	12.6	0.6	5 0.5	25.6	0.8	8 0.9	43.7	1.4	8 1.1	72.9	3.4	1 0.4	9.8	1.3	32 0.6	189.2	0.9
イシガイ科	0 0.0	1.1	0.0	0 0.0	0.2	0.0	0 0.0	1.2	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	2.5	0.0
シオフキガイ	0.0		0.0	1 0.1	12.2	0.3	0 0.0	1.4	0.0	1 0.2	8.9	0.4	1 0.1	1.2	0.0	2 0.2	0.5	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	5 0.1	24.2	0.1
ミルクイガイ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	29.6	1.4	0.0		0.0	0 0.0	29.6	0.1
ウネナシトマヤガイ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.1	0.2	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.0	0.2	0.0
オオトリガイ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	0.0	0.0
サビシラトリガイ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	2 0.2	0.7	0.0	1 0.1	0.7	0.0	0.0		0.0	1 0.4	5.9	0.8	4 0.1	7.3	0.0
シオサザナミガイ科	2 0.3	8.0	0.2	2 0.3	2.1	0.1	2 0.3	10.9	0.4	0.0		0.0	1 0.1	2.1	0.1	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	7 0.1	23.1	0.1
ヤマトシジミ	654 97.3	3739.7	96.5	678 97.6	3372.1	95.7	635 95.5	2664.0	93.3	534 94.8	1849.3	88.4	880 94.2	2557.5	83.8	868 94.5	2583.3	84.0	662 94.2	1793.7	83.0	213 91.4	605.5	77.2	5124 95.2	19165.1	89.5
ハマグリ	9 1.3	70.3	1.8	10 1.4	87.3	2.5	18 2.7	79.9	2.8	14 2.5	77.6	3.7	24 2.6	145.6	4.8	18 2.0	145.5	4.7	16 2.3	96.9	4.5	8 3.4	47.2	6.0	117 2.2	750.3	3.5
オキシジミ	3 0.4	30.4	0.8	0 0.0	11.0	0.3	1 0.2	3.3	0.1	2 0.4	16.0	0.8	2 0.2	18.9	0.6	1 0.1	18.1	0.6	4 0.6	21.1	1.0	2 0.9	4.3	0.5	15 0.3	123.1	0.6
アサリ	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.2	0.4	0.0	0.0		0.0	2 0.2	7.6	0.2	0.0		0.0	1 0.1	3.5	0.2	0.0		0.0	4 0.1	11.5	0.1
オキアサリ	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.2	4.8	0.2	2 0.4	15.3	0.7	6 0.6	12.9	0.4	1 0.1	4.8	0.2	3 0.4	19.4	0.9	1 0.4	7.3	0.9	14 0.3	64.5	0.3
オオノガイ	2 0.3	1.0	0.0	1 0.1	0.9	0.0	0 0.0	8.4	0.3	2 0.4	0.5	0.0	2 0.2	38.5	1.3	1 0.1	30.1	1.0	1 0.1	1.9	0.1	2 0.9	1.5	0.2	11 0.2	82.8	0.4
二枚貝綱種不明	0 0.0	9.5	0.2	0 0.0	7.7	0.2	0 0.0	26.2	0.9	0 0.0	26.3	1.3	0 0.0	94.9	3.1	0.0		0.0	0 0.0	18.6	0.9	0 0.0	22.7	2.9	0 0.0	205.9	1.0
種不明	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	0.7	0.0	0.0		0.0	0 0.0	0.7	0.0
合　計	672 100.0	3874.4	100.0	695 100.0	3522.0	100.0	665 100.0	2855.9	100.0	563 100.0	2093.0	100.0	934 100.0	3053.5	100.0	919 100.0	3075	100.0	703 100.0	2161.6	100.0	233 100.0	783.9	100.0	5384 100.0	21419.3	100.0

9 T　貝類同定結果

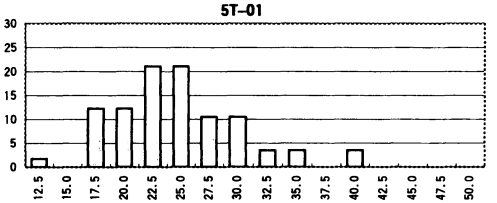
	Cut01			Cut02			Cut03			Cut04			Cut05			Cut06			Cut07			合計		
	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)	個体数(%)	重量 g	(%)
アカニシ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.1	14.4	0.4	0.0		0.0	0 0.0	9.3	0.5	1 0.0	23.7	0.1
サルボウガイ	0 0.0	6.1	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.0	3.3	0.1	1 0.1	3.0	0.1	0.0		0.0	0 0.0	0.9	0.0	2 0.0	13.3	0.1
マガキ	0 0.0	0.7	0.0	0 0.0	0.6	0.0	0 0.0	0.2	0.0	0.0		0.0	1 0.1	1.2	0.0	1 0.1	1.6	0.0	0 0.0	1.0	0.1	2 0.0	5.3	0.0
シオフキガイ	1 0.2	0.4	0.0	1 0.1	0.3	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	1.5	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	2 0.0	2.2	0.0
サビシラトリガイ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.0	0.1	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.0	0.1	0.0
シオサザナミガイ科	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	3 0.3	1.1	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	3 0.0	1.1	0.0
ヤマトシジミ	510 97.9	1914.7	0.0	1099 98.6	3834.8	93.8	1365 0.0	4504.7	97.7	1414 0.0	5103.5	98.4	965 99.0	3153.4	97.6	1020 99.5	3247.3	99.3	756 99.7	1864.6	98.2	7129 99.1	23623.0	97.3
ハマグリ	9 1.7	51.2	0.0	10 0.9	80.5	2.0	9 0.0	83.6	1.8	4 0.0	51.4	1.0	4 0.4	41.1	1.3	4 0.4	21.1	0.6	2 0.3	10.7	0.6	42 0.6	339.6	1.4
オキシジミ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	1.0	0.0	0 0.0	0.6	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	1.6	0.0
オキアサリ	1 0.2	5.3	0.0	5 0.4	13.9	0.3	0.0		0.0	3 0.0	5.6	0.1	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	9 0.1	24.8	0.1
ハナグモリガイ	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.0	0.2	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	1 0.0	0.2	0.0
二枚貝綱種不明	0 0.0	2.4	0.0	0 0.0	157.7	3.9	0 0.0	22.8	0.5	0 0.0	19.6	0.4	0 0.0	15.5	0.5	0.0		0.0	0 0.0	13.1	0.7	0 0.0	231.1	1.0
種不明	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	0.5	0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0 0.0	0.5	0.0
合　計	521 100.0	1980.8	0.0	1115 100.0	4087.8	100.0	1374 0.0	4611.3	100.0	1424 0.0	5184.7	100.0	975 100.0	3232.3	100.0	1025 100.0	3270.0	100.0	758 100.0	1899.6	100.0	7192 100.0	24266.5	100.0

表10　貝類同定結果（3）

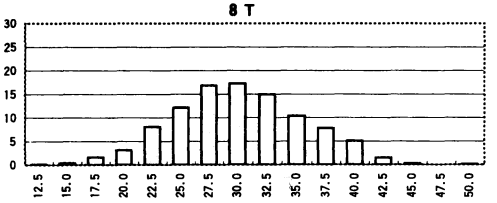
ヤマトシジミ殻長比較



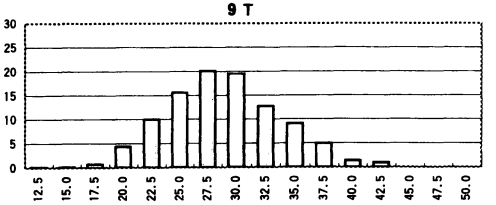
平均	22.38
中央値	22.00
最頻値	22.1
標準偏差	4.44
最小	11.5
最大	38.8
標本数	191



平均	23.33
中央値	22.80
最頻値	24.5
標準偏差	5.60
最小	11.4
最大	39.5
標本数	57

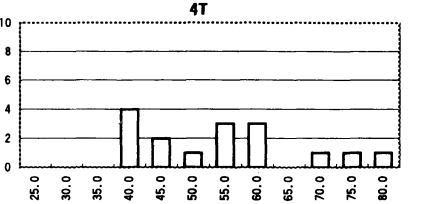


平均	28.82
中央値	28.70
最頻値	25.8
標準偏差	5.62
最小	12.1
最大	48.6
標本数	740

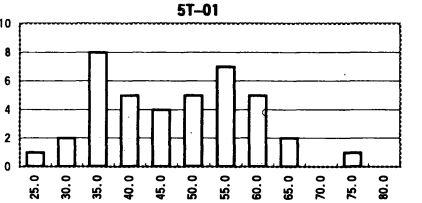


平均	27.61
中央値	27.35
最頻値	28.2
標準偏差	4.91
最小	11.4
最大	41.7
標本数	700

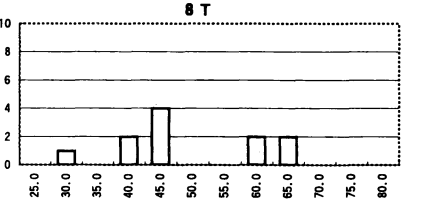
ハマグリ殻長比較



平均	51.56
中央値	50.75
最頻値	39.0
標準偏差	12.76
最小	36.1
最大	77.6
標本数	16



平均	44.75
中央値	45.60
最頻値	34.4
標準偏差	11.31
最小	22.4
最大	74
標本数	40



平均	46.45
中央値	43.00
最頻値	-
標準偏差	11.27
最小	29.6
最大	62.8
標本数	11

注意　横軸はデータ区間...たとえば「12.5」は10～12.5[3]

表11　計測分布（2）

Ⅳ．ま と め

1．貝層の分布とその形成時期について（付図1）

既に述べたように上新宿貝塚では，大きく北側と南側に弧状の貝層が形成されていることに加えて，1Tの西側と南側に比較的大きなブロック状の貝層が堆積していることが，ボーリング調査によって明らかになった。弧状貝層については各トレンチの状況を述べる中で，発掘により得られた所見を記したが，ここではそれらとともにトレンチ調査を行わなかった貝層についても表面観察等からの所見をもとに整理しておきたい。

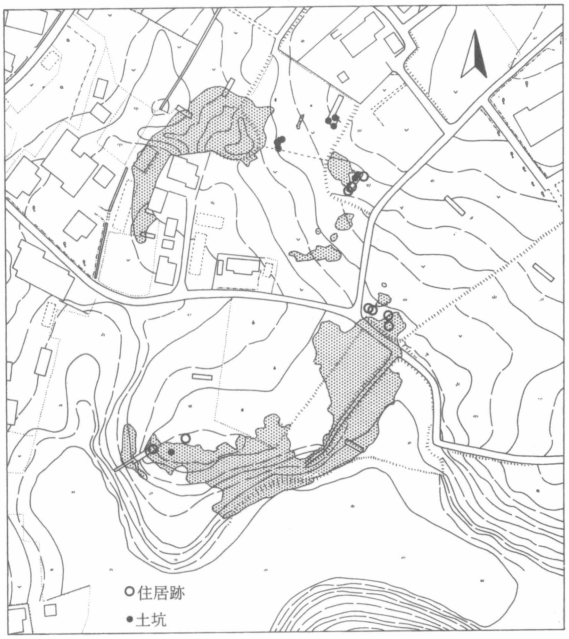
今回調査された貝層のうち最も古い時期に相当するのは，後期中葉の加曽利B式期である。いずれも南側弧状貝層にある4Tと5Tで検出されている。南側弧状貝層のある台地上とその周囲は，立ち入るのが困難なほどの篠林に覆われていた。可能な限りの伐採により，貝層範囲については確定できたが，貝層堆積密度の濃淡までは把握しきれなかった。濃淡まで押さえることができれば，遺構密度を推測する大きな手がかりになっていたはずである。4Tでは晩期前半の遺物包含層も認められ，晩期に至るまで何らかの形で，この付近の土地利用がなされていたと考えられる。なお，4Tの西側で弧状貝層が大きく抉れた部分は，近年の整地作業による削平が行われているためである。一方5Tでは，晩期遺物包含層は存在せず，この付近は遅くとも後期末までに，利用できる用地が飽和状態となっているものと推測される。すなわち，それだけこの付近に加曽利B式期を中心とする後期の遺構及び，貝層が密集しているということであろう。次に北側弧状貝層では，北半の範囲は確定できたが中央部付近は宅地のため，やや不明瞭である。前回のボーリング調査では宅地付近から北側に，貝層が面状のものとして捉えられている。今回の調査では宅地の南側（7T付近）に認められた貝層との連続が捉えられているが，南側弧状貝層と同様に貝層の濃淡までは把握しきれず，少なくとも南側弧状貝層ほどの密度で貝層が弧状に連なっているとは言いきれない。表面観察では，宅地の西側にヤマトシジミを主体に，マガキ，サルボウ，ハマグリ等が混在して散布することが認められた。7Tの混土貝層から出土した遺物は，加曽利B式土器を主体に，少量の堀之内式，後期安行式等があり，北側弧状貝層において観察できる鹹水産の貝は，7T付近が最も多い。北側の8T，9Tで検出された貝のほとんどが汽水産のヤマトシジミで，周囲に見られた遺物の多くが晩期前半であったことからも，北側弧状貝層の堆積はその南端に当たる7T付近から始まり漸移的に北側に向かうと推測される。あるいは前述したような理由で，7T付近の貝層については南側弧状貝層と同時期に形成された面状貝層として捉えたほうが妥当かもしれない。遺跡北東部で北側貝層と南側弧状貝層の開口部となる付近には，1Tの西側をはじめ，いくつかのブロック状の貝層が認められている。1Tの西では，いずれも少量ではあるがヤマトシジミ，サルボウ，マガキの散布が認められる。1Tでは，堀之内1式期の住居跡が重複して検出されている。こ

の南側に認められた貝層は，ボーリングの感触ではそれほど厚い貝層ではなかったが，ヤマトシジミを主体としていることが観察されている。前回の調査で検出されている晩期前半の住居跡と位置的に近く，ブロック状の貝層が遺構内堆積であれば，この付近に晩期の居住域を想定することができよう。

最後に問題点を整理し，今後の調査等の課題としたい。４Ｔ付近（南側弧状貝層の東側部分）は，斜面部下方であることから居住域と考えるよりも，廃棄の場所として利用されていたと思われる。出土した土器の時期的な幅からも，利用期間は長く後期前半から晩期に及んでいる。しかし，いずれの時期においても単なる廃棄の場所としてだけではなく，目前にある現在の低地部分を意識していたことが十分に想定されるため，今後は低地部分についての調査に期待が持たれる。北側弧状貝層については，８Ｔ，９Ｔという比較的近接した位置にしかトレンチを入れられなかったが，いずれも汽水産のヤマトシジミが９割以上を占め，南側弧状貝層とは貝類の組成を明らかに異にする。周囲から出土した土器に晩期のものが主体的に見られたため，晩期の貝層と捉えたが，サンプル採取部分しか発掘していないため，貝層の時期を確定できるものではない。例えば野田市東金野井貝塚では，後期加曽利Ｂ式期の貝層において，汽水産のヤマトシジミが９割以上を占めていることが確認されている。これまでは，北側弧状貝層と南側弧状貝層が別時期のものであることを前提に所見を述べてきたが，北側貝層の下に古い時期の貝層が堆積している可能性も十分考えられるので，この点も今後の調査に向けての課題としたい。

２．遺構の分布と集落の範囲（第35図）

今回の調査では住居跡４軒，土坑９基が確認されている。前回の調査成果と併せても，未だ限られた情報でしかないが，遺跡の比較的外側に設定したトレンチからは，集落の範囲が確定され，遺構を検出できたトレンチでは，遺構の分布について資料的な蓄積を加えることになった。ここでは前回の調査と併せ，これまでの調査成果を整理しておきたい。まず，集落の範囲について述べ，次に時期的に見た遺構の分布を概観する。



第35図　遺構配置模式図

上新宿貝塚では，南側弧状貝層の分布する南側に突出する台地を東西から挟むように谷が進入していることが，明らかになっている。すなわち東西南の三方までが谷により囲まれているわけである。遺跡範囲としては低湿地遺跡の存在が考えられるため，これらの谷部を外すわけにはいかないが，集落の範囲はその立地から見ても比較的容易に限定されそうである。貝塚主体部から離れて設定したトレンチから見れば，３Ｔの東側の谷は，南側貝層の東側から北に向かって進入するものである。３Ｔ西側の表土中から出土した土器片は少量で，この付近が遺跡東側の限界を示すものと思われる。２Ｔでは台地平坦面上であるにかかわらず，遺構等は全く検出されなかった。出土遺物も僅少で，３Ｔの調査結果と併せ，２Ｔの北及び東側に集落の範囲が及んでいるとは考えられない。10Ｔでは，トレンチ南端から土坑３基が近接する状況で検出されているが，北側は空白である。10Ｔの状況を見る限りでは，これより北側に集落の展開はないものと思われる。９Ｔでは遺構の検出はないものの，晩期前半の良好な包含層が認められており，遺跡範囲とともにさらに北に広がるものである。いずれにしても９Ｔ付近を除けば，集落の範囲は貝層外縁を結ぶラインの外側に大きく広がるものではなく，比較的コンパクトにまとまるものと思われる。

これまでに確認されている遺構は，住居跡では堀之内式期，加曽利Ｂ式期，安行２式期，安行３ａ式期のものがある。土坑ではやはり後期と思われるもの，晩期前半のものが認められている。堀之内式期の遺構は，１Ｔでの検出状況から，付近に高密度で分布するものと予測できる。また，昭和39年から41年の調査では南側弧状貝層の中央部北縁付近から床面が確認されたほか，５Ｔ付近で人骨を伴う土坑が検出されている。南側弧状貝層である４Ｔ，５Ｔで確認された貝層は，加曽利Ｂ式期を中心とするものであり，当貝層下には堀之内式期から加曽利Ｂ式期の居住域を想定できよう。後期後半の安行式期に属する住居跡は，今回の調査では検出されなかったが，前回では南側弧状貝層の北端部付近（第２図，Ｄトレンチ）から検出された安行３ａ式期住居の下部から確認されたことが報告されている。また，その東側に近接して設定したトレンチからも安行２式を主体とする土器が出土し，住居跡状の落ち込みが見られたとの報告がなされている。今回の調査でも後期安行式の土器は各トレンチから出土し，その分布範囲の広さが確認されているので，当該期の居住域は比較的広い範囲に及ぶことが考えられよう。続く晩期では，前述のように安行３ａ式期の住居跡が１軒検出されているのに加え，今回の10Ｔ，11Ｔから晩期前半期の土坑が検出されている。両トレンチの状況からは，10Ｔ南端から11Ｔ付近に当該期土坑群の存在が推測される。今のところ土坑群の性格を明らかにすることはできないが，いずれにしても遺跡北東部の貝塚開口部付近から貝塚の内側を中心に，晩期の居住域を想定することができよう。また，貝塚の中央部に比較的近い位置に設定することができた６Ｔからのみ，土偶，土版等の特殊な遺物が出土していることで，後晩期を通して貝塚中央部が居住域とは異なった目的で利用されていたことが窺われる。

3．おわりに

限られた期間での調査であったが，上新宿貝塚を把握するための基礎的な資料は十分に得ることができたと思う。もちろんこれがすべてではなく，新たに提起される問題点も多い。出土遺物の全体的な傾向として感じられた石鏃等の生産用具類が少なく，骨角牙製品をはじめとする装飾品が多いことも当貝塚の持つ特徴のひとつだが，生産活動についても今後周辺の遺跡との関連を考える中で解明されてゆかなければならないだろう。

参考文献

阿部正功「貝塚土器塚横穴所在地名表」『東京人類学雑誌90』　1893

赤堀英三「下総下新宿貝塚の貝類」『人類学雑誌14』　1929

石橋宏克ほか『銚子市余山貝塚』（財）千葉県文化財センター　1991

遠藤邦彦・小杉正人・松下まり子・宮地直道・菱田　量・高野　司「千葉県古流山湾周辺域における完新世の環境変遷史とその意義」『第四紀研究第28巻第２号』　1989

太田文雄『余山貝塚確認調査報告書』（財）千葉県文化財センター　1989

岡田光広『西初石２丁目遺跡』西初石２丁目遺跡調査会　1981

小栗信一郎「上新宿貝塚採集のオオツタノハ製貝輪について」『流山市史研究第３号』　1985

小栗信一郎『三輪野山遺跡群』流山市教育委員会　1989

上川名　昭ほか「千葉県上新宿貝塚発掘略報」『日本大学第３高等学校研究年報第11号』　1966

上川名　昭「千葉県流山市上新宿貝塚」『日本考古学年報19』　1971

上川名　昭『古代学論攻　創刊号』生田古代学会　1993

上守秀明『袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター　1993

金子浩昌・忍沢成視『骨角器の研究　縄文篇Ⅰ』慶友社　1986

斎木　勝ほか『千葉市中野僧御堂遺跡』（財）千葉県文化財センター　1976

蔀　淳一『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』（財）千葉県文化財センター　1990

鈴木公雄・林　謙作編『縄文土器大成４　晩期』講談社　1981

出口雅人『千葉市誉田高田貝塚確認調査報告書』（財）千葉県文化財センター　1991

中根君郎「下総下新宿発見の紡錘車状土製品」『史前学雑誌4-3』　1932

中谷治宇二郎「下総下新宿貝塚発掘の双口土器」『人類学雑誌43』　1928

直良信夫「下総上新宿貝塚発掘の自然遺物」『人類学雑誌56』　1941

野口義麿編『縄文土器大成３　後期』講談社　1981

早川　泉ほか「千葉県上新宿貝塚踏査報告」『若木考古71』　1964

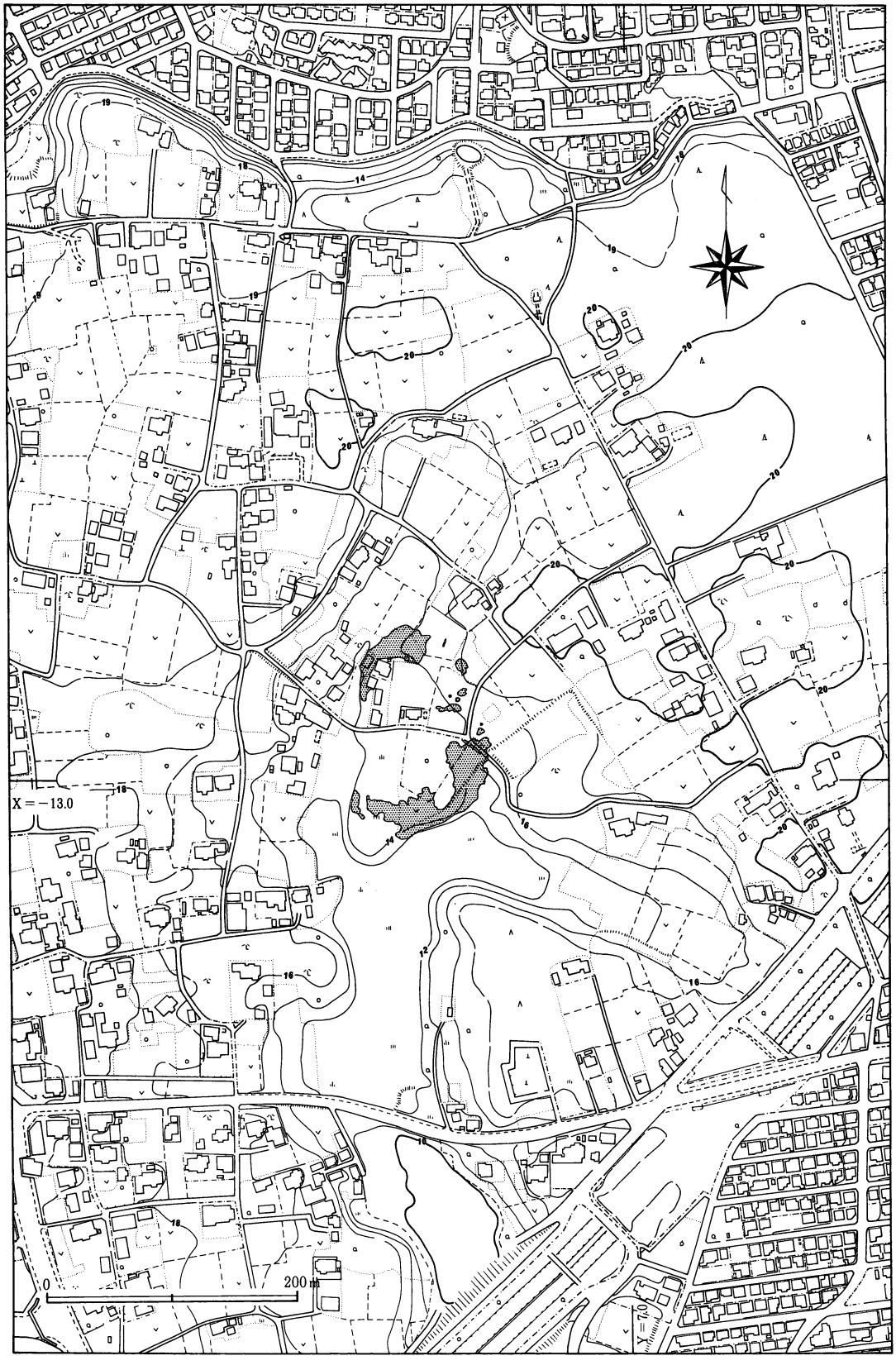
宮内悦蔵・赤堀英三「下総国東葛飾郡下新宿貝塚遠足会記事」『人類学雑誌43』　1928

無名姓「下総国上新宿貝塚遠足会記」『人類学雑誌55』　1940

安井健一『野田市東金野井貝塚発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター　1994

四柳　隆『小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書』（財）千葉県文化財センター　1992

写　真　図　版



第36図　上新宿貝塚の周辺地形

上新宿貝塚周辺の航空写真（平成６年撮影）縮尺約１：5,000

1．遺跡遠景（南西から）

2．遺跡近景（南東の谷から）

3．遺跡近景（西から）

ボーリング調査風景

1T－001南から

1T－001土器出土状況

1T－003北から

2T西から

3T西から

4Tの北から

4T貝層断面

各トレンチの状況(1)

4T貝層東から

5T西から

5T土器出土状況

5T－001南から

5T－001土器出土状況

5T－001南から

6T西から

7T東から

各トレンチの状況(2)

8T東から

8T貝サンプリング部分

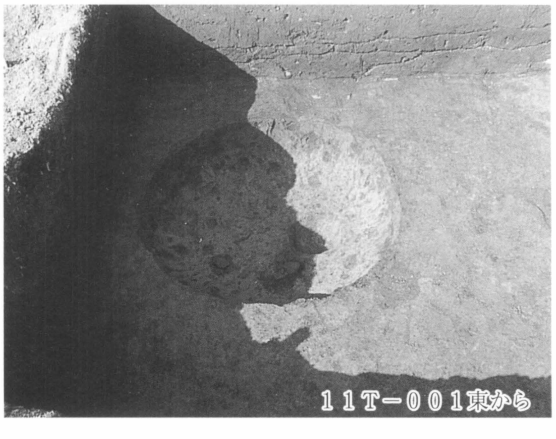
9T貝層北から

9T南から

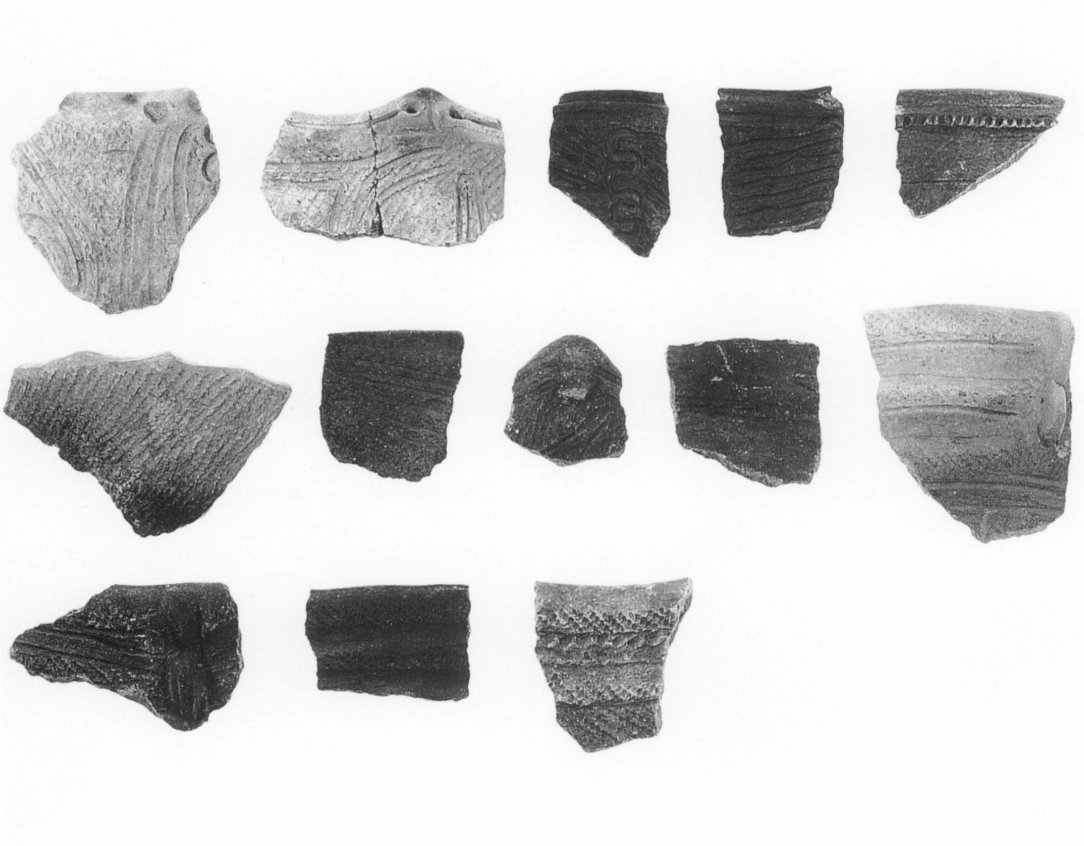
10T−001・002

10T−001西から

11T北から


11T−001東から

各トレンチの状況(3)



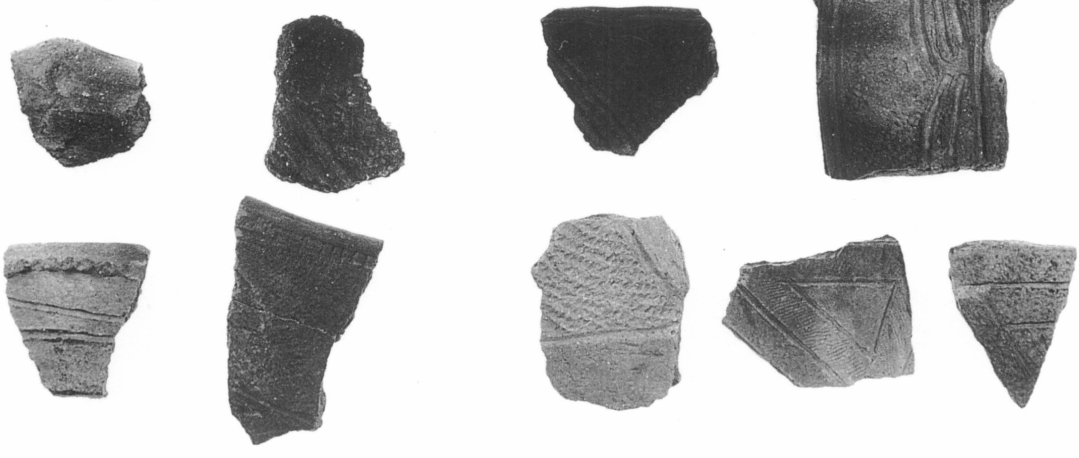
1．1T出土土器

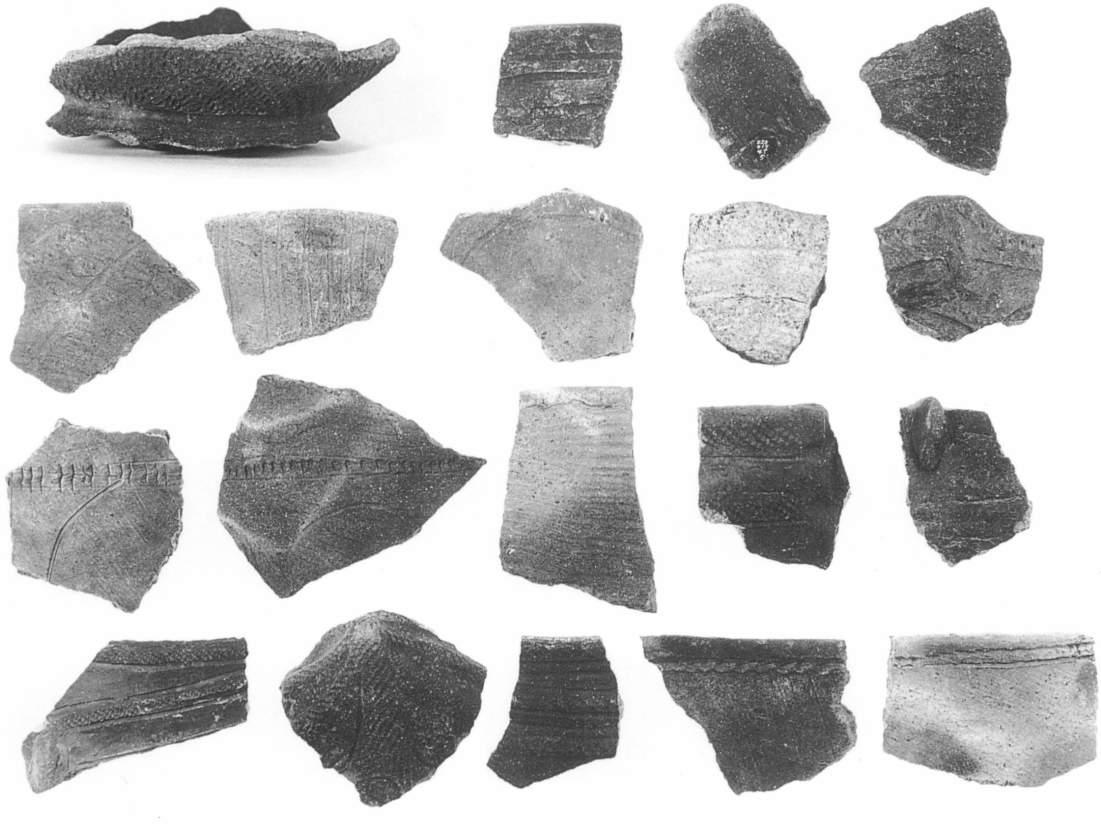
1

2

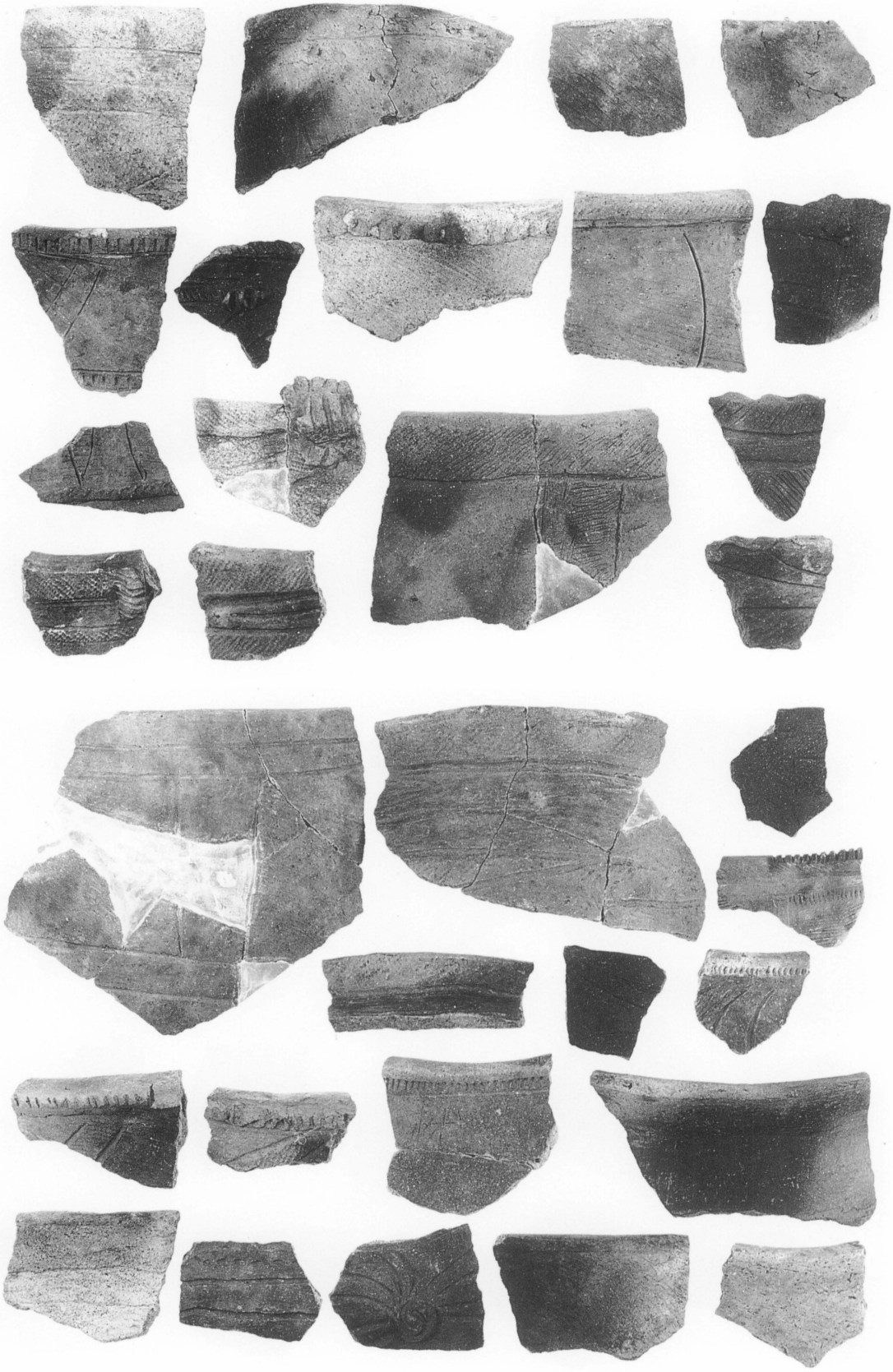
2．1T－001出土土器

1．3T出土土器

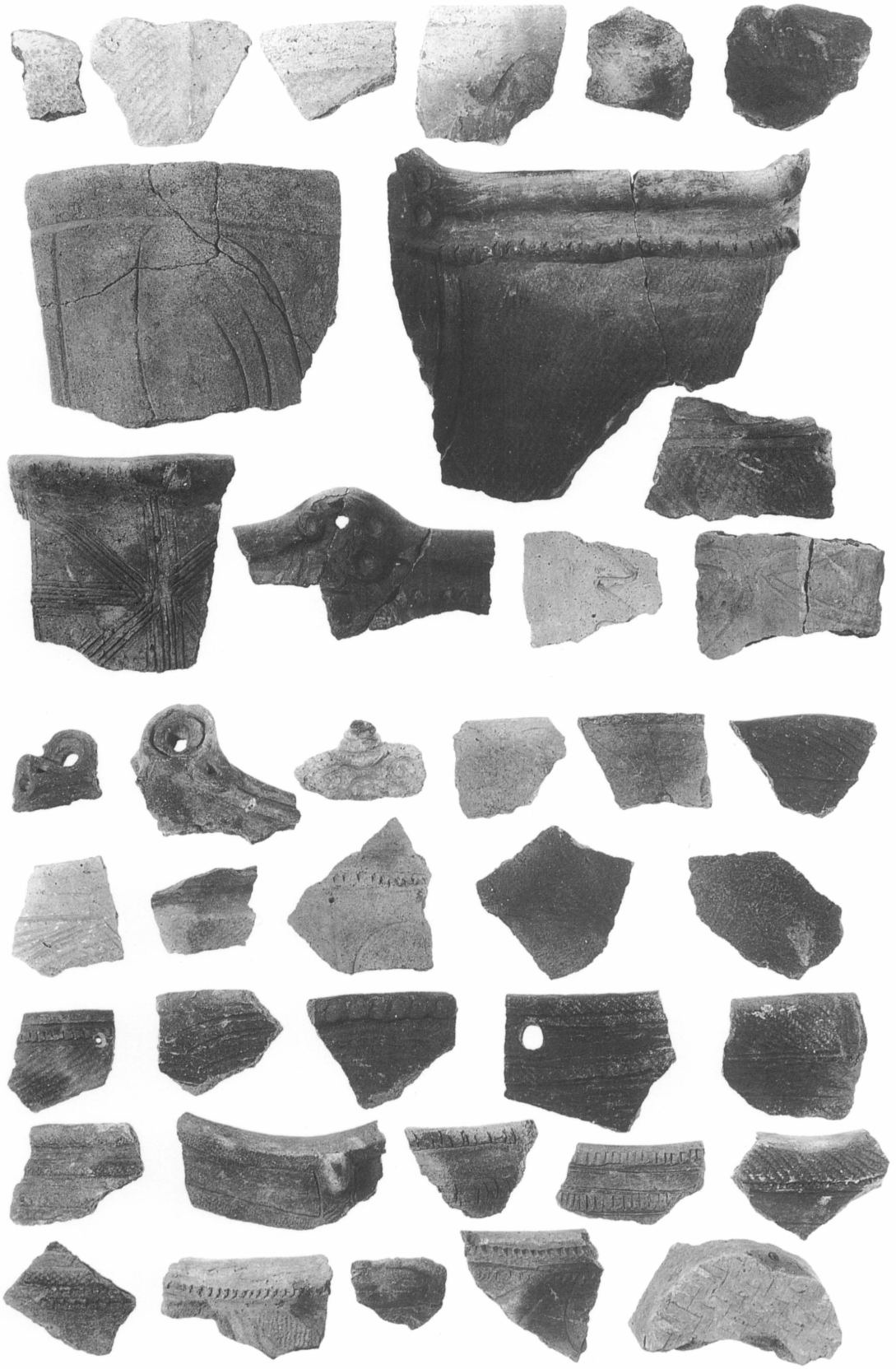




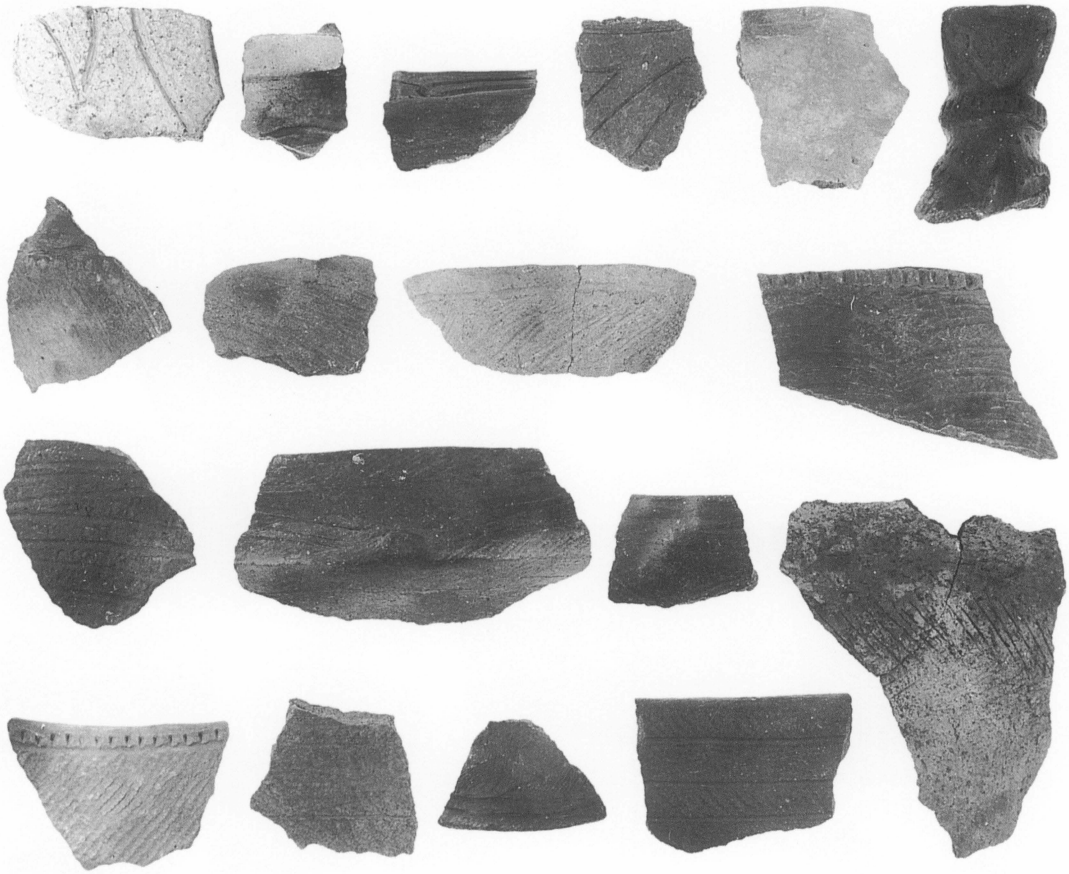
2．4T出土土器(1)



4 T出土土器(2)



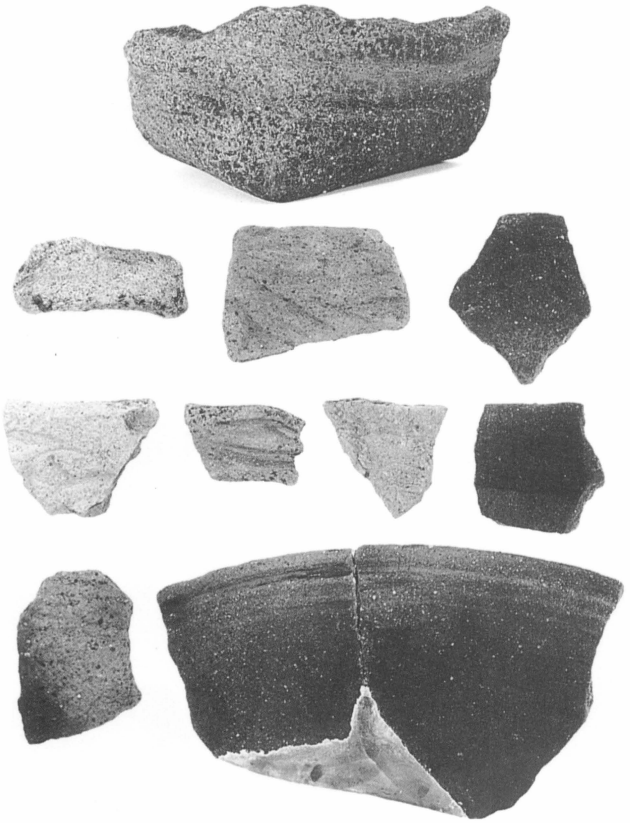
5 T出土土器



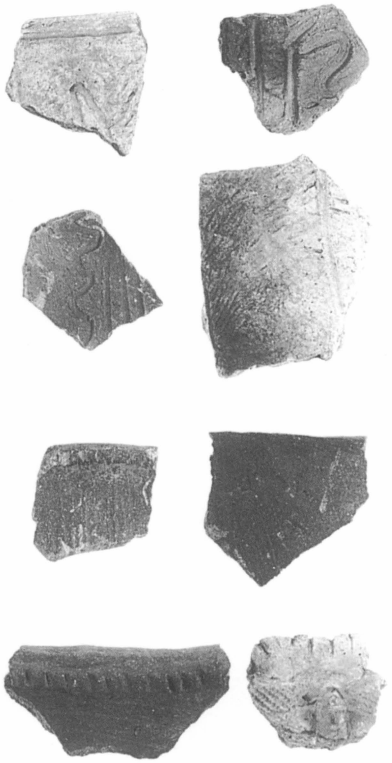
17

20

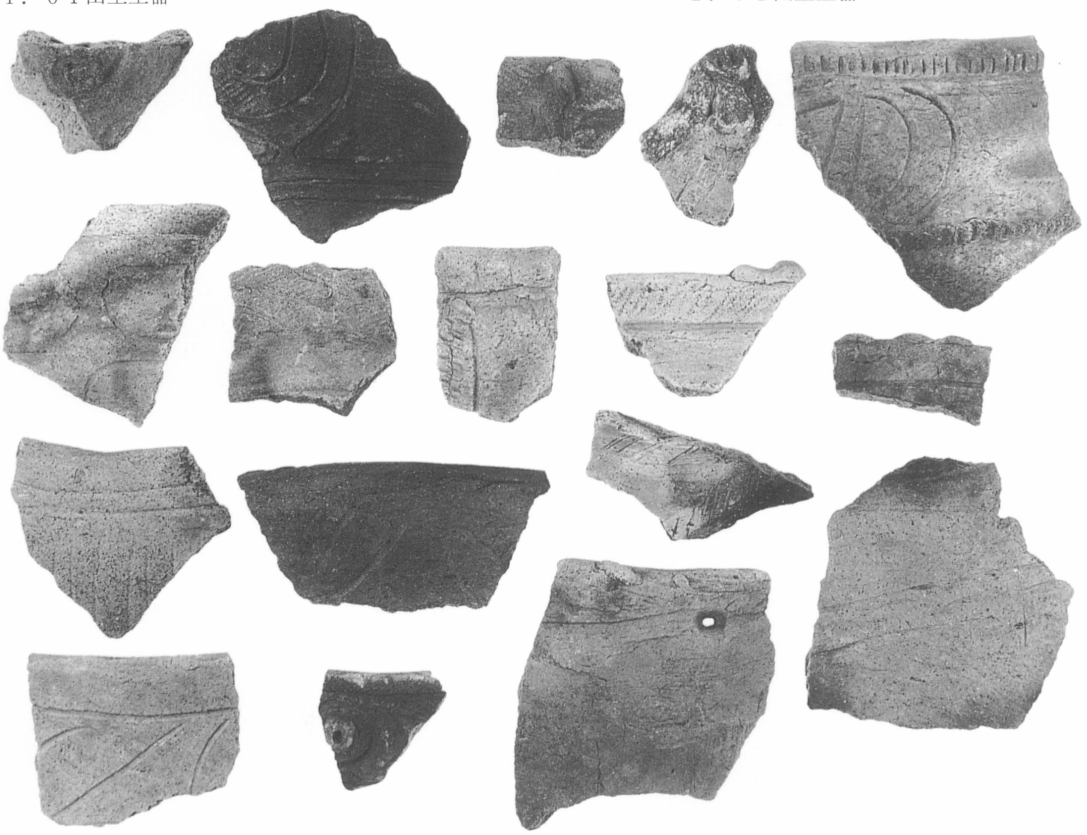
5 T－001 出土土器



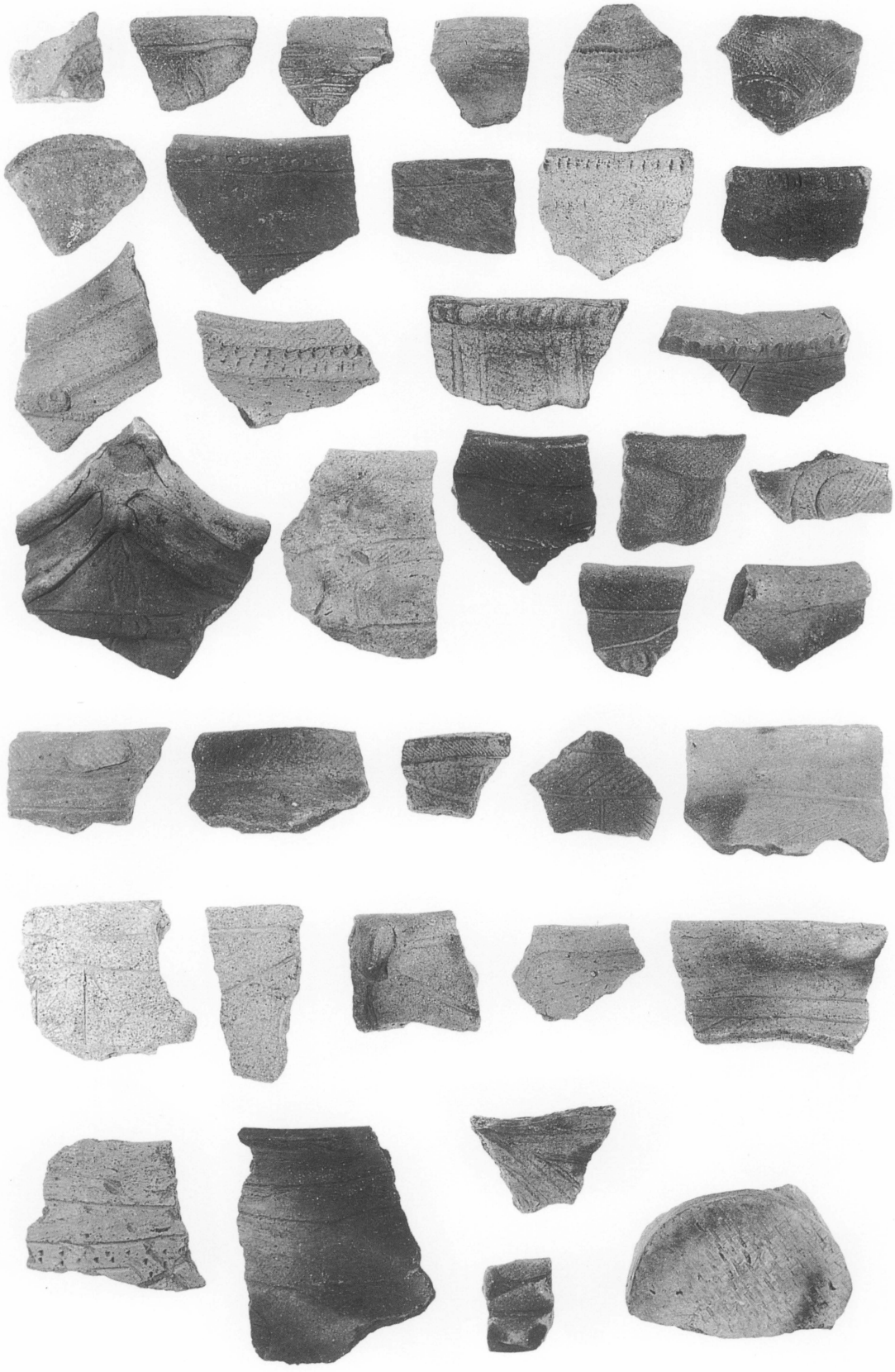
1．6Ｔ出土土器



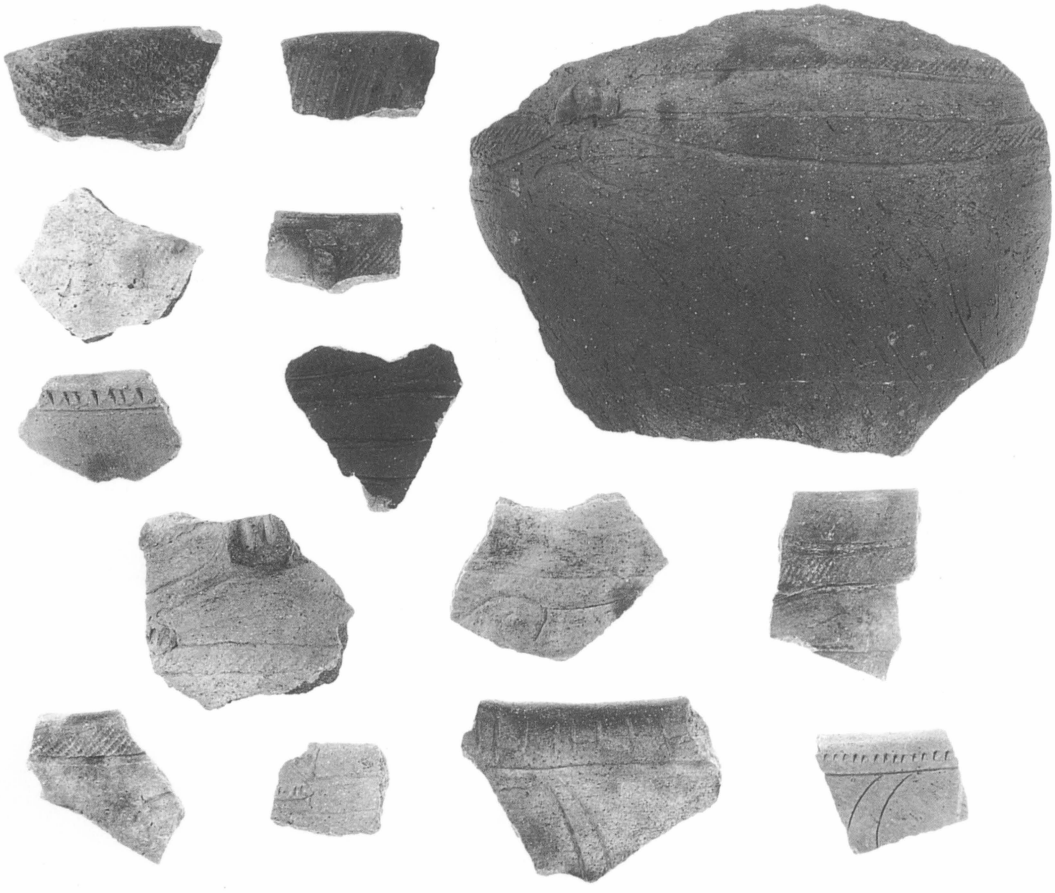
2．7Ｔ出土土器



3．8Ｔ出土土器



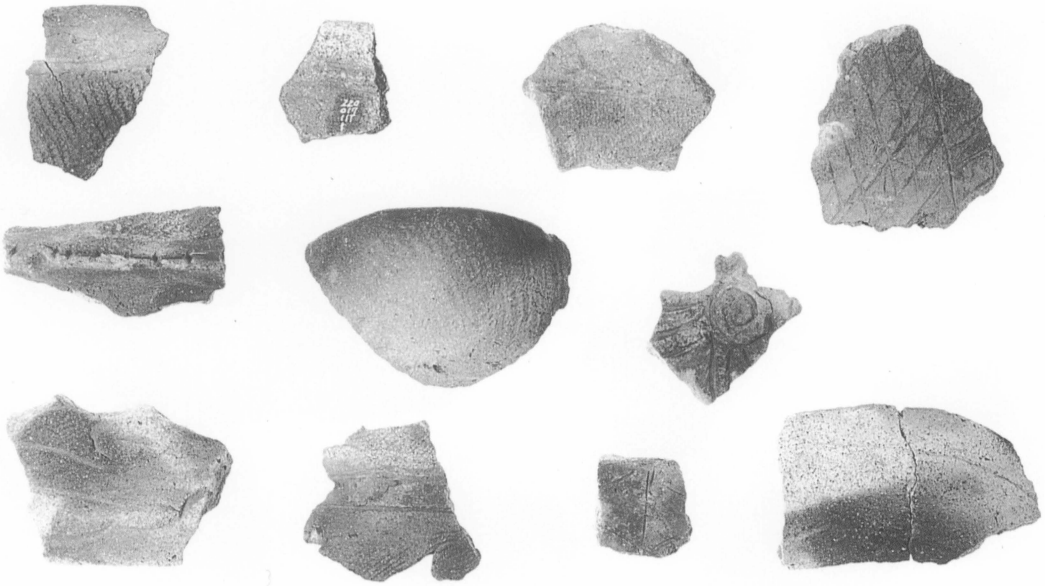
9 T出土土器



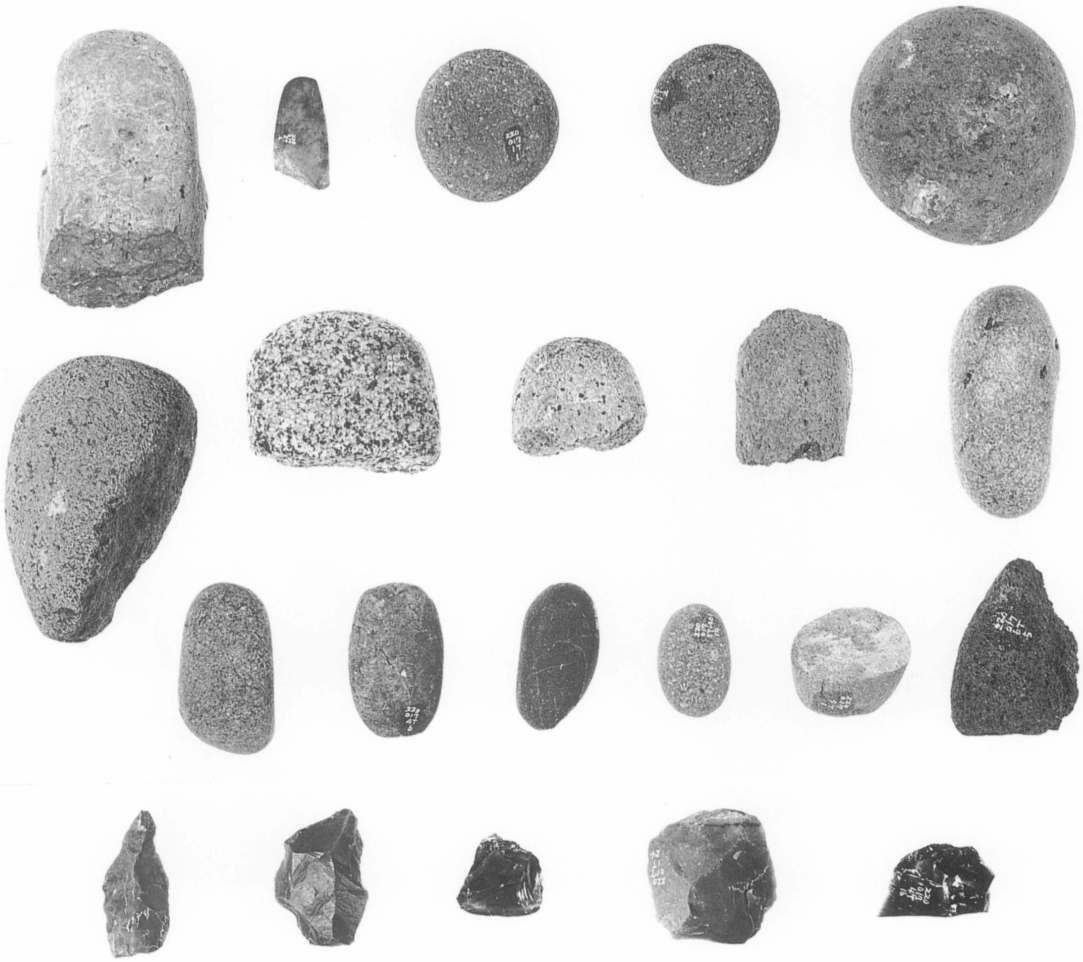
1．10T－001出土土器

2．10T－002 出土土器

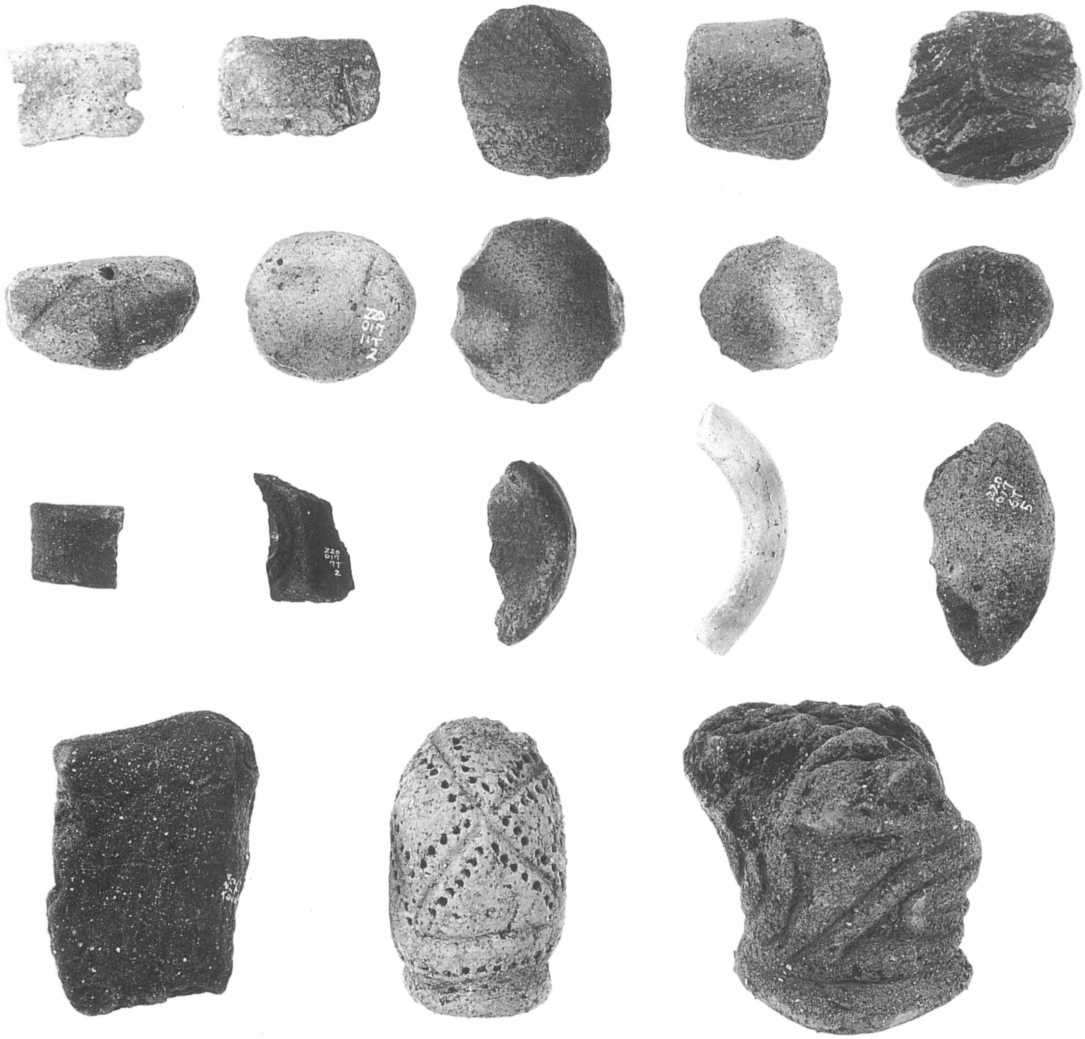
3．11T－001 出土土器



1．11T出土土器



2．石器



1．土製品

2．骨角牙製品

上新宿貝塚地形測量図

0　(1：1,000)　100m

抄　　録

ふ り が な	ながれやましかみしんしゅくかいづかはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	流山市上新宿貝塚発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第２７１集
編 著 者 名	岡　田　光　広
編 集 機 関	財団法人千葉県文化財センター
所　在　地	〒284　千葉県四街道市鹿渡８０９番地２　　TEL 043 (422) 8811
発行年月日	西暦　１９９５年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上新宿貝塚（かみしんしゅくかいづか）	千葉県流山市上新宿（ちばけんながれやましかみんしゅく）	12220	017	35度 53分 00秒	139度 54分 32秒	1994.10.03 ～ 1994.10.31	200 ㎡	国庫補助事業による学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上新宿貝塚	貝塚 集落	縄文時代	貝層 竪穴住居跡　４軒以上 土坑　６基以上 遺物包含層	黒浜式～安行３ｄ式土器 土偶・耳飾などの土製品 打製石斧・磨石などの石器類 ヘアピンなどの骨角器	相弧状に広がる貝層の分布範囲を把握 各時期ごとの居住域を確認 良好な遺物包含層の存在を確認

千葉県文化財センター調査報告　第271集

流山市上新宿貝塚発掘調査報告書

平成７年３月31日

発　行　財団法人千葉県文化財センター
四街道市鹿渡８０９番地２

印　刷　有限会社　ミリオン印刷
千葉市中央区南町３丁目４番２号

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。